
ONE PIECE 『D』越える者

sidou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 『D』越える者

【Nコード】

N42180

【作者名】

sidou

【あらすじ】

死後、女神様に愛された少年は夢にまで見た『ONE PIECE』の世界に転生させてくれることに！！

生前、平和に過ごしたいと願っていた彼は今度こそ夢を叶えるため行動する。

しかし、『ONE PIECE』の世界に転生した彼を待ち受けていたのは想像とは異なることばかりだった。

「ちょいシリアス? + コメディ + 恋愛? + 二次創作」

第一話 終わりの始まり（前書き）

人生初の小説です！！

至らぬ点多々あると思いますが宜しくお願いします！

読んで頂いた後に感想とか、こうしたらもつと良い表現に出来るとかアドバイスを頂けたら凄く嬉しいです^^

第一話 終わりの始まり

ぴぴぴぴぴぴ

その電子音で目が覚めた。

眠気を振り払い、音の発信源を止めるため手探りでその機械を掴み上げ、音を止める。

まだ目が慣れず微かにぼやける視界でその針の位置を確認する。

頭も覚醒していない為、しばしその機械と睨めっこ状態になるが一気に目が開かれた。

（9時20分！？）

HRが始まるのは9時30分。

自分の家から自転車で急いで行っても10分はかかるので、いくら急いでもHRは間に合わない。

（とりあえず急がなきゃ！！）

慌てて指定の学生服に着替えて無造作なボサボサの頭は気にせず眼鏡を掛けて急いで自宅を駆け出た。

自転車で駆けるものの自分の体力が中々続かないため途中途中緩めながら進む。

赤信号も気にせずそのまま突っ切る。

そして念願の校門が見えはじめると同時にH Rの鐘が響き渡った。
最後の力を振り絞りやつと着いた駐輪場から走って下駄箱に向かう。

靴を履き変え教室に向かおうとした所で自分のクラスの教師と擦れ違ってしまった。何とかクラスに居た事にしかかったのだが、ごまかせるか？

そう願いつつ擦れ違った教師を恐る恐る振り返ってみれば僅かに口端を上げてる表情をしていた。

「海道は遅刻つと」

のおおおおお！

そう一言発して目の前で出席簿に遅刻と書き記す男性教員。

皆勤賞を狙っていた身としてはかなり痛い。

これと言って得意なものが無い為、皆勤賞ぐらいはと気合いを入れて望んでいた訳だが、それももう何の意味も成さない。死のう・

そんな考えが頭を遮ったが、まあ終わったことは仕方ないので次の目標を考えることに。

人間立ち直りが重要なのだよ。だがかし・・・

渋々教師の後ろ姿を確認してから、俺の一年と半年を返せバカヤロ！。と自身の心の中で最後の呪詛を唱え教室に向かうことにした。

HRが終って直ぐにガラッと教室に入って来た俺に一同の視線が向けられる

そこらかしこで表情はバラバラで、ニヤニヤしている奴らや、うわぁといった表情をしている者、外を眺めてる奴で別れていた。

視線も痛いのでそそくさと自身の席に座る。そこで先程まで外を見ていた人物に挨拶し、そいつの後ろの席に座る。

俺の席は窓側の前からと三番目とまあ中々の席だ。

そして前の人物は外を眺めながら口を開いた。

「珍しく遅刻か・・・」

「いやゝ、最近ワンピースが面白くてさ！午前3時まで何度読み直したかわかんないよ！俺は悪くないよ？面白しろすぎたワンピースが悪いんだよ！」

「お前が悪い」

「だっ、だつてさゝ」カサ

っと小声で話している時に何かが自分の頭に当たりそのモノを確認すると紙玉だった。

クシャクシャにされているが何か書いている事が分かった為その中身を確認してみる。

『昼休みになったら屋上に来るように！！来なかったら縛り上げるから覚悟しておけ！！』

そんな内容を確認して当事者だと思われる人物に視線を向ければ先程からニヤニヤしていた奴と目が合った。

視線をそらし再び前の方に目を向け、ため息がこぼれた。

そう、俺は今イジメにあっている。

細かく言えば入学三週間でイジメのターゲットにされてしまった。

それから今まで、現在1年と半年間、そのままこき使われている。

正直もう嫌だと伝えようとした事もあったが、自分と同じ、こき使われている奴が目の前でボコボコにされ、足がすくんでしまった。

それからは何かと呼び出される度に買い出しに行かされる。

しかも買ってきたら買ってきたで料金は払わない。今は持ち合わせが無いから貸しという。そんなやり取りが繰り返されている。

登校拒否しようかとも考えたがそんな事する位なら辞めた方がまだマシ。しかし辞めたら辞めた後で孤児院の院長が悲しむだろうとも思った。それに元々そんな考えに^{すた}廃る程、金銭面に余裕は無いし、送り出してくれた院長等に申し訳がたたない。

そして考えた末に頑張つてイジメに耐えつつ学園生活を終える事を選んだ。

そんな学園生活でも悪いことだけじゃなかった。実際今さっき喋っていた友達、山口伸也は自分の観点で物事考えている為、周り評価に左右されずに自分と接してくれている良い奴だ。

そんな友人に出会えた事はとても幸せなことだと思う。

「それで？」

「え？」

少し考えに老けていると伸也からの呼びかけだと気付く。

「それでどんな内容だったんだ？」

素っ気ないが結局は最後まで俺の話を聞いてくれる伸也。

やっぱり良い奴だ。

さっきまで落ち込んでいた表情が自然と笑みを浮かべる。

「うん！それでさ」

それから休み時間の間にワンピースの事について語りだした俺を伸也は疲れつつも最後まで付き合ってくれた。

そして呼び出しがされてた昼休みになったので指定の屋上に向か

う。

まあこんな時はだいたい決まってる。

食べ物を買って来いだの、お金を貸してくれたのそんな内容だろう。

そんな予想をしつつ進む度に足どりが重くなるが、気付けば屋上の扉。

扉の向こうではぎやははは！と盛大に笑ってる声が複数。

屋上の扉を開ければ五人で鉄柵の前で囲んでいる奴らに目が向く。

その内の一人に目を向ければ向こうも気づいたのか俺を呼び出した同じクラスの奴がコチラに近付いてきた。

そして俺を扉から遠ざけるや扉を閉めた。

そのまま鉄柵の方で戯たわむれている連中の元まで追いやられる。

いつもと違う行動に少し戸惑いつつ他の面々を見るやいかにも不良と言った感じの人達だった。

その内の一人が、おい、と声をかけてきて、こっちを睨にらんでいた。確か三年の人だったと記憶してる。三年は三年でもこの学校の頭を張ってる人だ。そんな人物に睨まれ自然と目を合わせない様にした。

するとッチ！と盛大に舌打ちをする音がしてチラッと見てみれば余計に眉間にシワが寄った人物の顔がそこに在った。しかも近い……

「俺はこんな奴に負け たつてのかよ！」

「まあまあ仕方ないって彼女変わり者が好きだって噂だし」

目の前で怒っている三年に宿める^{なだ}様に言う茶髪の人。

「てめえ！俺が惚れた女の悪口を言うとはいい度胸じゃねえか！！」

そのまま俺からの睨みが茶髪の人に行くが抑制の声をあげつつ三年の^{なだ}人を宿める。

「あ、あの……」

意を決死って話せるだろうと思った茶髪の人に声を掛けてみた。

「ん？」

「どついう情況が教えてほしいんですが……？」

恐る恐る聞いてみると、ああ、とタネを返して答えてくれた。

「この三年のトップが好きになった娘が君を好きだったって話したよ」

「……………」

一瞬何を言ってるのか分からなかった。

この現実生まれてから17年そんな事を言われた事はなかったし知る筈もなかった。

何せ自分は孤児院育ちで学校の友達と関わりが余り無かった。学校が終わったら弟妹達の世話をしたからだ。それから学校では付き合いが悪いからもう誘わないということになったし、自分も兄弟の相手が出来るので願ったり叶ったりだったから何も言わなかった。

そして高校に通い始めたら一人暮らしをして良いと言われた。院長達も今まで弟妹達の世話をしてくれる代わりに友達と遊ぶ時間を^{ないがし}蔑ろにさせてしまった事を謝っていた。

しかしこちらとしては育ててくれてるだけで感謝してるので謝れる義理はない。

そして高校に入学して学校が終わってから特にやることも無くなってしまったのでアルバイトを始めた。

学校から1時間程行った喫茶店で雇ってもらってる。わざわざ遠い場所で雇ってもらった理由はやはり自分のイメージの悪さだ。

イジメにあってるので学校の不良が来たら店に迷惑がかかってしまふ事が心配だった。実際そんな連中が溜まりにする様な店には自然と客足も絶えてしまふと考えた。

なので不良達の目に触れない様な遠い場所で働く事にした。

店の人がまたいい人で事情を話したらこんな自分でも雇ってくれた。その時働く条件としてせめて顔が見えるくらい髪を整えてくれと言われたので仕事の時は髪をワックスで簡単に整える様にしている。

なぜか知らないが初仕事の時に店長の人が目輝かしていた事が今でも忘れられない。

ゝ やっぱり変だったでしょう？こついうのは、不慣れで

ゝ そ、そんなことないわよ！ とっても似合ってると思うわ
よ？

ゝ ……そうですか。

ありがとうございます（微笑み）

ゝ ぶはっ！

ゝ っだ！ 大丈夫ですか！？

ゝ だ、大丈夫大丈夫。少ししたら落ち着くと思うから

あの時、似合っていない髪型を気遣ってくれてるんだって思った。
改めて思うとホントにいい人だなあ。でも鼻血がいきなり出るのは
病気ではないのかと思う。それか鉄分の取りすぎか？今度何か栄養
バランスの取れた食事でも提供しよう。

そんな事に老けていると目の前の不良の三年生が胸倉を掴みあ
げてきた

「なにボーっとしてんだてめえ！ なめてんのか！？」

ああん！？と付け加えると更に腕に力が増し鉄柵に押し付けられる。

まあまあと再び三年を抑制する茶髪の人。

「それでさあ君。その人の事諦めてくれない？ 見ての通りこの人がいつキレて襲い掛かって来るかも分からないし。

それと最近、山口と一緒に居る所をよく見るけど、あんまり調子に乗らないでくれるかな？」

諦めるも何も自分はその人の事を全く知らないので関与のしようがない。

それに伸也のことに關しては訳が分からない。調子に乗るも何も俺は伸也と喋りたいから喋るのであって別に調子に乗った覚えは無いということだ

「あの……その人の事は知りませんが、俺の友達付き合いについてはどうこう言われる筋合いは無いと思います……」

そう告げると不良達も意外だったのか驚いた顔をしている。しかしその驚きの表情が段々と怒りの形相に変わっていく。

「分かった。ならこうしよう。君はこれから山口の奴と口をきかない。それでこの場は勘弁してあげるよ」

全く手の掛かる子だなあ、と言う茶髪の不良。………だけど

「もう一度言います。俺の友達付き合いについてはどうこう言われる筋合いはありません！」

二度も反抗した自分を見据え呆れたように茶髪の不良が俺のよく知るクラスの不良に命令した。

「ああ、もういいや。めんどくさい。おい、こいつシバいといて。それからまたお願いするから」

やれやれと言った感じに茶髪の不良が頭を抱える

そして同じクラスの不良が俺の胸倉を掴み殴ろうとし、思い切り腕を振りかぶった時だ。

バン！ と勢いよく開いた扉から現れた人物によってその攻撃は遮られた。

不良達はそのまま扉の方を向いたので俺も視線を向ける。

するとそこにはこの学園の数少ない友人である山口伸也がいた。

伸也は下を俯きながらコチラにすたすたと歩んで来て2メートル位前で立ち止まる。

無言で立ちはだかる伸也に気圧され不良達も僅かに後ずさる。

第二話 終りの始まり2

「・・・すいません。そいつ返して貰えませんか？俺の大切なダチなんで」

その言葉と行動にその場に居た全員が驚愕した。

あの山口伸也が頭を下げ、更にはお願いをしに来たのだ。

入学当初から問題視されてた暴君に。

この噂は学園では割と有名な話だが彼、山口伸也は誰も寄せ付けようとしないうとしない部類の人間で近付いてきた奴には容赦しないとか、睨みつけただけで人を殺せるだとか言われていた。

そんな彼を周りの人達は『暴君』、『人間ブリザード』等と読んでいた。

入学当初、先輩に呼び出され十人程の集まりを返り討ちにした山口伸也は、それからというものの襲い掛かって来る者が後を絶たなかった。

一月もその喧嘩が続けば流石にそこかしこに怪我を生おつてしまい、横たわっている伸也の前に、偶然通りかかった彼。

、 大丈夫ですか！？

学園に入ってからあまり良いことが無かった伸也は当時ふて腐れていた。入学当初に喧嘩を売られ買っただけでやら後を絶たない連中のため息

がこぼれた。

ゝ 大変！こんなに血が出てる！

朦朧もうちゅうとするなか、意識を手放してしまった俺は目が覚めたら見知らぬ部屋にあり、辺りを見渡せば一つの影が在った

ゝ よかった。目が覚めたんですね

それからソイツと少し話した。始めこそは落ち着かなかったが時間が経つに連れて引き締めていた気が緩ゆるまるのが分かった。

そうして話している内に、ふと思ったことが口から出た。

ゝ お前俺が恐くないのか？

ポカン……。と間がひらいた後にソイツは

ゝ なにが？

どうして俺の事が恐いのか聞いてきたソイツの発言に俺は久しぶりに盛大に笑った。

自信過剰な訳ではないが自分は現在、学園では悪い意味で注目されている。そんな自分を知らない奴はこの学園にはいないだろうと思っていたが何処か自惚うぬれていた所があったようだ。

ゝ 悪いな。改めて自己紹介をする山口伸也だ

俺の名前は海道。海道かいどう 健太けんた

それから俺は健太とつるむになった。

俺の・・・友達だ。

伸也の行動に驚いた不良達は少しボーっとしていた。

そして少ししてから先程の茶髪の不良が話しを始めた。

「へ、へえ。お前でもそんなこと言う時つてあるんだ」

これは良いもんが見れた。と一人、頷くうなず茶髪の不良。

「まあ返してほしいなら、それなりの態度があるんじゃない？」

さも当然とソイツは言い放った。

そして伸也も理解しているのか、その膝と手を地面に付けると、再び頭を下げ始めた。

「ソイツを返して下さい。お願いします」

「ぷっ！くっくくく！だいたい、お前始めから生意氣過ぎなんだよ。入学した時にお前から受けた傷は今だに治らねえしよ。疼くんだよ。お前を見るたんびに」

そう言い茶髪の不良は前髪をかき上げその傷痕を見せ付け伸也の後頭部を踏み付け始めた。しかし伸也は一向に表情を変えようとしな

い。

そんな伸也が気に食わないのか、更に足に力を入れる。

そして散々踏みつけた後に息切れ、その茶髪の不良はポケットを漁り、折り畳み式のナイフを取り出した。

興奮してるのか目がいきかけてる。

「・・・めろ・・・」

そんな光景を目の当たりにして気付けば抑制の声が出ていた。

あ？と言いながらコチラを睨みつける茶髪の不良。その顔はさつきまでとは打って変わっており、つり上がった細い眉、残忍で興奮に歪んだ唇に瞳孔が開きがちになっていた。

そしてそれらの相貌ようすうを向けられ再び恐怖感に刈られた

「なんだお前？何か文句あるわけ？」

ナイフをコチラに向け段々と近づいてくる不良。

完璧に標的が伸也から俺に移り今にでも飛び掛かってきそうなその不良を見据え、足が震えながらも何とか言葉を続けた。

「もうやめて下さい！伸也との関係以外でしたら何でもしますから・・・もう、これ以上伸也を傷付けないでください・・・」

「・・・良いよ。ならお前、ここから飛び降りろ」

平然とした表情で冷淡と言い放つ茶髪の不良。

伸也の方に顔を向ければコチラを見詰めている伸也がおり、その表情はやめとけと言っている様だった。それでも

「それで、やめてくれるなら・・・」

そして言われた様に鉄柵をよじ登り、柵の反対側に移動する。

後ろを振り返ってみればニヤニヤと笑みを浮かべているその茶髪の不良以外の人達は三年のトップを始め、皆顔が青ざめかけていた。

やり過ぎだろ。とかもう勘弁してあげればいいのに、とヒソヒソ話し合う他の不良。

「な、なあいくなんでもやり過ぎじゃね？これで本当にコイツが飛び降りたりしたらシャレになんねえよ」

は？と茶髪の不良が三年のトップを見据えた。

「なに言ってるの？これから面白くなるって時に」

「で、でもよぉ・・・」

柵の反対側で言い争ってる不良達。

気付くのが遅すぎた。三年のトップよりこの茶髪の不良の方が断然危険な奴だということに。

今も三年のトップを丸めこめ、再び俺に早く行けと言い始めた。

そして屋上に立ち止まっていたら自然とグラウンドにいた人達の視線が集まっており、今から何かが起きると感じ取ったのか、人も段々増えてきてる気がする。改めて下を見れば、地上との距離は20メートル位だろうか、それに木と草の茂実があるので上手くやれば命くらいは助かるかもと判断した。

自然と恐怖は無くなっていた。ただ伸也が申し訳なさそうにコチラを見詰めていたが俺は笑って答えてやった。

いつもそうだ。危険な時は自然と笑顔がこぼれる。そしてその笑顔が諦めからなのか、希望からなのか今でもその笑顔が出て来る理由が分からない。

そして俺は、再び前を向き意を決して屋上の段から飛び下りた。

第三話 終りの始まり3

足から落ちる様に飛び出し、一瞬の浮遊感の後に一気に急降下する。落ちてる中、時間の進みも遅く感じた。

そして近づく地面を見据え僅かな希望の木にぶつかる。

足腰に衝撃が走りそのまま茂実に背中から落ちた。

予想通り木と茂実が俺の体を支えてくれたおかげで怪我はたいしたことなかった。しかし緊張の糸が解け俺はそのまま意識を失った。

気付けば俺は病院のベッドで寝ていた。

あの後、意識を失った俺を病院に送り精密検査して特に問題がある所は無かったので2、3日様子を見てから退院出来るそうだった。

俺が飛び降りた後、教師が屋上に駆け込んだそうだった。そして主犯の茶髪の不良が捕まり、様子がおかしかったことから身体検査をしたらドラッグをしていたり等、今までの悪事が芋づる式に取り出され、しばらくは鑑別所か少年院にでも送られるそうだった。

それから数日が経った。

今では学校にも通いはじめた。

数日間勝手に休み迷惑をかけたバイト先に謝罪にも行った。店長は

気にしていないとのことだった。がやはり申し訳がたたない。

そしてバイトが終ってから帰宅中、すっかり日も落ちた時間帯。目の前を一人の子供が歩いていった。何処か落ち着かない感じでいろんな所を見回している子供。

（こんな時間に一人でいるなんて危ないなあ）

少し気にわなったが、その子供を追い越し先に進む。

そして信号が青から赤に変わったので一時止まる。そして先程の子供が隣に来ていたことに気付き、自然とそちらを振り向いた。

するとそこには幼いが整った顔立ちの少女がいた。今の状態からでも分かるようにその顔は将来かなりの美人になることが分かり、そしてその髪は金髪で腰くらいまで伸びており絹きぬのように艶つややかだった。

「あの」

ふと、その少女が話しかけてきたので離れかけてた意識が戻り見惚れていた事に気付き、自身の顔に熱を感じた。

「こんな遅い時間まで一人でいると危険ですよ？」
「・・・」

微笑みながら答えた少女。

俺は驚きで一瞬言葉を忘れてしまった。

何を言いたいのかというと、つまりそれはコチラの台詞だと言うことだ。こんなに可愛い子が夜に一人でいるなど、連れて行ってください。と言っている様なもんだ。

「貴方に危険が迫っています。すぐに家に帰ってください」

いきなり真剣な表情になった少女を見据え、何を言ってるんだこの子は？と、訳も分からず、思えば口にしていた。

「君はいつたい」

そこで車が自分達に近付いて来ている事に気付いた。

突然の事に驚き何かを考える前に俺は少女が弾かれない様に突き飛ばしていた。

驚いた少女は目を見開けていた。

少女が車の射程外に出た事に安心すると、ふと笑顔がこぼれた。

瞬間、猛然と歩道に突っ込んだ乗用車が俺の体を捕らえた。

バンパーに両足をすくわれる様にボンネットに乗り上げフロントウインドウにぶつかり、更に高く跳ね上げられる。

そして地面にぶつかる衝撃が体全体に伝わり視界がブラックアウトした。

声が聴こえた

『この人の魂を譲ってください』

『この方の魂は此処では馴染めません』

『私は貴方の世界に来て二度、この方に助けられました。死なない私を押し退け自身が身代わりになることも願かえりみず』

凛々しく響いた声は、何処か暖かった

『感謝します』

目が見える。

さっきまで視界が機能を果たさなかったので困っていたがこれで安心だ。

辺りを見回してみれば、辺り一面、白一色の世界に俺は居た。そしてコチラを微笑ましく眺めている少女の存在に気付く。

『目が覚めたんですね。先ずは感謝を』

いきなり近付いてきた少女は俺を抱きしめた。

突然の事で頭がパニックに陥るが少しずつ冷静になる。そこで事故から助けたはずの少女が何故こんな所にいるのか。そもそも此処はどこなのか。そんな思考で頭がいっぱいになった。

『実は私、女神なの。』

たまに別の世界を旅してみたいくなる時があつて、それでたまたま君に助けられたって訳。』

信じられなかった。しかし今、目の前の光景を見たら信じない訳にはいかなかった。

『あ、それと貴方の前世。つまり海道健太の前世でも私、貴方に助けられたの』

まさか二度も女神様を庇って死んだとわ・・・

『だから、君には感謝してるんだよ？』

上目遣いになりながら言う少女。・・・子供って分かってはいるけど、やっぱり可愛いな。

『だから君に会えた時、嬉しかったなあ。全然変わらない君に会えて私はとても嬉しかった』

どこか遠くを見つめ、しみじみと言い放つ女神。

『普通魂は時間が経つに連れて腐敗していくものなんだけど、君は何故かわらなかったみたいだね』

そして微笑みはどこか大人じみていた

『そんな貴方には！御礼と言っては何ですが、好きな世界に行く権利を与えたいと思います！』

えええええ！？と驚いた後、高ぶる気持ちを落ち着かせ再び考える
健太

好きな世界って、どこでもいいのかな？

だったらワンピースとかもの世界も大丈夫なのかな？とか考えたら、

『ワンピースの世界ですね。大丈夫ですよ？では早速 』

そこまでいき、先程まで抱えていた違和感に気付いた。

心読まれた？それとも無意識の内に口にしてたかな？

『ああ。すみません。言い忘れてましたが此処では意思の共有が出来るので相手の考えてる事が丸分かりなんです。ですので、先程健太さんが私の事を好いてくれたと分かった時は嬉しかったですよ？』

少し顔を赤らめながら言う少女。

なんというか反則なまでに可愛いなこの子。あ、でも今考えた事も全部まる分かりなんだった！自分はロリコンって訳ではないが可愛いって思ったのは本当だし、でもこんな子の事を可愛いって思わない方が失礼だし！

頭を抱える様な無限ループの思考を何とか落ち着かせ再び少女を見れば、くすつと笑った少女が居た。

『向こうの世界に行った時に私はあまり干渉する気はありませんが、貴方の運命は貴方で切り開いて行ってください。

言っておきますがワンピースの世界は貴方が思っている以上に残酷で危険な世界です。

そこで
』

何処からか紙を取り出した少女。

『貴方の身を守るだけのチカラを与えましょう。希望があれば聞きますよ？』

少し悩んだ後

なら、健康な身体がほしいな。あとは海道健太だった時の記憶は残っていて貰いたい。それくらいであとは得に無いかな。

再び少女を見れば啞然としていた。

『・・・それだけで良いんですか？どうせならワンピースの世界にある全部の悪魔の実の力を使えるとか、他の世界で使ってた能力を駆使したいとか、不老不死にしてほしいとか、何でも叶えることが出来るんですよ？

それに前世での記憶が有ると、その・・・色々と困る事もあると思いますし・・・』

うん。実は俺、名前の割に身体が弱くて出来る事が限られてたんだ。だから今度の世界では自由に過ごせればそれで良いかなって。

それに記憶に関してだけど、やっぱり寂しいんだ、忘れちゃう事がどうしようもなく。

だから俺は今までの事も全部受け入れて、新しい世界で生きて行きたいと思っただんだ・・・

『・・・貴方という人はいつたい何処まで・・・はい、わかりました。では後はこっちで適当に決めちゃいますね』

渋い顔をした後に何か思い付いたのか再び笑顔に戻る少女。

『準備は整いました。貴方に幸が有ることを』

言っただけの少女はその小さな手で俺の手を握った。その時何かが体に入り込み全体に拡がった。

『今、貴方に贈ったモノは私からの些ちひさ細なプレゼントです。では・・・』

その少女が俺の体を押すと同時にその場から遠ざかった。

そして墮ちる様な浮遊感に襲われた後、俺は暗闇の沼に落ちた。

沼に落ちてからどのくらいたっただろう。五感の何もかもが機能を果たさない中、始めは不安に刈られそうになるが、この場所自体はとても落ち着ける所と気付いたので何なら何時までも此処に居ても良いかなって思った。が、次の瞬間には光が目を襲う。

突然の事に驚いたが状況を察するのに時間はかからなかった。

そこには盛大に自身の口から発せられる泣き声とそれを微笑ましく見詰めている人達が居たことから今自分が生まれてきたんだと確信した。

そして一人の女性に抱えられると自然と泣き声も止んだ。

「あなたの名前はシオン。

シオン・オルテンシア。私のかわいい息子」

そして母だと思われる人物にオデコにキスされ少し戸惑ったが、本当に自分が生まれ変わった事などに色々と驚いた為、すぐに冷静に辺りを確認し、自分の置かれている現状を理解した。

（この世界での俺の名前はシオンと言うのか。でもまあ・・・）

もう一度その女性を見詰め

（ありがとう。母さん。そして女神様）

お礼の言葉をつけ、本能に任せるように眠りについた

そしてこれから少年シオンの冒険の日々が始まる

第四話

始まりの始まり（前書き）

小説って書くの大変ですね（ ）今まで見ている側だったので知りませんでした。自分の表現力の無さに落ち込みました。

第四話 始まりの始まり

この世界に生まれ落ちてから最初は焦った。

それは五感が正常に機能しなかったからだ。

視界はボンヤリと見えるだけで焦点が合わず、聴覚もノイズが走ってるかのように途切れ途切れしか聴こえなかったのだ。

今現在自分を抱えている女性に助けを求める視線を向ければ微笑まれてしまう始末

「本当に可愛い子。今ね、私に話し掛けてくれた気がしたわ」

（おお！）

意思が通じたのか、喋ることもままならないシオンにしてみればこの反応はかなり嬉しかった。

だが次の瞬間には羞恥の奈落に突き落とされる事になる。

「きつとお腹が空いたのね。ちょっと待っててね」

そう言い女性は自身の胸元をさらけ出そうとしている

（ちっがああああうー！）

表わになった胸をシオンの口元に当てる女性

（飲んでなるものか！飲んでなるものかああ！！）

必死に抵抗する彼であつたが本能のせい、意思とは関係なく大人しく母乳を飲み込む羽目になつてしまった。

ごきゅごきゅとリズムよく飲み込まれる吸引は止まらない

満腹感が解消されると今度は睡眠欲が浮上してきた。

今は抗うことが出来ないので大人しく^{まぶた}瞼を閉じる

意識が遠退く中、彼はふと思つた。

（女神様が言つてた不便な事つてこの事か・・・）

赤ん坊ライフを過ごし始め一月が経つた。

初めこそは悲観することばかりで早くも絶望の淵に追いやられたシオンはトラウマを抱えそうになる程へこんでいた。

なにせ何をするにも人の手を借りるのだ

数々の羞恥プレイを受け、今まで築き上げたきた理性が一気に碎け散つたのは言うまでもなかった。

そんな中でも嬉しいことがあった。

それは視覚、聴覚共に正常に機能し、更には顔が少しだけ動かせる位まで成長したのだ。

少しずつだが自分の体の成長に嬉しくなってくる。

「あ、シオンちゃん起きてたのね」

不意に話し掛けてきた人物を見れば母親だった。始めこそは分からなかったが、この母がまた偉い美人さんで白い肌に黒髪と、まるで大和撫子さながらだったのだ。

さらに透き通る様な瞳は人を吸い寄せる様な深さがある青で、いつまで見ていても飽きない位綺麗だった。

そんな母をもてば近付いてくる悪い虫も多いことこの上ない。だがしかし、そこは天然というか神の様なスルースキルで回避している。

現に今・・・

「君に似ていてとても可愛い子だね」

「本当？ありがとう。お世辞だとしても嬉しいわ」

「お世辞なんてとんでもない。特にこの瞳。君にそっくりじゃないか」

その発言に少し頬を赤めた母を見据え、男は尚も言葉を続けた。

「いや、その、なんて言うか・・・

もし迷惑じゃ無ければ、これから僕が君達を支えて行きたいなって」

「ええ、これからは是非支えてちょうだいね」

クスリと笑いながら答えた母に男の曇り顔が一気に晴れ、喜びに浸っていた。

「僕が君を好きって事がやっと伝わったみたいだね」
「やれやれと言いながら肩を竦める男性。しかし・・・

「・・・？」

私も貴方の事は好きよ？だって友達じゃない」

「・・・」

平然と言い放つ母。

この様に数多の男性が撃沈されてしまう始末。

何処からか

「ざまあw」

「抜け駆けするからだ・・・」

「自重しろ」

と、彼を嘲笑する声が聴こえたので窓の方を見てみれば男共が群がっているという奇抜な光景を目にしまった。

正直、彼らには同情したが、そんな母をもつ父親は何してるんだと最初は思った。

しかしどうも俺が生まれてくる数ヶ月前に他界してしまったらしい。

「シオンちゃんのお父さんはね。無愛想だったけど、とても優しくて、とても強かったんだよ」

俺をだき抱え、涙しながら話してくれた母。

まだ言葉を話せない為どうしようもなかったが、そんな母を慰めてやれなかったのが悲しかった。

そして、今日も今日とて食っちゃ寝の日々を過ごす。

八ヶ月が経った。

今では母乳から離れられ、念願の離乳食を食べれる事がこんなに有り難いとは、と涙ながら食べていた。

そんなある日、母に抱えられながら、ひなたぼっこしている最中であったが・・・

「セラ。こんにちわ」

不意に話し掛けてきた人は近所でも評判の良いおばさんだった。

セラとは俺の母の名前で、セラ・オルテンシアという。

「あら、貴女の子供はもう離乳食を食べてるの？確か八ヶ月くらいよね？」

「・・・？。はい。もうすっかり離乳食しか食べないんです。母乳をあげようとしても嫌がられてしまつんで・・・」

少し寂しそうな顔をした母とは対極に驚いた顔をしたおばさん。

「それは凄いわね。普通、離乳出来るのは一歳ぐらいからよ？遅くても二年くらいまで母乳を欲しがる子供だっているのに・・・」

その発言に一瞬ドキリとするものの哺乳瓶をくわえながら母の表情をチラリと確認すれば更に悲しい表情になっていた。

なんでも母からしたらもつと甘えられたらしい。が、もう二度とあんなに羞恥は受けなくなかったので申し訳ないが今回は丁重に断つておく。

この世界に生まれ落ちてから一年の歳月が経ち久々に嬉しい事が起きた。

そう、立つことが出来たのだ。

初めて歩けた時はかなり興奮し、慣れないながらに頑張って歩いた。と不意に自分の容姿が気になったのだ。

この世界に生まれてからまだ一度も確認していない自分の容姿。前世では弱々しい容姿にコンプレックス気味になり自然と伸びた髪でなんとかごまかしていたので、どうせならゾロとかサンジみたいに男らしい容姿だったらいいなあ。と、希望を抱いた。

周りの人達は可愛らしいとか目が母に似ているとか言っていたが実際どんなものなのか。手鏡を持って確認した。

瞬間、ピシリッ！と空気が凍った。

自分が持つてる鏡には自分が望んでいた様な容姿ではなかった。

母譲りだという瞳は確かに綺麗だったが、その顔も幼いながらに母、というか女の様な顔立ちだった。

更にその頭髮が母の黒髪とは真逆の白髪だったのだ。

女なら良い。だがしかし自分の性別は男で有りこんなに弱々しい容姿は望んでいなかった。

これでは前世と同じである。

将来の自分がとてつもなく心配になった。

そんな俺を見つけた母がクスリと笑いながら近付いてきて、尚も鏡を持って固まっている俺の頭を撫でながら父親譲りの髪の毛だと教えてくれた。

これはこの世界でも髪を伸ばすはめになりそうだ。

あれから数ヶ月が経ち、今ではすっかり自分で動き回る事が出来る様になった。

そんな俺は当然のように物覚えが良く、元高校生の意地を見せ付け、この世界の情報を集める為に読み書きをなんとかマスターした頃には二歳を迎える。

情報収集として毎日送られてくる新聞に目を通した。

その情報を見る限り、もう海賊王の処刑が実行されており、今から原作が始まるのは十年くらい後と予想した。

原作に関わるつもりもないのでノビノビ過ごし、ルフィ達の活躍を新聞を通して傍観していたいな、等とほのぼのの人生を考えていた。

そして今日も今日とて平和な日々が続き母と仲良く食事をしていた。

「母さん、今日のご飯も美味しいね・・・」

「ゴメンねシオンちゃん・・・満足に美味しい食べ物が出来なくて・・・」

目の前には泣き崩れる母の姿。

どうもうちの母は料理が苦手らしく、よく魚やパンを焦がしてしま
うのだ。

更には料理の味付けを感覚だけで行うため料理がまともに出来る
日は非常に稀まれなのだ。

そんな母に文句の一つでも言おうにもこうして泣かれる為何も言
えない状況が続いている。
厄介なことこの上ない・・・

問題が起きた。

自分が現在いる島が何処かと思い調べてみれば、グランドラインの
とある島だとわかった。

現在は大海賊時代。

その割には平和が続き、おかしいと思えば白ひげのマークが町の看
板の前に描かれていた・・・

やばい・・・

非常にやばい。

俺が死んでから二年経ち、記憶も曖昧になりつつあるがワンピース
の頂上戦争はやはり忘れられない出来事だ。
頂上戦争で白ひげが敗れてから白ひげの所有する島は他の海賊が襲
い大惨事になっていた。

このままだとこの町は火の海になってしまふ。
冗談じゃない。ここには母さんもいるんだ。

前の世界じゃ一度も見たことがない両親の顔。でも自分には家族といえる存在がいた。

孤児院の人達だ。

自分にとっては掛け替えのない存在。

一度無くした存在を女神様は再び与えてくれたんだ。

絶対に、守り通さないと・・・

幸か不幸か時間はまだある。

原作が始まるまで最低でも10～15年はあるはず。

それまでに出来るだけ強くならないと・・・

思っただけで行動だ。

原作のルフィ達は小さい時からジャングルに放り込まれ、命からがら助かった。

その自然の中で生きていくってのは確かに効率的に強くなる方法の内の一つだ。

得られるモノは間違いだと思う。

現在自分は2歳。

出来る事は限られている。

まずは基本となる体作りから始めるとして、
格闘とか剣術の知識も覚えられる事は出来るだけ覚えておきたい。

とりあえずランニングや腕立て伏せ等して当面は体を鍛える。

体を鍛え始めて一年の月日が経ち、自分は現在三歳。

初めはすぐ酸欠になる肉体に溜息が出るばかりだったが、日を重ねる事に成長していることも理解できた。

目標を決め、それを達成したら更に高めの目標へと繰り返している内に、最近では数キロ走ってもそうそう息が切れることもなくなつたし、腕立て伏せをするも余裕で三桁の壁を越える事が出来る位まで成長したのだ。

正直、自分の体の異常さに気付いた。

前の世界ではこうも簡単に肉体が成長することはなかった。

しかし、この世界では身体能力の成長スピードが著しく早い。

その割には外見の変化は見られないし・・・

世界のルールが違うのかどうかは俺なんかには解らないので、このことはとりあえず保留としよう。

さて、流石に一年間ずっとランニングや腕立てばかりでは飽きてしまったので最近図書館で得た剣の振り方や格闘の知識を取り入れて

いじつと思う。

時間は刻一刻と近付いているのだから・・・

第四話

始まりの始まり（後書き）

これからも遅いながらに頑張って更新していきます！指摘出来る様な所とかが見つけたら是非指導してください！よろしくお願いします
(TTT)

第五話

微々たる成長（前書き）

休みの内に何とか書き上げました！
これからも連載頑張ります！！

第五話 微々たる成長

コチ、コチ、と時を刻む音が響く中、時計の針が5時になると自然と目が覚めた。

横で寝ている母さんを起こさない様に外に出て、日課のランニングに出かけている。

走っている途中、朝一で商売をしている人達に挨拶すれば笑顔で返される。

そのまま道を通ればサキおばさんに声を掛けられた。

「あらシオンちゃん、おはよう」

おばさん。といっても見た目こそはまだ若く、俺が生まれた時から母と友達だったため俺からしてみればもう一人の母親みたいな人だ。

「おはようございます。・・・大変そうですね。良かったら手伝いましょうか？」

「大丈夫よ。子供にこんな重たい物持たせる訳にはいかないもの」

そつは言うもののなかなか持ち上がらない荷物。

「……………」

その荷物に手を掛け、サキおばさんから取り上げた。

その光景に少し驚いたおばさんは、「私ももう歳かね」なんて呟

いていたので咄嗟に「まだまだ若いじゃないですか」とフォローしたら喜んでくれた。

そして荷物を所定の位置まで持って行ったら、商品の野菜を少し貰った。

売り物をただで頂くのも悪いので、念の為持ってきた財布からお金を払おうとしたら。

「いいのいいの。さっきのお礼だから」

「…なら、いただきます」

愛想のつもりで微笑んでみれば少し頬を赤らめたおばさん。

「風邪でもひいてるんですか？」と聞きながらオデコを触る。

背の高さが足りないため自然と上を見る形になりながらも、熱を確かめてみれば顔全体が赤く染まったおばさんに、こっちが戸惑ったくらいだ。

それでも、大丈夫大丈夫と言いつつもセカセカと仕事に取り組みはじめたおばさん。

途中野菜を落とす等して落ち着きがなかったが、風邪をひいてても仕事を優先するその職人魂に脱帽した。

そして「良かったらこれも持って行って」と、何故かおまけまでくれた。

………凄くいい人だ。

たったあれだけの作業（荷物を運んだだけ）でこんなに物が貰えるなんて……

しかし貰える事は有り難いのだが荷物が出来てしまった。
今はランニング中だったが一度荷物を置きに家まで戻る。

家に戻れば母はまだ寝ていたので少し早めの朝食を作る事にした。
生前も一人暮らしをしていたので料理には自信があった。
まあ朝から豪華にしても仕方がないので今回は軽いものにする。
そうして適度に焼けたパンを皿に並べ、サラダを盛り付け、目玉
焼きにカリカリベーコンを添えて母親を起こしに足を進める。

「母さん。朝だよ…」

「…ん。う…ん？」

眠っていた母を揺さぶれば、まだ半覚醒状態の目を鬱すらと開け、
コチラの顔をジッと見詰めていた。

「…母さん？」

心配になり声をかければ…

「んー…シオンちゃん、おはよー」

あろう事か、いきなり抱き着いてきたのだ。

「かつ！母さん！寝ぼけてないで起きてよ！」

「えへへへ……シオンちゃん美味しそうな匂いがするう」

「……………」

…なんでだろう。

このままだと本当に俺が食べられてしまいそうな気がする…

自分の貞操が心配になり擦り寄って来る母を振り払った。

「ごはん作ったから食べて」

そう言い、まだ名残惜しげにしていた母を後にして食卓へと向かった。

「すごい！これシオンちゃんが全部作ったの！？」

褒められたことに少し照れながらもコクンと頭を縦に振って答えた。

「サラダの野菜も新鮮だし、パンも焦げてない、それに目玉焼きとベーコンまで……」

そのまま一口ずつ食した母

「美味しい！特にこの目玉焼きとベーコン。目玉焼きは程よく半熟だし、ベーコンの焼き加減も申し分ないわ！」

そして食事を終え

「はふう。美味しかった。ご馳走様シオンちゃん」

「お粗末様です」

満足な表情の母を見るとコチラまで嬉しくなり自分の頬が緩んでることに気付く。

それから食器を片付け、少し休憩を挟んでから、昼にはまた戻ると母に一言伝えてから外に出かけた。

町から離れた海岸沿いにある林の一角。
そこが現在自分の稽古場である。

最初は人気がない場所を捜し求めて町を離れた事がきつかけだった。

そして見付けた。

静寂と波の音が辺りを支配するその場所は何処か神聖な雰囲気だった

家からその場所まで5キロ程あったが走って向かう事に何の抵抗もなかった。

そして軽く息切れるも目標の場所に付き、良い感じに温まった筋肉を解すため準備体操をして早速愛用の木刀を手に取り素振りを始める事にする。

静寂が支配していた空間には木刀を振るう風斬り音が響き渡り、空からは眩しいばかりの日差しが降り注ぐ。

風が木々を撫で回し、唐突にシオンを襲うが差して動じる事もなく素振りを続ける。

素振りの数が千を越えた時点で数えるのをやめた。
自分はただ純粹に速さを求めた。

望むのは速く、もつと疾い剣。
こんな剣筋けんすじでは家族は守れない。

そして握る木刀に再び力を込め、切る事をイメージしながら木刀を振るう。

しかし自分でもたまに傷だと思ふ事がある。

物事に夢中になりすぎて限界まで止められなくなるのだ。

そして体の限界が訪れ、持っていた木刀がカランツと地面に転がると同時に俺自身も前のめりに倒れ込んだ。

俯^{うつぶ}せの状態から仰向けに寝転がり、酸欠の肺に酸素をたっぷり送り込む。

自然の清んでいる空気が体に浸透し、心地良さが体を満^みたす

この場所で素振り等を始め、既に半年が経過していた。

本来なら時間を最大限生かして自分の身体能力を少しでも上げる為に住み込みでトレーニングをしていた所だ。

しかし、そうもいかない。なぜなら…

シオンちゃん、どこ〜！？

心配性の母がいるからだ。

あまり人の目に触れたくないなので人気がない場所に行き来してる内に、尾行してきた母にこの場所がバレかかっているのだ。

まあ、ある意味当然といえば当然なのかもしれない。

自分は現在三歳で、もうじき四歳になる。そんな子供が一人で出掛ければ親は心配になるものだ。

母に呼ばれ、もう昼の時間になっていたかと思い、木刀を隅っこに置いて母がいる場所まで走って向かう。

稽古場の林から3キロ程走り、ようやく母と合流する。

「あー！ シオンちゃんいた！

もー！ 心配したんだからー！」

「ごめんね母さん。でもそんなに強く抱きしめないで……痛いから」

「あつ！ 私つたらつい！ ごめんなさいね。謝るから許して？」

シオンを思い切り抱きしめていた腕を微かに緩め謝罪する母。

もともと心配かけた自分が悪いので再び謝るが何故か、私の方がごめんなさいだもん！と意地を張る母に小さく溜息が漏れた。

そして家に向かう道中、自分の体のおかしさについて考えた。

既に体は限界を感じているが、このくらいなら家に帰り一時間程寝れば回復している。

最初こそは、これもきつと女神様に頼んどいた『健康な身体』のおかげだろう。と思ったが改めて考えてみるとやっぱり異常だ。

更には先程の母の呼び掛けだ。

普通あんな遠くにいたら声なんて聞こえない。馬鹿でかい声が出るなら別かもしれないが、生憎あいにくと自分の母は普通の範疇はんちゆうに留まっているのでそれも有り得ない事だ。
となるとやっぱりおかしいのは自分の体となる。

そうして考えている内に家に付き、既に料理を作っていた母がいた。

「今日こそはシオンちゃんに負けない料理を作ったんだから！」

「…味見は？」

「まだしてないわよ？」

だってほら。楽しみは後に取っておきたいじゃない」

「……………」

そう言い切る母を黙って見詰め、出来上がった料理の方を見ればそれは美味しそうな料理の数々が盛られていた。

しかし騙されてはいけない。

今までの経験から言って、この母が創る料理は見た目こそ良いものの味が酷い事になっているのだ。
しかも見た目に比例して味の質は変わる。

今回の見た目はかなり良いと言ってもいい。
だがその分味も見た目に反して掛け離れるばかりなのだ。

そもそも何で味見しないんだ。と呆れるも、その料理に口をつける。

「あつ。悪くない」

意外な味に自然とそんなに言葉が出て来て
母さんが、「何その反応！」と少し怒っていた。

「まあ、失礼ね！私だってたまには美味しい料理ぐらい作るわよ
！」

そんな母の反応が面白くてつい笑ってしまった。

そのまま黙々と料理に箸を進めていると口を開いた母さん。

「そういえばシオンちゃん。いつも出掛けてる割には遊んでるとこ
見ないけど、お友達でも出来た？」

「・・・うん。海岸の方に住んでる子なんだけど、楽しく遊んでる
よ」

その問いに一瞬戸惑ったものの何とか嘘でごまかしたシオン。

そもそも精神年齢が20歳のシオンと同年台の子達とではウマが
合うはずがなかったのだ。

そして何より、抱えているモノが違った。

「そっか。シオンちゃんが元気にやれてるんだったらいいや」
安心した様な表情になる母を見て、内心申し訳なく思いつつもその場を後にし、睡眠をとってから再び稽古場に向かうシオン。

毎日の様に稽古場に向かうシオンは行き帰りを繰り返し、日に20キロ以上のランニングを自然と行う様になっていた。

最近では息も切れないので、試しに全力ダッシュで稽古場に向かえば十分程で着いた事に啞然とした。改めて自分の異常さに心配になるも、いつも通り素振りを始める。

そしてシオンは四歳を迎えた。

今ではすっかり伸びてしまった髪で表情が読み取りずらくなっている。

そんなある日の事だ。
日課の素振りを始め、その数が万を超えたぐらいだろうか、空気が変わった。

その異常さに辺りを振り返ってみれば一人の少女がコチラに向かって歩いて来てるのがわかった。

海岸の風を受け、靡く金色の髪の毛。

そして人を引き付けて止まないその美貌を見てシオンは硬直した。

「女神様!？」

クスクス笑いながらシオンに近付く少女はソツと口を開く。

□ お久しぶりです。シオンさん □

女神との再開だった。

第六話 再会

クスクスと笑いながら近付いて来る少女。

他の子供とは纏っている雰囲気が違う少女は少年シオンに近付く。シオンは動けなかった。

理由はその少女の美しさに見惚れていたのと、彼が良く知る人物だったからだ。

「女神様！」

尚も微笑みながらシオンに近付く少女。

『順調にやってるみたいですね。どうです？ 貴方の環境、気に入ってくれました？』

「はい。おかげさまで良い家族と楽しくやってます。

でも自分の環境、というか町が危険な気がするんですが？」

『そうかしら？ 私にはとても安全な場所だと思うけど？』

確かに白ひげ海賊団の後ろ盾は世界でも有数の安全な場所だと思う。でも

「でも女神様なら知ってるでしょ？ この島の未来を・・・」

『そんなの関係ないです。なにより
スウツと指をコチラに向ける女神様。』

『貴方がいるじゃないですか』

言葉が出なかった。

自分は精神年齢こそ21歳になったものの体は四歳児なのだ。
世界の猛者達がうごめくこの海ではひとひねりにされかねない。

「……でも、自分はまだまだ子供ですし、この先に起こる悲劇を止められるかどうか……」

心配になり、下を向くシオン。

しかし尚もクスクス笑う女神様。

『私は貴方の望みを叶え、チャンスを与えたはずです。あとはシオンさん次第ですかね』

そう言い切る女神の顔からは余裕の表情が漏れ出ていた。
その表情を見てるとコチラまでつい微笑んでしまう。

「……ええ、なんとかしてみますよ。
俺の家族を、大切な人達を、きつと救ってみせます」

その答えを聞き、女神様は満足と言わんばかりの笑顔になる。

『ええ、やっぱり貴方は笑ってる方が良いわね。そんなに悲しい表

情ばかりじゃ、せつかくの可愛い顔が台なしよ?』

「めっ、女神様まで母さんみたいな事言わないで下さいよ!」

自分の顔が熱くなるのが分かり、咄嗟に下を向き伸びた前髪で隠す。

ふと、今まで疑問に思った事を聞いてみたいくなり口を開く。

「あの、自分の体についていくつか聞きたい事があるんですが・・・

」

『ええ、要望通りの健康な体よ』

「はい。そのおかげだと思っんですが、体力回復の早さとか筋肉の成長なんですけど・・・」

『あら、思ってたよりも早くに気付きましたね。シオンさんの体は成長ホルモンが常人の数十倍はある特別性の体なんです。だから見た目は別として筋肉の質が蓄積されて成長してるんですよ』

「∴この世界のルールではなくてですか?」

『∴当たり前じゃないですか。普通だったらこんな早く成長なんてしないですよ。』

ここまで動ける様になったのは貴方の努力の結果って所ですかね』

少し呆れ気味あきに告げる女神様。

その答えに啞然とした。

予想はしていたけど、そこまで規格外な体になっていようとは…

何かに気付いたのか今度は女神様が口を開いた。

『あつ、そういえば私から貴方に贈ったプレゼントには気付きました？』

その問いに何の事かと聞けば、少し思考した女神様に小さく溜息をつかれてしまった。

『…まったく。いつまで狸寝入りしてるつもり？出て来なさい！』
沁『！』

女神様が何かに気付き呼び掛ける。

すると先程まで和やかだった雰囲気が一変して殺伐とした空気に一瞬息が出来なくなってしまうた。

『貴方の主に殺気を飛ばすとはいいい度胸じゃないですか。』沁『』

『くっ！元主が何故ここに』

突如頭の中に直接響いた低い声に驚き、辺りを見回すが目に写るのは自分と女神様の姿しか確認出来なかった。

しかし、俺と女神様の間に突如空気の乱れが起きたと思ったら、そこには鞘に収まった漆黒の刀が現れた。

一見変ってる所は鞘と柄に紐が縛られており、抜刀出来ない様に固定されていた。

『この刀の名は神刀 沁^{しん}。私が創った刀で、いくつか能力を宿します。』

刀を掴み女神様は更に説明を続ける。

『そしてこの刀は持ち主を選びます。』

その人物に見合う時、保有する力も貸してくれる。』

女神様は話を続けつつ、紐を解き、鞘からその刀を抜き出した。しかし、俺はその蒼白い刀身を目にした瞬間、我を忘れてしまった。

美しいその刀身は人を魅惑し、引き付ける事を止まない。

したことはないが、たぶんこれが一目惚れと言つものだろうと納得した。

『人が持つ二系統二属性を内包してる刀で、創る力と探る力。使う力と壊す力を宿した刀。』

それが「沁」です。

厄介な点と言えば気まぐれって所ですかね。でも完全に「沁」を認めさせることが出来れば能力を使い分ける事も出来ます。

まあ、今説明してもあまり理解は出来なと思いますから使つていく間に自然と解る様にはなるでしょう。

この世界じゃシオンさんしか繋がってないから、事実シオンさんしか扱えない。

あとは、契約をすれば良いだけ、ですね。

それにしても 』

『沁』と呼ばれた刀を一瞥する女神様。

『貴方は主の為に力の一つや二つも貸して上げないのですか？もしかして…悪かったとか？』

『この童の魂は悪くない。それに、力なら貸した。しかし、この者はまだ「探る」事しか出来なかった故^{ゆえ} 』

『あら。気まぐれな貴方が？ それで？ 何をしたんですか？』

意外ね。と言った感じに言い放つ女神様。

『この場所に導いた。あとこの童を呼^わぶ娘がおったのでな、呼^わんでる事を教えてやった』

話の根本はよく分からない。

しかし、これでいくつかの異常現象に説明がついた。
稽古場に始まり、母さんの呼び掛け。

それがこの『沁』による能力の一部だったということか。

『…そう。意外と働いていたみたい何よりです』

『なに、この童が主なものには変わらないでな。コチラとしても強くなって貰わねば困るだけだ 』

確かにこの場所に導いてくれたことは有り難いと思う。

知らず知らずの内に助けられていた事に内心感謝する。

『なに。礼には及ばん。先程も言ったが、童が主なものには変わりなかるう？』

「っ！！？」

思考を読み取られた事に驚き、つい女神様を凝視してしまった。

『…貴方とこの「沁」は生まれる前に繋がったから思考の共有も出来るの。だからこそ貴方しか契約出来ないんですけどね』

「ごめんなさい。と女神様から頭を下げられ戸惑うも、そんなに気にしてないと伝え、頭を上げるように言う。

『不便かもしれない。でも貴方の力にはなってくれるはずですよ』

ね？と、『沁』に目配せする女神様に、ふん、と返す『沁』。

だいぶ話が進んでいるみたいだけど、契約自体の内容が今だに理解出来ていない事に気付く。

それに女神様も気付いたのか、説明してくれた。

『契約の条件として、シオンさんの魂に住まわせてあげるだけです
ね。』

もし刀が壊れたとしてもシオンさんには特に被害はないけどシオンさんが死ねば「沁」も死んでしまいます。

「沁」からしたらデメリットばかりだけどそれで良いみたいなの』

簡単に説明してくれた女神様。

しかし条件が魂の移住か。

勧めてくれるのは有り難いが今は判断出来ない。

「ありがとうございます。契約についてはもう少し考えさせてください」

俺の発言に、そう。と返す女神様。

『でもこれで貴方が母君^{ははぎみ}に言った嘘が本当になりましたね』

その言葉に驚いた。

まさか母さんに言った嘘が聞かれていたとは…

渋い顔をしていた俺を見てクスリと微笑む女神様

『それじゃ、私はこれで行きますね。引き続き頑張つて』

グツと俺の手を握る女神様の手は、とても温かく感じた。

前に比べて身長が縮んだ為、女神様の顔が近い事に戸惑いながらもその美貌に見惚れていた。

が、気付けば女神様の姿が無くなっており今まで気にならなかつた波の音が耳に入る。

まさか夢だったか？と思ったが手にはまだ女神様に握られた感触が残っていた事から現実だったと理解する。

『行つたか。あやつめ、まさか空間を支配してまで御主に会いに来るとはな』

そして極めつけはこの声だ。
辺りを確認するが姿は見えない。

「どこに居るのさ？」

「人に見られるのは好かんのでな、姿を消している。しかし
童が望めば姿を出さん事もない」

「……………」

辺りに人は俺しかない。

最初は俺に見られたくないのかと思ったがどうやら違っらしい。

そして気付けばもう昼食の時間になっていたので母が来る前に帰
宅することにする。

「いいや。どうせ帰るから後で楽しみにしとく」

「そうか。では改めて名乗ろう。我が名は「沁^{しん}」。しばらく
の間、世話になる」

「俺の名前はシオン。シオン・オルテンシア。こっちこそ宜しくね。
沁」

うむ、と返す「沁」に内心微笑み足を自宅へと向かわせる。

そして移動中に海を見渡せば一隻の船がこの島に近付いてる事に
気付いた。

此処からでは豆粒くらいの大きさな為、どのような船かは分からな
い。が

…なんだろう。何か胸騒ぎがする。

そしてその場を後にし、再び家に向かう為に足を進める。

「何を見てるんだよい。ビスタ」

「いや……海岸の林に子供が見えたんでな。何をしてるのかずっと見てた」

双眼鏡で島の方を確認するビスタが気になったのか痺れを切らしたマルコが聞いてきた。

「それで？」

「なに。熱心に木刀の素振りをしていただけだった…」

「へえ。どんな奴だよい。俺にも見せてくれよ」

「もういなくなっちゃった」

「なんでえ」

つまらん、と言った感じに種を返すマルコ。

しかし何処か腑に落ちないビスタは再び双眼鏡でその場所を見続けた。

「隊長達！ もつじき島に付きそうなんで準備して下さい！」

仲間の船員に呼び掛けられ二人の隊長は各々の準備に取り掛かった。

第七話 出会い

町に着けばいつもより賑やかになっている光景が広がっていた。

そして目の前に顔見知りのおばさんが通ったので訳を聞いてみた。

「サキおばさん。みんなどうしたの？」

「ああ、シオンちゃん。

実はこの島に管理人が向かって来ててね。それをみんなで派手にお迎えするんだけど……」

出迎えの準備が全然整っていなかったらしく、慌てて準備してる
とのこと。

「管理人って……白ひげ海賊団？」

「おや？ 知ってたのかい？

たしかシオンちゃんが産まれてからはまだ一度も来てなかったと思っただけだねえ」

いつかこんな日が来るのではないかと予想はしていた。

原作に関われば俺なんかの命がいくつ有っても足りない出来事が起こる。

しかしその対策としては原作の登場人物にはなるべく関わらないで過ごせば良いだろうと考えていた。

そこまでは良い。だがここである問題に気付いた。

「……そういえば、いつもどれくらい滞在してるんですか？」

「さあね。早くて一ヶ月くらい。遅くて半年つてところかね」

その言葉を聞いて絶句した。

予想では数日くらいと思っていた為、精神的ダメージは尚でかい。

コチラとしては少しでも早くに強くなりたいのでその間ごまかし続けるのは辛いものがある。

だいたい白ひげ海賊団ともあろう大海賊がどうしてこんな島に滞在するのか。

聞けば当分の休暇も兼ねて島を本当に守っていると周りに伝える為らしい。

そしてこういった島では白ひげ海賊団は英雄扱いになるそうだ。

まあ普段から町を守っているので当然と言えば当然か。

そんな英雄達は町の商店街にある酒場で飲み食いを盛大に行うらしい。

しかも無料で飲み食いしてる訳では無いらしく飲み食いした分はキツチリと料金を支払うそうだ。

町の人達は普段からお世話になってる為か無料で良いと言ってるが、白ひげ海賊団は料金を払うというのだ。

しかしそんなに連日連夜、盛大な宴を繰り広げれば資金の方も減

る一方なので、稀に来る海賊船から決闘の名目で財産を頂戴したり、休暇を使ったお宝の発掘等で資金面は何かなっているらしい。

仕方ないので当分は町の商店街を避けていく方向で行動していくしかない。

そんなこんで再び家に向かう為、足を進める。

家に着けば予想通り料理を作っていた母がいた。

そして簡単に食事を済ませ、白ひげ海賊団が来ることを話したら何やら深刻そうな顔になってしまった。

その反応から俺が産まれるよりも昔に、白ひげ海賊団と何か嫌な事があったと理解した。

母の近くに寄り、大丈夫。と慰めれば優しく抱き着かれた。

今は赤子の時とは違い母さんを慰める事が出来る。

例えこの島の英雄だとしても、俺の家族に手を出す奴を許しはしない。

しかし……………

生の白ひげ海賊団をこの目で見てみたいのも事実。

そして船が来たのか町の港から盛大な歓声が聞こえてきた。

町の外れにあるこの家から港までなら走って5分くらいで着く。
結局好奇心に勝てず、白ひげ海賊団を一目見るため母に一言いつから家を出る。

再び港に着けば家から聞こえていた声とは比べものにならないくらい
の歓声が耳を襲う。

そして辺りは紙吹雪が舞い散り、白ひげ海賊団が乗るモビーディ
ック号を盛大に迎える。

言わせて貰えば、あれだけの時間で良く此処まで準備出来たものだ。

船が港で完全に止まり、掛け橋を繋いでそろそろと降りてくる船員達。

そして再び歓声のボリュームが上がった。

「1番隊隊長のマルコさんだ！」

「おい！あそこにいるの3番隊隊長のジヨズさんだぞ！」

「5番隊隊長のビスタ様よ！いつ見ても気品に満ちてらっしゃるわ！」

各々の隊長達が降りてきて場がかなり盛り上がった。

そして最後に白ひげが降りてきた。

その姿を確認した住民達は一瞬にして声を止めた。

そしてこの町の町長が出迎え、頭を下げた。

「良くいらして下さいました。及ばずながら町を総出で出迎えさせて頂きました」

深々と頭を下げる町長。

それを見た白ひげは、

「グラララ。しばらくの間世話になる。

野郎共！今日は盛大に宴だ！！」

どおっ！と歓声により島が揺れた。

そして白ひげから伝わってくるプレッシャーは本物の海賊だと物語っており、世界最強の男であることを体で感じさせた。

ふと5番隊隊長、花剣のビスタがコチラを見据えていた。

この大衆の中で俺を見てることは無いと思うが何か気になることでもあったのだろうか。

そうして白ひげ海賊団を迎えてからは夜遅くまで町を総出の宴会が行われていたので町の外れにあるこの家まで声が聞こえて迷惑だった。

俺は、といえは昼の訓練をしてから夕食を食べた後、母に出掛けることを言ってから、完全に人気^{ひとけ}が無い稽古場に再び向かう事にした。

白ひげ海賊団は一目見れたので今は『沁』を実際に手にしてみたという考えに浸り、足を進めた。

稽古場に着けば見知らぬ影が一つあった。

「よう坊主。今夜の月はまた一段と綺麗に見えないか？」

初めこそは暗くてよく見えなかったが目を凝らせばそこにいる人物がハッキリと見えた。

本来なら決して此処に居るはずのない

「……花剣の、ビスタ…さん」

「ほう。俺を知ってんのか」

「……知らない方がおかしいでしょ？貴方達はこの島の英雄なんですから」

「そういう意味で言ったんじゃない。坊主、お前何才だ？」

「……今年で4歳になりました」

そもそも何故此処に居るのかも分からない人物に対して警戒は怠おこたらない。

一応漫画では見てたがその人物自体の性格とか詳細はハッキリしてないのだ。

これで子供の惨殺が趣味とかだったら笑い話にもならない。

「まあそんなに警戒するなって。しかし四才の子供がよく俺の事を知ってるな」

「それは貴方達がこの島で英雄だからですよ。よく母が話を聞かせてくれるんで……」

嘘だ。これまで一度だって母さんの口から白ひげ海賊団の話を聞いたことはない。

そう。聞いたことが無いのだ。

本来そんな英雄が居れば話の一つや二つぐらい母さんの口から聞けても良いはずなのに。

それに俺が白ひげ海賊団の話をした時の表情は……思い出すのも不快だ。

「…姿も見たこと無いのに俺を知っていた。この島には久しく来ていなかったからな。疑問に思ったただけだ」

「それは…港で貴方達を見たからです……」

本当は俺の生前の世界で漫画になっているから、とは流石に言えない。

「……そうかい。所で坊主。お前いつも此処で訓練してんのか？」

「……なんのことですか？僕はただ景色を見に來ただけです」

こんな子供がこんな場所で特訓してることまで知られなくなかった。

本来なら正直に答えるが、今はそんな事も言ってられないので嘘をついて誤魔化する。

「嘘は良くない。この島に着く前に俺はお前を見た。
それにこの町のお偉いさん達にお前の事を聞いたら快く教えてくれたよ。」

何でも『神童』なんて呼ばれてるみたいじゃないか。町の人達がお前の将来が楽しみだと話していたぞ」

ここに来て不用意に町の人達と関わったことが裏目に出てしまった。

しかし巷で俺はそんな大それた名で呼ばれていたのか。
どちらにしろ向こうには全てバレてるみたいだ。

、人に見られるのは好かんのでな。姿を消している、

ふと、昼間に聞いた『沁』の言葉が頭をかすめた。
そして気付く。

あの時、『沁』が言っていた視線とはこの人物からのものであったと。

自分の迂闊さに小さくため息が零れる。

原作の登場人物と出来るだけ一緒に居たくないの、なるべく早くに会話を終らせる為話を切り出す。

「それで？白ひげ海賊団5番隊隊長殿は何故俺の前に現れたんですか？」

「…なに。こんな所でただひとり、何をしてるのか興味が湧いただけさ。そんなことより」

近くにあった木刀を手取るビスタ。

「坊主。お前剣をやるんだろ？」

今まで大事に使ってきた愛刀を取られたことに内心腹立ち無愛想

に、はい。と答えれば、

「見せてみる。相手になってやる」

ニヤリと口端を吊り上げながら言うビスタ。

その言葉に今まで実戦経験が無い事に気付き、自分の力が何処まで通じるのか気になった。

しかし、相手はあの花剣のビスタだ。

原作でも七武海のミホークと互角に渡り合えるくらいの实力を持っている剣士。

例え遊びだとしてもコチラがその攻撃を受ければタダではすまない。

「なに。死にはしないさ。ただそっちが攻め、こっちはそれを防ぐだけだ」

そして持っていた木刀をコチラに向かって投げ渡す。

思わぬ好条件に素直に受け入れてしまいそうになるも、疑問があった。

「何で……何でいきなりこんな事しなくちゃいけないんですか……？」

ビスタの目を見ながら真剣に聞けば。

「始めに。この島に来る前、お前を見たと言っただろ。その時、熱心に素振りをしているのを見たんだ。それに」

俺が持っていた木刀を指差すビスタ。

「その木刀、よく使い込まれている良い木刀だ。
お前が何処まで出来るのか知りたくてな」

思わぬ答えに驚くも、表情には出さない。

俺の実力。

それを向こうも知りたいだけか。

お互いの条件が一致し、迷いは無くなった。

「わかりました」

初めての試合に内心嬉しくなる。

その気持ちを落ち着かせる様に深呼吸を何度か繰り返してから体勢を低くし、いつでも始められる事を伝え、いつでも来い。と向こうも臨戦体勢をとる。

「それじゃあ・・・行きます！」

その声を引き金に地を蹴った。

声と共に全力の一降りを繰り出すも難無く避けるビスタ。

しかし避ける事も予想していたシオンは続けて二の刀を横薙ぎに

放った。

予想外だったのか目を見開くビスタは咄嗟に右腕でその斬撃を受け止めた。

当たった瞬間、ミシツと音がしたがその表情は平然としていた。

「ほお…… 4才でここまでやれれば上出来だ」

そして警戒体勢を解いたビスタはその体を翻した。

「明日の夜も此処に来な。しばらくの間だが、鍛えてやる。」

背中を向けながら言い放つビスタ。

こうして、ひょんなことから花剣のビスタに御指導されることになってしまったシオンであった。

ビスタは久々に面白いものを見付け、内心嬉々としながら足を進めていた。

先程の出来事を思い出すだけで口のニヤケが止まらなかった。

始めこそは冗談のつもりで行った遊びだったが、もし先程のアレが真剣勝負だったとしたら

「おもしろい」

先程受けた右腕を触り、自身の身体が一瞬身震いするのが伝わった。

骨はいつていない。しかし、

「ひびが入ったか？」

痣あざになつて腕を隠し、皆がいる酒場に戻ったピスタはその日、気持ち良く酒を飲んで過ごしていた。

第八話 決意

ビスタとの試合が終わった後、俺は独り落ち込んでいた。

まだまだ子供だとしても自分の実力は到底この海では通用しない。

その真実を目の当たりにした。

全力で挑んだ。

自分が今持ちいる中で最高の一撃をおみまいしたつもりだ。

もしかしたらと期待してはいたが、その思いは見事に打ち砕かれてしまった。

「はぁ……」

「 案外、悪くなかったと思う 〴〵

唐突に、声が頭の中に声が響き、『沁』が話掛けてきたことに気付く。

「 まだまだ、弱いね。俺」

「 なに、先程の者が言う通り、四歳にしてみれば対したモノなのだろう 〴〵

「 ……それじゃ駄目なんだ」

そう。

4歳にしてみれば上出来かもしれない。
しかしそんなぐらいいじゃ救えない。
満足するには至らない。

「これまで以上に努力しないと……」

守れない。

その事実しか残らないのでは今までやって来た事が全て水の泡になってしまう。

自分が何の為に強くなり、何を守りたいか再び整理してから覚悟を決めた。しかし……

「今まで以上にいい特訓方法が思い付かない……」

人間無茶をして成長するものだ。
だけどその無茶も死んでしまう様な危険性なら話にならない。

今の特訓を続けるのも悪くはないと思うけど、それだけでは更なる高見には行けない気がする。

少しの間思考錯誤したが、一向に思い付かない。

「 ならば。先程の者が言っていた様に明日の夜から此処あすに来ればいい 』

「……ビスタに教わるってこと？」

『沁』の提案に顔をしかめるも、確かに今一番いい方法は剣士であるビスタに教えをこう以外には思い付かない。
でも原作の登場人物であるという事に抵抗があるのだ。
変に運命を変えてしまう危険性も抱えてるかもしれないし、危険な出来事に関わってしまうかもしれない。

『 お主が思う危険性。確かに有ると思う。
しかしそのような運命など関係ないくらい

お主が強くなれば良からう？

』

その答えに一瞬頭の中が真っ白になる。

そして唐突に笑いが込み上げてきた。

「そつだね。確かにその通りだ」

そう。答えはこんなにも簡単な事だったのだ。
俺が強くなれば良いだけ。

たったそれだけの事じゃないか。

『沁』の言葉に背中を押され、ビスタに指導を受ける決心をした俺は、慰めてくれた『沁』にお礼言葉を言えば、うむ。と返された。

『しかし、まだまだ我を操る事は難しいな。当分の間は姿も見せん』

「……え？」

本当だったら『沁』を手につてみたい気持ちでいっぱいだったが、まさかのお預けを受けてしまった。

『私も此処に居るでな。話相手くらいにならなってやる』

「……そんな……」

その日は説得も虚しく^{むな}渋々諦め、大人しく家に帰った。

帰ったら帰ったで母が抱き着いてきて、シオンちゃんが不良になった〜!。と泣き着かれてしまった。

気付けば、普段ならとくに寝ている時間だった事に気付き、抱き着く母を慰め、だいぶ落ち着いた事を確認してからこれから当分は夜遅くまで帰ってこない事を伝えれば再び泣き着かれてしまう始末。

何が気に入らないのか聞けば、

「だって寝るときにシオンちゃんがないと寂しいじゃない!」

「……………」

そんな理由を聞いて引つ付く母を剥がしてから自身が眠る為にベツトに入る。

明日も朝は早いのだ。

いつまでも夜更かしはしてられない。

今宵^{こよひ}の一撃。

あれは子供に放てるものでは決して無い。

童は気付いておらんかも知れんが、一瞬剣がブレた。

縦一線から横一線へ移る時の予備動作がほぼ無く、同時に放たれる様な斬撃。

本来ならば初見ではまずかわせない。

その一撃を防いだあの剣士も中々だが……

その現象名は『多重次元屈折現象』

まだ完璧ではなかったが、それも時間の問題であろう。

我も生を受けてから今まで色んな者を見てきた。

しかし、

誰ひとりとして今の童の歳であの域には達した者はいない。

だが、過去に一人。

あの童も相当だったが、あやつ以上の剣の使い手もなかなかにおらん。

その者は、全ての刀に愛される男だ。

我とて例外ではない。

自身を使つてほしいモノ達は、その力を最大限生かせる者を望む。

しかし、大概のモノがその使い手に出会えないで果てる。

あるモノは耐えきれず折れ、

あるモノは錆ゆき朽ち果て、

あるモノは自然に飲み込まれ存在すら忘れられる。

漸く自身が望む担い手に出会う事が出来、当時は嬉々としたものだ。

さあ、早く我を手に取り。

さすれば、主が為に最大の力を貸す。

しかし、その者が我を手を取る事は一度もなかった。

まさかの死別。

それからというもの、見る者全てが物足りなさで満ちてしまった。

今まで出会って来た者などあやつに比べれば足元にも及ばぬ。

あやつ以上の者に会う事はない。

そしてこれからもこの気持ちが満たされる事はないと諦めていた。

しかし、出会った。

その者はまだ小さかったが、将来を考えれば期待せざるをえなかった。

本来ならば一刻も早く我を手にして欲しかった。
だがその気持ちを何とか抑え、拒否した。

あえて拒否したのは童の肉体ではまだ耐えられないと考えたからだ。

自身で言うのもなんだが、私の能力は体に掛かる負担もでかい故、持ち主を壊しかねない。

焦らず、慌てず。

ゆっくりで良いのだ。

ゆっくりと童の成長を見届け、来るべき時が来たら主と認め、この身を貸そう。

その時まで、せめて見守らせてもらおう。

まだ日が上る少し前の時間。

今ではすっかり習慣になっているので自然と目が覚める。

昨日はいつもより遅くに眠ったせい^{おこな}かまだ眠い。

眠気をなんとか振り払い日課であるランニングを行う^{おこな}為ベットから出ようとする。

しかし、ここでパジャマの袖に妙な引っ掛けりに気付く。

見れば隣で寝ていた母が俺の袖を離すまいと握っていた。

「……………」

気付かれない様にパジャマを脱ごうと、捕まれていない方の手でボタンを上から一個ずつ外していく。

しかしその手が三つ目に差し掛かった時だ。

唐突に母が寝返った為に自然と俺の腕も引っ張られ、母に倒れ込む。

一瞬、起こしてしまったか？ と思ったがそのまま眠り続ける母。

そこで再び元の姿勢に寝返ると同時に抱き着かれてしまった。

母の豊かな胸が俺の胸を締め付け、体は母の腕でガッチリと押さえ込まれている。

早く言えば抜け出せない。身動き一つ出来ない状態なのだ。

至近距離にある母の顔を見て、寝息が顔に吹き掛かかる程の近さに自身の顔が少し熱くなるのが分かった。

つい、いつもの癖で視線をそらす様に下に向いてしまえば母の開はだけたパジャマの隙間から胸の谷間が見えてしまった。

正直起きてるのでは？ と勘違いしてしまいそうになる。

四面楚歌的な状況に内心慌て、どう対象したものかと悩んでいれば、

「……シオンちゃん……」

ポツリと喋った母に一瞬ドキリとしたがそのまま寝息を起てていた為寝言だと理解した。

ホッとしたのもつかの間。

いきなり母の目から涙が出てきたのだ。

俺を抱きしめる手に力が入るのが伝わった。

「……いかないでえ……」

「っ！？」

尚も涙を流しながら眠る母を見て悔しさに刈られた。
母さんにこんな顔をさせてしまった。

他の誰でもない俺自身が。

やはり少しでも母と一緒に居てあげたらこんな事にはならない
のだろうか……

しかし、今は我慢してもらうしかない。

これも全て、家族を守る為なのだから。

今努力しないと悲劇は止められない。

非力な自分がただ見ていることしか出来ない状況など耐えられな
い。

未来に起きる惨劇から、絶対

「…………絶対、守ってみせるから……」

決意の言葉を母に告げ、この日だけはせめて付き合ってあげるか、
とまだ微かに残る眠気かすにこの身を委ね、再びまぶた瞼を下ろす。

太陽の日はすっかり昇り、鳥の囀りが耳に入る。

その囀りに起こされ、目を開ければ自身を抱きしめていた筈の母が既に居ない事に気付いた。

まだ働かない頭を強制的に起こし、食卓に向かえば母がいた。

「あ、シオンちゃん起きたのね」

「……おはよ」

返事をすればそのまま笑顔で、はいおはよう。と返す母。

「ご飯出来たところだったから今起こしに行こうとしたのに…」

基本いつも母より早くに起きてる俺を起こす喜びを味わいたかったらしい。

そんな母に連れられそのまま席に座り、出来上がった料理を口に運ぶ。

「…だいぶ料理の腕上げたね」

「そりゃそうよ。いつまでもシオンちゃんに負けてられないもの」

そのまま黙々と料理を食べていれば真剣な顔になった母が口を開く。

「……シオンちゃん。何か悩みがあったらお母さんに言ってね…」

その発言の意味が理解できず黙って聞いてれば、続けて話しはじめる母。

「なんかね、シオンちゃん抱え込みすぎなんだと思う。だからね。困った事があったら、もっとお母さんを頼っても良いんだよ?」

ここに来て変な心配を掛けてしまった事に漸く気付いた。

口に含んでいた食べ物飲み込み、答える。

「大丈夫だよ。母さんは心配しないで」

「で、でもお…」

微笑みながら大丈夫だと伝え、これからどんなことが起きても心配しないで欲しい事を伝える。

「あつ。それとこれからは昼ご飯と夕ご飯いらないから」

「……ふえ?」

これからは本気で強くなる為にいちいち家に帰ってくる時間が勿体ないので朝食を食べてからそのまま夜まで稽古を行う予定を起した。

しかし、それだけはイヤ！と止めようとする母。

せつかく俺に褒められるくらい料理の腕を上げたから、これからは毎日腕を振るう予定だったらしい。

だがコチラとしても譲^{ゆず}るわけにはいかない。

そんな母をなんとか説得して、せめて母が作る弁当を持って行く事で手を打った。

これからもつと高見に行からはさなければならないのだ。

そしていつも通り稽古場に向かい素振りを始める。

ビスタが来る夜に向けて少しでも良くなる様にと願いを込めて。

第九話 課題

夜

日が沈み、月が昇^{のぼ}った頃

この場所に一つの影が近付いていた。

俺は現在『沁』に人が近付いて来る事を教えられ木の上に隠れていた。

闇に紛れて来るからしてビスタが来たことを予想した。

そしてその人物が俺の隠れている木の下を来たと同時に切り掛かる。

しかしその奇襲をもともせず避ける影。

「つつお！？ いきなり何だよい！」

その声を聞いた瞬間に影がビスタでない事が分かった。

そして別の影がもう一つ。含み笑いながら現れた。
その聞き覚えのある声の方を睨めば、

「……くくくつ。良い目だ。タベより一際^{ひときわ}覚悟が座ってる様に見える」

少し離れた木の影からビスタが現れた。

「おいビスタ！

お前のその腕の理由が此処にあるって聞いたから来たのに、来たらこんな餓鬼しか居ねえじゃねえかよい！！」

「ああ。だからそいつだ」

コチラに向かって指を向けるビスタ。

「ソイツが俺の腕を叩いた張本人だ」

「……冗談だろ？」

会話する二人組をよそにコチラはコチラで話していた。

（『沁』。どういうこと？ 二人居るんだけど？）

『 ああ。我は一人しか来ないとは一言も言っておらん 』

その声を聴いて自分が試された事に気付いた。

そしてあまり『沁』に頼り過ぎるのも良くないのでこれからなるべく自分で気配察知を行える様にしようと考えを纏めて目の前の二人組に気を引き締める。

会話が終わつたのか再びコチラを見据える二人組。

「それで？ お前は誰だよい？」

「……ビスタさん。どういう事ですか？」

「ああ。タベお前にやられた腕がコイツにバレてな、理由を話したら着いて来ちまったのさ」

「無視すんなよい！」

無視された事にイラつき怒鳴り散らすマルコ。

「そう言えば俺も坊主の名を聞いてなかったな。お前がコチラの名を知ってるのに、コチラがお前の名を知らないのは少し不平等じゃないか？」

ビスタの言葉に内心確かに、と思うが事前に俺の情報は聞いていると言っていた。

たぶんマルコに気を使ってるのかと思ったので

「……シオン……」

と、小さく自分の名を告げる。

そしてビスタの右腕を見れば木の枝が固定されていた。

「……その腕……」

「ああ。昨日お前から受けた一撃の打ち所が悪くてな、しばらく使えない状態だ」

右腕を上げ、使えない事を告げるビスタ。

「それでだ坊主。代わりと言っては何だが、このマルコも今日から俺に付き合うそうだから宜しく頼んだ」

「いや俺付き合うとか一言も言っただけだよ!」

ビスタに講義するマルコ。しかし難無く丸め込まれてしまったマルコ。

「まあ、お互いに名乗りあった所で……始めるでしょう」

ニヤリと口端を上げるとビスタは告げた。

現在、俺はビスタと打ち込みをしている。

ビスタに傷を負わせた力がどれ程のものか見せてほしいとマルコに言われたからだ。

『打ち込み』と言っても俺が一方的に攻め、ビスタはそれを木刀で防ぐだけ。

流石に得物を使ったビスタの強さは段違いだった。片手というハンを貰ってはいるが攻撃が一向に当たる気がしない。

いくら打ち込めどその攻撃はいなされ、防がれ、一本取るのがとても困難に思えた。

一旦距離を置き息を整えていればマルコが、もういい。と言い終わらせる。

結局一本もビスタから取る事が出来なかった。分かってはいたけど、やっぱりビスタは強い。

息を整えながらどうやってビスタから一本取ったものかと思考を巡らせる。

「……なあビスタ？」

「なんだ？」

「……コイツ何才って言ってた？」

「4才」

「……冗談だろ？」

マルコは信じられないと言った様に口を開けていた。

「そもそも何だよあの剣速！ 4才であそこまでやれるなんてそこから辺の雑魚なんか相手になんねえぞ！

しかもお前とまともに打ち合ってるし！」

「だから言っただろ。この傷は仕方なかったんだ」

「そうは言ったがお前の話と全然違うじゃねえかよい！」

それからしばらく言い合うビスタとマルコ。

「はあ。もういい、大体の実力は分かった。」

シオンに近付き小さくため息をしたマルコ

「取り合えず。当面の目標はビスタから一本取ることだ。」

「…はい」

そして再び打ち込みが再開された。

素直に言われたことを行うシオンにマルコは自身の顔が笑みを浮かべている事に気付いた。

「気に入ったみたいだな」

不意にマルコに話しかけてきたビスタ。

気付けば訓練を一時中断し、休憩を挟んだらしいビスタが近付いていた。

「…これ程の才能…育ててみたいと思わずにはいられんだろう？」

「ああ…確かにな」

頷くマルコにビスタも口端を上げていた。

「悪いがアレを先に見付けたのは俺だからな。好きにさせてもらうぞ」

「おいおい、ちょっと待てよい。いくらなんでそれは無いだろ。あ

んなもん見せられて大人しく見てろって方が無理ってもんだ」

「坊主のスタイルを見ただろ。明らかに剣士だ」

「いや、シオン坊はまだ若いから素手のやり方も教えれば今からでも遅くないだろ」

お互いに武器と素手の良いところをスラスラと言いつつ二人。どちらとも一歩たりとも譲る気は無いよう段々と険悪な雰囲気になってきた。

「ビスタ。お前喧嘩売ってんのか？」

「ならどちらが言いか坊主に聞いてみようじゃないか」

「望むところだよい！」

「…やっぱり自分は武器が良いです」

その発言を聞き泣き崩れるマルコと勝ち誇ってるビスタ。

「なんでだよい！ 何で素手の戦いが拒否されるんだ！ 何が不満なんだよ！」

「いや、別に素手の戦いを否定してる訳じゃないんですけど、自分はまだ子供ですし大人に対向するなら武器を手にとった方が早いじゃないですか」

「お前アレだぞ！？ 素手なら覇気とかも結構幅広く扱えるんだぞ！ それに男と言ったらやっぱり素手だろ！！」

「覇気…」

その言葉に、確かに覇気も扱いたいなあ。と思うが今は武器の方が良い。

「それでも…武器…」

ちくしょおおお！！と地面に両手を着いて泣き崩れるマルコ。
対してビスタはその笑みを崩さず頷いていた。

「流石俺が見込んだ奴なだけはあるな。武器の良いところを良く分かっている」

マルコを宥^{なだ}めている俺に話し掛けてきたビスタ。

「そもそもお前の戦い方は能力を使つての戦い方だろ。無能力者の坊主なら武器を使った方が強くなるに決まってる」

「ビスタさん…でもやっぱり素手は素手で教わりたいです。マルコさんの言う通り素手の戦いも利便性が広いですし、何より覚えておいて損は無いと思いますから」

「っ！？ 本当かよい！？」

泣きの体勢からガバツと勢いよく起き上がり詰め寄って来るマルコ。

「は、はい。今は刀を用いた戦いを覚えたいですけど、いずれは素手の戦い方も取り入れたいと思います」

その言葉を聞いて何処かほっとしたのか、にやけながらビスタに詰め寄るマルコ。

「どうだビスタ！ シオン坊は素手も悪くないとさ！」

ざまあみる！ とビスタに言い放つマルコに対して「ああそうだな」と受け流すビスタ。

大人だ。

そして当面はビスタからどうやって一本取るうものかと考えていたが、此処で原作の登場人物と再び係わってしまった事に気付いた。

マルコと言う人物が係わってきた事には少し焦ったが、まあこれ以上増えなければ問題は無いかと思いいこの日は幕を閉じた。

増えた。

次の日の夜の事だ。

朝から稽古場に行きいつも通り木刀の素振りをして夜になればピスタ達が向かって来てる事を『沁』から聞き、そのまま真剣に素振りをしていれば、4番隊隊長のサッチまで連れてきた。

なんでもあの後、マルコとビスタ二人で飲んでる時に俺の話になり、言い争い出した二人の会話を聞いて興味を持ったサッチが俺にも会わせると言ってきたとか。

取り合えず自己紹介してきたサッチ。

「よう。俺は白ひげ海賊団4番隊隊長をやらせてもらってるサッチだ。宜しくな」

微笑みながら言うサッチ。

「…宜しくお願いします」

取り合えず挨拶をしておき相手を一瞥する。いちべつ

原作ではティーチに殺されてしまう人だったがまさか会う羽目になろうとは……

「おいおい。何だよこのガキンチョ。普通この島の住人なら俺達を目にした瞬間飛びついて来るってのに妙に落ち着きすぎじゃねえか

？ それに髪が伸びてて顔が見えない分不気味だし」

「まあ坊主にも色々あるんだろ。変な詮索はしないでやれ」

サッチとビスタの二人がヒソヒソと喋る中マルコはシオンに近付き昨日の素手の良いところを話していた。が、その会話を聞き割って入ってくるビスタ。

ビスタいわく、武器を自身の手足の様に使えてこそ一人前だそうで、対するマルコは、なら始めから自分の手足を使え、と言い張り抜け出せない口論になってしまい最終的には実力行使にまで発展する。

素手の良いところは身体の一部なので何処まで扱えるか分かりやすく、最終的には鈍器の様な拳になるまで鍛え上げ、素手でも武器要らずになれば大きな力になる。

一方武器の良いところは攻撃範囲やら威力等が上がり誰でも使える事。

最終的には身体の一部になるまで使い熟し、自在に操ればそれはそれで大きな力になる。

素手の理想は武器で、

武器の理想は素手とまるで黝いたちこつこの様な関係だなと一人納得するシオン。

そんな考えに老けていると、サッチが話し掛けてきた。

「ま、二人が話してたシオンって奴が一目見れて俺は満足だ。それにしてもまさか本当に子供だったとはな」

「何が…です？」

「ああ、あのビスタに一太刀ひとたち入れた奴が子供って聞いたからな。これは一目見ておきたいもんだって思い見に来たって訳さ」

「それは……ビスタさんは素手でしたし、それに夜だったんで視界も悪かったんです。あの状況だったら仕方ないかと……」

俯うつむきながら状況を告げるシオンに口を開くサツチ

「あのなあ、シオン。いくらビスタの奴が素手でもコイツは白ひげ海賊団の隊長なんだぞ。」

そんな奴に、まぐれにしろ一太刀浴びせたんだ。もっと胸を張っても良いと、俺は思うがな」

「でも……」

「まあいい。自分を過小評価する奴も俺は別に嫌いって訳じゃ無いしな。それにビスタやマルコのお前の褒めたたえ様は見ていて面白い」

え？と反応するシオンに対してビスタとマルコは驚愕の表情をしていた。

その二人の表情を見てニヤリと笑うサツチ。

「聞いてくれよ。昨日この二人、あろう事かお前の」

そこまで言って前のめりに崩れるサッチ。

そして地面に倒れる前にマルコがその身を支え、そのまま抱え込むとビスタが口を開く。

「悪いが今日はもう帰る。」

打ち込みは出来なかったが代わりにヒントをやるつ。

何故俺が坊主の攻撃を防げるのか、考えてみる」

「…何故防げるのか……？」

ニヤッと口端を上げるビスタ。

「次に来る時にはもっと成長してる事を期待してる」

その身を翻し、また今度来ると言うビスタにマルコも頷き足を進めた。

どうやら白ひげ海賊団はこれからしばらくの間宝探しに出掛けるので空いてる時間を使ってわざわざ会いに来てくれたらしい。

そして俺はそれからもう少し残りビスタがくれたヒントを考えながら、次に島に戻って来る頃には絶対に一本取ってやると意気込み素振りを続けた。

第十話 気配とは

白ひげ海賊団が宝探しに出てから一月が経った。
あれからビスタに言われた言葉の意味をひたすら考えた。

何故防げるか？

単純に俺の剣が遅いかビスタの反応速度が早いのか。

だとしたら今の段階ではどうしようも無い話だ。

ただひたすら俺自身の身体能力を上げるかしないのであれば、
まだまだ時間が必要だ。

でもビスタが可能性も無くあんな事を本当に言うだろうか？

、何故防げるのか考えてみる

あの口ぶりは何か可能性があるから言ったんだと思う。

なら他には行動パターンが決まってるのか

他にあるとしたら…

「…視線、かな」

狙ってる場所を特定されてるから防がれる。

視線とか殺気は人から感じられるモノだ

でも本当にそれだけだろうか

まだ他にも何かありそうな気がする…

考えが纏まらない中、考えられる範囲で思考しながらひたすら木刀を振り続けた。

そして早く帰って来ないかな、と思うシオンがいた。
自分の考えた事が正しいのか早く試したい。
その思いで頭が一杯だった。

海を見渡せば向かって来る船を目にして自分が嬉々としているのが分かった。

白ひげ海賊団が帰ってきた

港に行けば、最初に比べれば多少劣るが結構な人が群がっていた。

そしてぞろぞろ船から下りてくる白ひげ海賊団。その手には金銀財宝が抱えられていた。

ドシャツ！ と地面に置かれた財宝を住人達が見てどよめきの声や感銘の声が広がる。

そのどよめきを断ち切るように白ひげが口を開いた。

「これで宴を一月分出来るだけの酒と食料を取り寄せてくれ。足りるか？」

財宝を目の当たりにして少し落ち着かない町長。

「え、ええ。これだけ頂ければ充分かと…」

「そうか。なら後は任せた」

釣りは取っておけと言うように差し出す白ひげに住人達は戸惑っていたが有り難く頂きお礼の言葉を言っていた。

実際お釣りは充分過ぎる程だ。

白ひげの言う一月分の酒と食料など財宝の二割程で十分だ。それ程のお宝の山なのだ。

そして残った財宝は町の資金に回される為、少しずつだが発展していった。

財宝を受けとった町長達は早速準備に取り掛かるため動き出し、白ひげ海賊団もこれから自由行動みたいでそれぞれで動き始めた。

俺は目的のビスタを見つけ、ビスタやその仲間達にバレない様に一人になるのを待ちながら後を付けた。

そして段々とビスタの周りから仲間が居なくなるのを確認してか

ら声を掛けようかと思ったが、それと同時に辺りから人氣が無くな
っていく事に気付いた。

何故かビスタは段々と人氣が無い所に向かつてる気がする…
まあこちらとしてはその方が有り難いのでそのまま着いていく。

そして辺りから完全に人氣が無くなり

「
出て来い」

突然口を開いたビスタにビクリとして身を竦^{すく}める

向こうからは気付かれるはずがないと思っていた。
何で気付かれたんだろ、と思いつつ自身の身をさらけ出す。

「やっぱり坊主か」

まるで分かっていたとでも言うように話し出すビスタ。

「…いつからですか？」

「ん？」

「いつから気付いていたんですか？」

俺の質問に思い出す様な仕草をするビスタ。

「そうだな。たぶん俺が一人になってからだ。たぶん坊主だと、そ
んな気がした」

「そんな気がしたって…」

めちゃくちゃだ。要するに感で分かったってことなのかな？ その異常な第六感に驚愕する。

「そういつお前こそ、どうしてこっそり後なんか着いて来たんだ？ 港で普通に話し掛けて来れば良かったじゃないか」

「……………」

白ひげ海賊団になるべく関わりたくなかったから、なんて言えなかった。

「…まあいい。ところで俺に何の様だ？ 何か用事があつたから来たんだろ？」

「…はい。課題の答え合わせがしたくって…」

「そういうことか…どうせ夜にはいつもの場所に行くつもりだったんだがな……今すぐが良いのか？」

コクリと頭を縦に頷くシオンに溜息をこぼすビスタ。

「…分かった。なら場所を変えよう。此处では狭いからな」

そのままビスタと移動した。

「ここまで来れば良いか」

辺りは人気がない町外れ。

そこで剣を交えることになった。^{まじ}

わざわざ人気が無い所まで移動してくれたのはコチラを氣遣った
ビスタなりの配慮だと思う。

「この後俺も用事があるからな、勝負は一度だけだぞ？」

その発言にコクリと頷き木刀を構えるシオン。

ビスタもつられて渡された木刀に手を取る。

今回は狙いを一カ所一カ所に捕らえることなく意識を全身へ向けることを忘れないで攻めるのが課題。

視線を捕らえさせない為だ。

まだ予想でしかないがビスタは俺の視線を捕らえて防ぐ程の化け物じみた洞察眼を持っているという結論に至った。

ビスタは手にコインを持ち、ピンツ！と親指で中空に弾き飛ばす。
そしてシオンは腰を落とし、コインが地面に落ちると同時に踏み出した。

5メートル程の距離を一瞬で詰め木刀を胴回りに打ち込む。

しかしガンツ！ という音が広がりビスタが手に持つ木刀で防がれた事に気付く。

ギリギリと重なり合う木刀。

流石に腕力では勝てずに押し返されてしまった。
一度離れてから息を整え、再び地を蹴った。

花剣の剣士に舞うのは剣撃の烈風。

端から見れば双方の姿は霞んで見え、ただ カンツカンツ！ と
辺りには木と木がぶつかり合う音が き渡る。

「……むう」

課題の効き目があるのかビスタの顔が微かに変わった。 行ける！

そのまま連撃を繰り出すも全て防ぎ続けるビスタ。

そして一旦距離をとるためにビスタは後方に飛ぶ。
しかしまだまだ逃がしはしない。

腰を落としてより一層脚に力を入れる。

ビスタに向かって飛び掛かろうとした瞬間

「そこまでだ」

「…え？」

ビスタから抑制の声を聞き、ピタリと身体を止める。

「…以前より少し工夫をしてるみたいだな」

そのまま話し出すビスタ。

「剣速や動きが前より速くなってる気もする。そして何より狙いどころを捕らえづらくなった」

今回の課題を意識したかいがあつたのか長所をすらすらと答えていく。

「だが、それだけではまだ俺から一本取れることは難しいな」

しかし結果は無惨にも散ってしまった。

「…なにが…なにが、いけなかつたんですか？」

「いや…特に悪い所もなかった。しかしこれを言ったら課題を出した意味が無いしな…」

少し考える素振りそふりをするビスタ。

「そうだな…ならまたヒントをやろう。」

さつき坊主が俺の後を着いて来た時、坊主の様な気がしたと言つた。なら気とは何だ？ 気配とはなんだ？」

その問い掛けに顔を竦すくめるシオン。

「それが分かつた時、お前は俺から一本取れる様になつて」

対してビスタは口端をニヤリと上げる。

「また次に持ち越しだな」

そしてそのままシオンに背を向け歩き出す。

「…そうだ」

しかしそのまま行けば良いものを立ち止まって口を開くビスタ。

「せつかくだからお前も一緒に来い」

いきなりの発言に、「え？」と返すシオン。

「何処に行くんですか？」

「なに。とても良いところだ」

ビスタの表情からは満面の笑顔が伺える。うかが

しかし、その笑顔とは裏腹に何か厄介事の気がした。

僅かに思考してから、失礼の無いように丁寧に頭を下げる。

「…折角のお誘いですが、お断りさせていただきます」

「なに、変な所じゃない。終わった後はスッキリする所だ」

「でも…何か嫌な予感が…」

そこまで言うものの、「先程の相手をしてやっтарう」という理由で渋々ながら着いていく事になってしまったシオン。

目的の場所に着けばそこは散髪屋であった。

聞けばビスタは髪形にもこだわってる様で島に着けば良く行くそう
だ。

そして今回はタイミング悪く俺が係わってしまった為こうして着
いて来てしまった訳だが……

「よおマスターとりあえず俺はいつも通りに。そしてこの坊主は適
当に切ってやってくれ」

「畏まりました」

深々と頭を下げるダンディーな店の主。

というか勝手に話を進めてもらっては困る。

「…あの…自分は髪を切る気は無いんですが…」

「なに、心配するな。ここの店主の腕は保証する」

「光荣であります」

「いや、そういう訳では無くてですね。切りたくないんです」

「なんだ？ 愛着でもあるのか？」

「そういう訳でもないんですが……」

肩元まで伸びた自分の後ろ髪に前髪は表情が見えない程伸びていた
「なら切った方がいい。それに坊主くらい髪が伸びてたら何かと邪魔になるだろ？」

むう。と、うなり声を上げるシオン。

「それにだ。そのくらい長い髪を切れば視野も広がり攻撃を防ぎやすくなると思うぞ」

そして最後にこの一言だ。

今は少しでも強くなりたかったシオン。

ビスタの言葉に背中を押され、わかりました。と答えれば フツ、と鼻で笑い、勝ち誇った顔をするビスタ……少しイラッとした

「本人からの許可は得た。盛大にやってくれ」

「畏まりました。では、とりあえず長さは全体的にカットし前髪は顔が見えるくらいの長さでやっていきます」

店主は俺の髪を切っている最中に「これは……」だの「おお」だの一人声を荒げていた。

一方ビスタは新聞の記事に集中している様でコチラを振り向かない。

そして主なカットが終わったのか頭を洗う作業に入った。

「終わりました」

満足顔の店主

「終わったか。どうだ？ 坊主くらい髪が長かったらだいぶスツキリし……」

新聞を見ながら話し出し、目をコチラに向けたビスタは絶句してしまった……そんなに変なのかな？

「坊主？ お前女だったのか？」

何を今更と思い半分呆れ顔になるシオン。

「なに言ってるんですか？ 自分は歴れっきとした男です」

「だってお前その顔……」

「……………」

ビスタに鏡の前に移動させられ自身の姿を改めて眺める。

しかしビスタが女と間違えても仕方が無い

そこには女としか形容出来ない姿が写し出されていたからだ。
何度見ても女の様な自分の顔を見せられ小さく溜息が出る。

「…だから切りたくなかったんです」

あまり人に注目されるのが苦手な為若干気落ちするシオン。

その一方テンションが上がって口を開く店主。

「素材が良かったのでコチラも切っていて楽しかったです。つい夢中になってしまいました」

少し趣味に走ってしまいましたが。と付け足す店主。

全くもって余計な事をしてくれた。

店主の趣味のせいか余計に女の子っぽく見えてしまう。

そして悪戯心が働いたのか、ビスタの発案でマルコに会わせて驚かせようと言い出した。

シオンは嫌々ながらビスタと一緒に店から出てビスタはシオンの手を引きながらマルコを捜し始めた。

町を少し歩き回ってから見つからないマルコに頭を悩ませたビス
タ。

そんなビスタに、少し待ってて、と伝えビスタから離れて精神を
集中して『沁』とのパスを繋ぐ。

『沁』、聴こえる？

『なに用だ？』

マルコを捜してるんだけど何処に居るか知らない？

『ああ。それなら此処におる』

此処。ということは、『沁』は基本稽古場から動かない為稽古場
に居ると分かった。

『童を待っており。早く行ってやれ』

『沁』に御礼を言ってからビスタに「着いて来て」と伝え今度は
シオンが先導して稽古場に向かう。

稽古場に着けばマルコが地面に座り込み海を眺めていた。

その後ろ姿を確認したビスタは、本当に居た事に驚いたのか目を見開いている。

そのまま歩いてマルコの後ろまで行けば、

「やっと来たか。ビスタ、と……誰だ？」

振り返り際に言い放つマルコ。

「くくくつ。驚いたか？ そうコイツは」

「そっちの趣味に走ったか……」

しかしビスタが思っていたリアクションとは別になげ歎くマルコ。

最初こそ意味が分からず、「は？」と返すビスタにマルコは…

「いや、悪い。お前がロリコンだったとは知らなかった。でも気に入んなよ。それでも俺達は…家族だよ」

そこまで行き、やっと言葉の意味を理解したのか否定し始めるビスタ。

悪戯しようとしていたビスタに対してマルコはその優しさで応えてくれたのだ。

一見したらとても良い話に見えるが実際はそうでもなかった。

そんな光景が面白く隅で静かに笑っていれば誤解を解いたビスタ

から改めて呼ばれる。

「それで？ そのかわい子ちゃんは誰だよい」

マルコの反応を見る限り、ビスタがまだネタをばらしていない事に気付いたシオン。

「どうも、シオンですよ。マルコさん」

「…なん……だと……？」

その発言に信じられないと言う様な顔をするマルコ。

しかし髪の色等、何で髪を切らなかったのか事情を話せば納得してくれた。

そしてまた夜に会うということでの場は別れた。

しかし一部の船員が街中で、ビスタがシオンの手を引いていた瞬間を見ていた為。

この日、『ビスタが目覚めた』という噂が白ひげ海賊団の中で知れ渡ったのは余談である。

「ただいま」

「シオンちゃんお帰り」

家に着けば出迎えてくれる母。

しかし、シオンの姿を目にした母は固まってしまった。

「……………」

「……………」

そのまま母と目が合ったまま僅かな時が流れる。

「…私に切らせてよ!」

と、いきなりの怒声にビクリとするシオン。

「そ、そんなに怒らなくても…」

「だってシオンちゃん! 今まで私が切ろうとしても拒み続けてたじゃない! そりゃ怒るわよ!」

言っ母である。

今までは人目を気にして伸ばし、自分で切っていた。なにせこの

母に任せると今以上に酷い事になってしまつのだ。

だがそんな理由も今は気にしてられない。

そこで今度から髪を切る時は母に頼む事でこの場での怒りを納めてくれた。

そして、何故かこの日はいつも以上に強く抱きしめられながら眠りに就く羽目になったシオンであった。

第十一話 白ひげ海賊団（前書き）

お久しぶりです！

始めましての方は始めまして m (| .) m

更新なかなか…

けっこう…

かなり…

遅れてしまいました。申し訳ありません m (|) m

しかし！

遅くなっても更新は頑張つて続けます！

これからよろしくお願い致します！！！！

第十一話 白ひげ海賊団

自惚れかもしれないけど、俺はこの世界に来てから強くなったと思う。

生まれた時よりも俺の精神力は遥かに洗礼され、鍛えた肉体はそこら辺の大人より上だ。

「やーい！男女！おとこおんな 男女！」

「男の癖に女みたいな顔しやがってー！」

だからこんな状況屁でもない。

あのビスタ達との辛い修業に比べれば全然対したことないじゃないか。

あ…小石まで飛んできた。

飛んできた小石を避け、そのまま子供兄弟を無視して待ち合わせ場所で目的の人物を待っていること数10分。

「こらこら。お前達止めないか」

「「ビスタさん！！」」

いきなり現れたビスタに驚く兄弟。

「だって！ あいつだけ白ひげ海賊団の人達と話せるなんてずるいじゃん！」

「そうだよ！ 僕だって白ひげ海賊団の人達と一緒に遊びたい！」

「そうは言ってもな…」

別に遊んでる訳でも無いんだが…と言葉に詰まるビスタ。

「…遅いですよ」

少し不機嫌気味のシオンが話に割って入る。

「ああ 悪い悪い。それでも急いで来たんだ。それにしても坊主、お前イジメられてたのか？」

「誰のせいでこうなったんだか…」

怨みを込めて視線を送れば少しおどけるビスタ。

そうだ。元はと言えばビスタ達が絡んで来たのが悪い。

この兄弟だって俺がビスタ達と関わらなければ何もしてこなかっただろうし、髪さえ切らなければ周りの子供達だって気味悪がって寄って来なかっただろう。

何より顔を曝さらしたくないと思っていた自分がいたので余計な事をしてくれたとつくづく思う…

シオンが一人でぶつぶつ愚痴ってる間にビスタは兄弟に別れを告げてから歩き始め、その場から移動する。

シオンもそれに続いて後を追う。

「…それで、話って何ですか？」

「ああ実はな…」

「船まで着いて来て欲しい!？」

「ああ」

いきなり白ひげ海賊団の船まで来てほしいと切り出したビスタ。その発言に驚き、つい進める足を止める。

結構今更かもしれないが原作の登場人物には関わらない様にして
いるシオン。

当然の様に拒否体制に入る。

「…なんですか」

そのまま疑う視線を送りながら、とりあえず訳だけでも尋ねてみれば、言い淀^{よど}んでしまつて何と言っているか良く聞こえない。

しかしどうしても来てほしいと一向に譲る気がない事からするに余程の事とみる。

「どうしても行かなくちゃいけないんですか？」

「ああ。お前との噂^{うわさ}が皆の耳に入つてな。誤解を解いて欲しいんだ」

「噂？」

自分とビスタの噂……考えられるとしたらビスタ達に指導を受けているということしか思い浮かばない。

でもそのくらいの噂で何の誤解を受けているというのか……

訳も分からず思考していると、有り無しを言わずしてビスタがシオンの手を引っ張り連れていこうとする。

「まあとにかく行こう。考えていても仕方ないしな」

「ちよつ！　ちよつと待つてください！　もう少し考える時間を！」

「別に移動しながらでも考えられるだろう」

シオンが抵抗するも気にせず引っ張るビスタ。

そんな時に四人組の白ひげ海賊団の船員と遭遇してしまった。

「「「「.....」」」」

「.....」

「.....」

見てはいけないものを見てしまった。
と驚愕する四人組。

「.....ついにそっちの趣味に行ってしまったか...」

そしてその間が耐えられなかったのか一人の船員が口を開く。

「悲しいツス！ 隊長が本当に少女趣味だったなんて!!」

「バカ。お前本人前にしてそういうこと言うな...」

「前からロリコンっぽい顔だなあとは思ってましたけど、まさか本当にロリコンだとは思わなかったです」

それに続くように次々と口を開く船員。

しかしそれを全力で否定するピスタ。

「だから違うと言ってるだろ！ コイツは男だ!!」

なんとか誤解を解きたい為に批判する。しかし...

「男……だと……？」

「もうドン引きッス！ 話し掛けしないで下さいッス！！」

「シヨタだ。シヨタに目覚めたんだ」

「真正の変態でしたか……救い様が無いですね」

心がズタボロになるまで切り刻まれたビスタ。なんというか、可哀相でならない。

だいたいの状況を察するにビスタは自分との関係を船員の皆に話してほしかった、ってことか？

どういう訳か白ひげ海賊団内では俺とビスタが付き合ってるという事になってるらしい……

まあでも、このまま誤解された状態でも別に支障なんか……

「お前も少しは否定しろ！ 誤解された間々だと何れは町中まちに広がるぞー！」

「……………」

「やーい！ 変態変態！」

「やーね。あそのシオンちゃん、男の子なのに白ひげ海賊団のピスタさんと付き合ってるらしいわよ」

「本っ当おに！ アソコの家は教育がなってないわね！ この島の恥だわ！」

「おめえんとここに売る商品はねえ！ とっとと帰ってくれ！」

思い浮かぶのは島全体からの罵声、イジメ……

俺だけならまだ耐えられるかもしれない……けどそれが家族である母さんにまで迷惑が掛かってしまう……

散々イジメられた後は家族揃って野垂れ死に……

それだけは

「それだけは避けなければ……」

先に子供兄弟に石を投げら事もあり、シオンは暗い思考しか出来なかった。

考えられる最悪な現象を予測して、何としてでも防ぐことを決め

る。

いつの間にか船員四人組とビスタの会話は終わっており、その場には俺とビスタだけしか居なかった。

「…ビスタさん」

言葉の斬撃によりネガティブな状態に陥^{おちい}っているビスタ。

「行きましょう」

「そ、そうか！ 来てくれるか！」

沈んでいたビスタの表情が一気に晴れる。

涙ぐみながら喜ぶからして相当嬉しかったのか

意を決して白ひげ海賊団と顔を会わせる事にした。

出来ることなら、なるべく早めに誤解を解いておきたい。

ビスタに着いていけば、目の前にはモビーディック号。

内心関わりたくないとは思いつていたけど、自然と胸が高鳴ってしまう。

今まで見てるだけで満足していた世界。

本当に自分はワンピースの世界に来たんだなあと改めて認識する。

誰にも気付かれない様に彷徨とる中、甲板に足をかけ、その船内に足を踏み入れる。

途端、

目の前に広がる光景に圧倒された。

そこには白ひげ海賊団全隊長含め、世界最強の男。白ひげ、エドワード・ニューゲートが居たからだ。

「
」

我を忘れた。

それは感動と実感、二つの感情が同時に身を襲ったことから起き

た。

たまらず目から涙がこぼれ落ちた。

その場に居る全員の目がシオンに集まる。

目の前にいる白ひげから発せられるその存在感。
それは世界最強に恥じないモノだった。

遠目から見ていただけでも十分に伝わって来ていたモノが今は目の前で放たれている。

その差は比べ物にならない。

肌にヒリヒリと伝わるその覇気に圧倒され、今にでも倒れてしま
いそうな程の目眩に襲われる。

流石は世界最強、と言われるだけの事はある。

「シ、シオン坊。別に怖がらなくても此処に居る奴らはお前に危害
を加えたりしないよい」

心配になったのかマルコが話し掛けて来てくれた。

「あっ……ち、違うんです…これは、そうじゃないんです…
…」

そこで始めて自分が泣いているんだと気付き、慌てて涙を拭う。

今までシオンの四歳児ならぬ言動と態度で接してきたマルコ達は動揺を隠せなかった。

「そりやいきなりこんなむさい野郎共に囲まれたら怖がるのも仕方ないかも知れないが、泣くほど嫌だったかよい」

「あつ！ 隊長そりやないっスよ！」

「そうですよ！ 元はといえば連れて来たビスタ隊長に責任があります！」

「何を言う！ だいたいお前らが変な噂を広げるからこんな場所まで連れて来たんだ！」

「ほら嬢ちゃん。飴あるぞ。食べるか？」

さっきまで沈んでいた空気が一変して、白ひげ海賊団の人達がシオンを慰める様に接してきてくれる。

（何て言うか、暖かい人達だな）

自然と顔が綻んでしまうシオン。

関わりたくなかった

でも

着いてきてよかった

よかったと思う中、ビスタが自分との関係を説明する。
しかし誰ひとりとして話を聞いていないような…

「ああ。そんなの冗談に決まってるじゃないですか」

「っな！」

「だいたい隊長達、最近の宴の時はいつもその子の話で盛り上が
ってるじゃないですか。話し声がいつも聞こえるんですよ」

「最初こそ女の子だと思ってビックリしましたが、まあ馴れちま
えばどうってことないでしょ」

いつも酔った勢いで話していたらしい当のビスタは口を盛大に開
け放心している。

覚悟を決めて来たけど、とんだ無駄骨だったみたいだ…
誤解も解けたみたいだし早くこの場を去ろう。

「でもさ、ビスタ隊長達に教えを受けてるってことは結構強いのか
な？」

（余計な事を！！）

「ふん。馬鹿を言うな。坊主はお前らより数段強いぞ。何と云ってもこの俺が指導してるからな」

放心状態から素早く抜け出し、ここぞとばかりに胸を張るビスタ。

「おいおい。ビスタ、一応俺も指導してる一人だぞい。」

話しに加わるマルコ。

「おもしれえ！　おい！　お前行けよ！」

「馬鹿言うな！　俺が相手したらあの子がケガすんだろうが！！」

流石は白ひげ海賊団の船員。

腕に自身がある強者ばかりみたいだ。

「ゼハハハ。」

隊長達。なら、こんなのはどうだ？　いつもあんたらがやってる事を俺達に見せてくれよ」

「ティーチ」

「っ！」

どくんっ、と胸が高鳴った。

今この場では俺しか知らない未来が頭をかすめる。

マーシャル・D・ティーチ。

通称黒ひげ。

四番隊隊長サッチを殺し、悪魔の実（やみやみの実）を持ち去り逃亡。

その後、今はまだ居ない二番隊隊長、火拳のエースを捕らえる。

後に七武海の称号を得てインペルダウンに潜入。

史上最悪の囚人達を仲間にした後、頂上戦争に介入。

白ひげを討ち取りその能力、『グラグラの実』の能力を取り込む。

そう、

コイツは白ひげ海賊団の、いや世界の元凶。

しかし、自分にはどうする事も出来ない。

原作には関わらないと決めたんだ。

「ああ。それでどうだい？ 俺の提案は？」

「そうだな。坊主の実力を見せるにはそれが一番手っ取り早いかな。おい、誰か木刀を取ってくれ」

仲間の船員から三つの木刀を受け取り、内一つを手渡されるシオ

ン。

「今回は少し本気で行くぞ。

部下の手前、負けるわけにもいかんからな」

そしてビスタは二本の木刀を手に取り戦闘体制に入る。

両者の準備が整った事をマルコに伝える。

「そんじゃま

二人とも準備出来たみたいだし、コインが落ちたら始まりだよい」

マルコの合図によりコインが空中に放たれる。

キンッ！

とコインが地に落ちると同時にビスタが前に飛び出しシオンがいる場所に向かって突きを放つ。

しかしシオンはその攻撃を読んでいたかの様にいなしてかわし、反撃の一撃をお見舞いする。

途端にぶつかり合う木刀と木刀。

そのまま互いに打ち合う両者。

防いでは攻め防いでは攻めの繰り返し。

どちらも一向に勝利を譲る気が無く、当たれば致命傷は避けられない連撃が繰り返された。

そんな二人の動きは戦闘の領域を越え、舞の域まで昇華した。

その動きはあらゆる人を魅了してあらゆる人を虜にした。

その動きに皆が見惚れ、時の流れを忘れた

スパーン!!と

結果はシオンのスタミナと集中力切れでビスタに袈裟切りによる一撃を貰ってしまった。

しかし流石のビスタは僅かに息切れしている程度でかつまだ余裕がある表情だ。

そしてシオンが傷を負わない様に決めの一撃は加減してくれていた。

しかしそこで可笑しなことに気付いた。

辺りを見渡せば静寂が広がり誰ひとりとして口を開く者は居ない。

「お、終わりましたけど……」

意を決して口を開くシオン。

「うっ」

途端

「「「うおおおおお!!!」」」

一時の間を置いて歓声が湧き、辺りの空気を震撼しんかんさせる。

「すげえ！ ビスタ隊長と渡り合ってたぞ!!」

「信じらんねえ！ あの体の何処からあんな攻撃が出せたんだよ！」

「ゼハハハ！ こりゃ参った。隊長が言ってた事は本当だったか！」

称賛の声が絶え間無く続いた。

負けてはしまったが、シオンは褒められた事により今まで自分が

積み重ねて来たことが無駄ではなかったと、今度は嬉しさのあまり涙がこぼれた。

顔に熱を感じてる事から今の自分はさぞかし酷いことになってるだろうと予想するが、出てくる涙は決して止まらなかった。

彼が今日まで続けてきた特訓は本当に辛かったからだ。

自分はどのくらい強くなったのだろう。と、

いつそ特訓など投げ出してしまつて母と一緒に楽しく暮らすのも悪くはない。

かわいい嫁さんを迎えて平和ボケしながら世継ぎを残せていけたら、さぞ幸せだろう。

そんな誘惑が幾度と無くシオンに襲い掛かった。

しかしそんな仮想の平和など決して長くは続かない。

ただ攻められるだけの暴力にビクビクしながら暮らしていく未来など、決して幸せは築けない。

だからこそ自分が強くなって自分の平和を築こうと努力した。

その努力が今、僅かだが実つたのだ。
嬉しくない訳がない。

しかしそれと同時に、とても自分勝手な自分が少し嫌になった。

そう、これは全て自分の為。

人は詰まるところ自分の事しか考えない
何処まで行こうと自分自分。

自分の幸せの為に他人を巻き込む。
自分の幸せは平和に生きること。

それが少しずつだが確かに近付いて行っている様で嬉しくもあった。

「ようマルコ。俺に見せたかったのがあの鼻たれか？」

「ああ。実はこの島に来た時に会ったんだが、親父……気に入ったかい？」

「ぐららら。まあ面白くはあるな」

「…そうか。それは良かったよい」

ボロボロと涙を流すシオンを微笑ましく眺める白ひげとマルコだっ

た。

第十二話 別れ

現在

ビスタと打ち合った後、さっさと帰ろうとしたら宴に付き合えと声を掛けられた為に強制参加中。

日は沈みかけ夕方になるもそんなの関係なく宴に付き合い合われる。

「ほらもつと食え！ 沢山食べないと大きく成れないぞ！」

「…はい」

「坊主！ こっちの飯も旨いぞ！ 食え！」

「…はい」

「こっちおいで！ おーよしよし！」

「…はい」

所々でいじくり回されるシオン。

助けを求める様にマルコとビスタを探すが目的の人物は盛大に飲み明かし、なんか取っ組み合っていた。

「俺だ！」

「いーや俺だね!」

「これだよ。あいつら最近飲むとお前はどっちを好いてるかなんて言い合ってるんだ。」

この前だって俺がお前に言おうとしたら思いつ切りド突かれちゃったのに、自分達でバラしてちゃ意味ないと思わないか?」

気付けば隣に四番隊隊長のサッチがいた。

「はあ…くだらないですね」

「まあそう言うな。ある意味ハーレムじゃないか。他の奴らにも気に入られてるみたいだしな」

「なんか違う気がします」

「そうか?」

何処か悪戯臭い笑顔を浮かべるサッチ。

この人は本当、根っから人をからかう癖があるのかも。

サッチに散々いじくり回された後、船から身を乗り出し体を休める。

港の方を眺めていれば、昼間の兄弟が羨ましそうにこっちの方を

見ていた。

手招きしてみると嬉しそうに寄って来る兄弟。

「すいません。あの子達もこの船に乗せてあげてくれませんか？」

「おおいぞ。おい！ 橋を下ろしてやれ！」

近くにいる船員に頼んで兄弟を船に乗せる。

「すごい！ おれ白ひげ海賊団の船に乗ってる！」

「町のみんなきつと羨ましがるだろうね！」

想像以上に喜ぶ兄弟。そんな二人がシオンに近付いて来た。

「お前…さっきは悪かったな。ごめん。石なんか投げたりして…」

「ごめんなさい…」

ぺこりと頭を下げる兄弟。

こんなにも素直に謝られると愛着すら感じてしまう。

「もういいから。気にしないで、ほら。」

二人をみんなが待ってるよ」

「そうか！ じゃあまたな！」

「またね！ お兄ちゃん！」

うん。全然許すよ。俺の代わりに散々弄もてあそばれて貰えれば。

少し黒い事を考えるシオン。

楽しそうに白ひげ海賊団と戯れる兄弟達。

「俺は将来！ 白ひげ海賊団に負けなくらいの海賊になってやる
！！」

「僕だつて！！」

はは。何だかこの兄弟を見るとエースとルフィを思い出すな。
実に子供らしい夢だ。

微笑ましくこの兄弟を見つめるシオン。

……そういえば、原作っていつ頃始まるんだろ？

原作では白ひげが点滴をしていた。

それに白ひげがこの島に来てからエースの姿は見えないのでまだ
先だとは思っけど

「楽しいか？」

背後から突然声を掛けられ一瞬驚くも振り返りその姿を確認する。

「ええ。いい人達ばかりですから」

まさかの白ひげが声を掛けてきた。

「そうか…」

シオンの横に腰を下ろす白ひげ。

辺りは兄弟と遊ぶ人。酒に溺れ酔い潰れ始めている人。飲み比べを行う人達ばかりだった。

ここまでどんちゃん騒ぎされると、うるさいを通り越して微笑ましい光景だ

「そういえば、名前を聞いてなかったな」

「…シオンです。シオン・オルテンシア。
えと…白ひげさん？」

「……ニューゲートでいい…坊主。
話を、聞かせてくれねえか？」

「…?。」

話して、どんなです?。」

「なんでもいい。この島の話しても、お前の親の話しても…。」

「この島の人達はいいい人達ですし、親は…父は自分が生まれてくる前に他界してるんですが、母は元気ですね。」

「…そうか。悪い事を聞いたな…。」

「いえ、でも…。」

(なんで母さんは白ひげ海賊団が嫌いなんだろう)

「…でも…なんだ?。」

「いや、貴方達はこの島では紛れもなく英雄ですけど、一部にとっても避けられているんです…。」

間違ってもうちの母親ですとは言わない。

「……………」

僅かに思考する白ひげ。

「…そうか。」

なにか分かったのか話を打ち切る白ひげ。

「もう夜も遅い時間だ。誰かに送らせよう……」

気付けばすっかり日が暮れ、所々で家に光が燈ともされる。

船内を見回す白ひげ。

しかし皆が酔い潰れて地面に寝転がっている。

「まったく…馬鹿な息子達だ。風邪引いちまうぞ…」

一人一人の顔を眺める白ひげ。

その瞳には愛情に似た光を感じた。

「ならしかたねえ」

重い腰を上げる様に立ち上がる白ひげ

「俺が送ってやる」

「…え？」

僅かの間を置いてシオンから気の抜けた声がこぼれ出た。

「俺が送ってやると言った」

「い、いいですよ！送って頂かなくても一人で帰れます！」

「そう遠慮すんな。ガキ一人無事に帰してやれなけりゃ俺の名折れだ」

「一人って、あの兄弟は？」

「とつくに帰った」

何故その時に俺にも声を掛けてくれなかったのか疑問に思う…

『酷い事を考えていた癖によく言う』

『沁』の声が聴こえた気がするけど、きつと気のせいだ

だけど…

今更言えない！ 実は貴方達を避けてる一部の人は、うちの母なんです。とは…

なのでこのまま家まで送って貰うと非常にまずいことに…

散々遠慮したがそのまま送って貰う事になり、白ひげが先導してくれている。

襲って来る人はいないと思うが心強すぎて逆に恐いくらいだ。

「……………」
「……………」

その沈黙が気まずすぎてシオンが意を決して先に口を開いた。

「…あの、一つ聞きたかったんですけど」

「なんだ？」

「どうして、ニューゲートさんはこの島を自分の物にしようと思っ
たんですか？」

「……………そんなもん決まってるだろ……」

僅かに思考する白ひげ

「…気に入ったからだ」

「は？」

思わぬ答えに啞然とするシオン。

いや、ある意味海賊らしいと言えば海賊らしいのかもしれない。
ただその規模が想像の遥か上を行ったまでのこと。

「たったそれだけの理由で自分の島にしちやっただんですか？」

「それだけじゃねえ、その（・・・）理由があるからこそ、てめえの
もんにしちまう。

それが…海賊つてもんだ」

「は、はは…」

笑っしかなかった。

本当にこの人は、何もかもが規格外過ぎる…

「…大きい、ですね」

「ぐららら。なに当たり前の事言ってやがる。俺あ白ひげだ。
…ああ、此処までだな。後は一人で行けるな」

「え？…あ、はい。此処まで送っていただければ十分です」

森を抜け、気付けば家は数メートル先にあった。このまま母に会われたら発狂しかねないので願ったり叶ったりだ。

白ひげに別れを告げ一人で家に向かう。

家のドアを開け、中に入ろうとしたら…

「シオンちゃん!!」

「いきなりどうしたの!?!」

家に入ればいきなり母が抱き着いてきた。

「こんなに遅くまで帰って来なかったからママ心配したんだよー!」

「そんなに心配することでもないでしょ? いつもの事だし」

(そつえば…)

「そんなことないわよ! 今は海賊もいるし気をつけないと!」

(どうして白ひげは俺の家の場所を知ってたんだろ?)

「母さん…落ち着いて」

まあ良いか…今はこの母親を落ち着かせる事が先決だ。

「シオンちゃん!!」

「いきなりどうしたの!？」

その親子を遠目から見て、白ひげは何処か微笑んでいた。
そしてそのまま自分の船に戻る為に来た道に戻る。

船に着けば、すぐに自身の部屋に入り椅子に座り込む。

最近体調も良いとは言えない状態が続いている。

その状態にも何人かにばれ始めているので息子達の間で広がるのも時間の問題か。

僅かに思考していると扉がノックされている事に気付く。

「親父。少し良いかい？」

入って来たのは1番隊隊長マルコだった。

「ああ。いつてえどうした？」

「親父。いつもの親父なら息子にするって言うと思ってたのに、どうしたんだよい……あいつは親父が求める次世代の卵だ」

その言葉を聞いてヒクリと白ひげの^{まぶた}瞼が僅かに反応する。

「…何言つてやがる。あんな鼻たれになんざ海賊業は^{つと}務まらねえ」

「そんなもん経験を重ねたら関係なくなるさ」

「……あいつはダメだ…」

何処か遠くを見詰めながら言う白ひげ

「訳を…聞いても言いかい？」

「ぐらららら。奴はまだまだちいせえからな、この危険な海に連れ

出す訳にもいかんだろ」

「親父も見たはずだろ、シオン坊の強さを。それにあいつは他の船員達とも仲良くやれる。何の問題も無いじゃないかよい。」

「それでも、ダメなもんはダメだ」

「でもよう…親父…」

「マルコ。」

これは船長命令だ。これ以上あいつの会話は止せ」

「…わかったよい。親父」

白ひげ海賊団の宴に付き合わされた翌日。

「今日出航するんですか!？」

「ああ。親父が急な用事が出来たらしくてな。直ぐに出る」

白ひげの用事により島を出る事になったらしいビスタがそのこと

を知らせに稽古場まで来てくれた。

「答え合わせ…」

「ん？……ああ、気配の事がそれならまた今度会う時でも」

「ビスタさんが言う気配っていうのは、予備動作、重心の移動、音、視線。人から発せられる全ての現象の事を言うんですね」

驚いているのか目を見開いてるビスタ。

「…なんだ坊主。お前気付いてたのか。
てつきり次に会う時までの楽しみに取っておこうと思ったんだが
な」

「まだ仮定の段階だったんですよ。
確信するまでは…言いたくなかったんで」

「な…」

そう、今思えばビスタはヒントをくれていた。
俺がビスタを追跡した時にあえて人気がない所に向かったビスタ
の行動は、よくよく考えてみると不自然すぎた。

その中に自分が発してる気配に気付かせるヒントが有ったのに俺

は気付かなかった。

しかし予想していく内にもしかしたらと今の仮定の話をしたら、見事に引っ掛かってくれたみたいだ

「やられたよ」

呆れたのか鼻で笑うビスタ。

「なあ坊主……なんならこのまま……いや、なんでもない。元気に暮らせよ」

「……？ はい。ビスタさん達もお元気で」

今日まで指導してくれた事を感謝しながら深々と頭を下げるシオン。

そして船が出る準備が出来たのか、マルコがビスタを呼びに飛んできた。

「ようビスタ。準備が出来たよい」

炎々と燃え上がるその両腕。

悪魔の実、動物系幻獣種モデルフェニックス。

それがマルコの食べた実だ。

マルコが纏う炎をシオンが眺めていると気付いたマルコが話しか

けてきた。

「ああ。そういえばシオン坊に見せるのは始めてだったか。そう俺は能力者だ」

今度は完璧な不死鳥になるマルコに乗り込むビスタ。

その炎は熱くはないらしい。

「またな坊主。次に会う時はもっと強くなってる事を期待している」

「元気で暮らせよ。シオン坊。またな」

そして飛び立つマルコとビスタ。

そのまま港に行き町中の人達で見送る船出

遠くなっていく白ひげ海賊団の船をいつまでも見送るシオンだった。

島から出航したあとビスタは島の方角を見詰めていた。

自分で気付けたあいつならきつと強くなれる。また…次に会える時が楽しみだな…

「なに黄昏^{たそが}れてんだよい」

小さくなる島を今だに見続けるビスタにマルコが話し掛けてきた。

「…俺達が居なくなつた後、島の状況が心配だつたんが…」

「まあ、親父の旗もあるからな。大丈夫だろ」

「だな…そしてなにより、坊主がいる」

「ああ四歳のシオン坊に頼るのも釈^{じやく}だが、あいつの強さは本物だからな」

島の方を眺めながら微笑むビスタとマルコだった。

第十三話

一年後（前書き）

いやはや、まさかこんなにも更新できなくなるとは思いませんでした。

今はリアルが忙しすぎです（言い訳）

第十三話

一年後

白ひげ海賊団が島から離れて一年の月日が経った。

島は一年間、平和な日々が続き、定期的にだが白ひげのこの船員が島の様子を見に来ていている事がわかった。

そんな俺は現在5歳。

この一年間ただひたすら”御守り”をしていた。

自身の事で変わったことと言えば身長と髪が少し伸びたくらい。
後は…

「シオン！ なにボーっとしてるんだ、つよ！」

ぶんっ！ という風切音と共に少年の木刀が虚空を斬る。

（一年前に仲良くなった兄弟達が、今では頻繁につるむ様になってしまったことか…）

目の前にいる少年は勝ち気な性格で町では番長的な位置におり、俺より一つ年上。それが兄のヨウだ。

白ひげ海賊団が旅立ってからと言うもの、兄弟の片割れ、兄の方はひたすら強くなろうと特訓を始めた。

最初の頃はまだ良かった。

朝のランニングで俺が走っていると、いきなり横に現れ競走をしようとしてきたり、町での力仕事に積極的に取り組んだり、なかなか好青年たらしめる行動をとっていた。

しかし、最初の一月くらいで、あきた。と言いはじめてからは酷かった。

島には町の反対側に、森が有る。

俺の”稽古場”とは別な森で、危険な肉食動物こそ居ないが、そこで猿等の動物と戯れたり、その姿はさながらターザンを思わせる。

一度夜遅くまで帰ってこなかったヨウを心配した親御さんは町の人達に協力してもらい、島中を捜した末に件の森で発見された。

その捜査に協力していた俺と我が家の母だが、「家のシオンちゃんもつと遅くに…」と、嘆いていた気がするがそこは聞かなかったことにした。

親に散々叱られたヨウは懲りたのか泣きながら親に詫びていた。

しかし、「どうしても強くなりたいんだ」と言う少年の言葉を聞き入れ、どうしたものかと考えた大人達はシオンに任せると言うことで皆は一任した。

当のシオンは最初こそ「はあ!？」と驚愕し、断ろうとしたが大人達の期待の視線を一身に浴びてしまい、断るに断れなくなってしまった。

そんなシオンの元、多少まともな特訓に切り替わった。

朝のランニングから基本的な筋力トレーニング。

しかし先の捜査以降、シオンは夜中に出入り禁止を受けてしまった。

なんでもサキ叔母さんやら近所の奥さん方に、夜中に子供が一人
で出掛けるのは”非常識”ということを教えられた母は、心を鬼に
して講義してきた。

「シオンちゃん！ お母さん心を鬼に言うね！！ 当分は夜の
外出を禁止します！！！」

「…なんで？」

「…ふえ？」

反論されることを予想してなかったのか呆然とする母。

「だ、だってだって、私はシオンちゃんのお母さんなんだよ？
心配するのは当然じゃない！」

「心配するのは確かに親の仕事だよね。けどその子供を信頼する
のも親の仕事だと思うんだ」

見た目に反して正論と思わしき言動で何とか言いくるめようとするシオン。

そんなシオンにたじろぐ母。

「で、でも！ 夜はお母さん一人で寝るの寂しいし…」

一般常識など関係無しに、自分の思ったことを口にする母。それが本音が…

「そんな我が儘言つと、嫌いになっちゃうよ？」

冗談のつもりで言った言葉。しかし効果は絶大だったみたいで…

「やだやだ！ お願いだからお母さんの事嫌いにならないで！」

「…それならどうすれば良いか、分かるよね？」

途端、瞳から光を失う母。

「…うん。私はシオンちゃんの行動に一切口出ししない、関わらない」

いつの日だったか図書館で催眠術について勉強していたシオンは面白半分で試してみたが効果の程は思っていた以上だ。

これで今まで通り夜の訓練が出来る。

そう思うが、しかし母が心配しているのも事実。

そうして結局母の言う事も尊重して、今では夜の外出は”なるべ

く”控えている。

まあ、ヨウ少年にやる気が有るのは構わないが、その特訓に俺まで付き合ってるのだ。

たまったものではない…

しかし、放置しておく度過ぎた特訓方法に勝手に切り替えてしまう為に、見守るついでに特訓に付き合っている。

小さい子供に催眠術をかけるのも気が引ける。

「はあ…」と溜息を漏らすシオン。

思考を現実に戻し、目前で木刀を振るう少年に視線を戻す。

「ん？ ちょっと考え事」

尚も視線の一寸先を通り過ぎる木刀。

「それにしてもお前、すばしっこい、っなあ！」

「そんなことないよ。少し体の軌道をずらしてるだけだから、実際はそんなに動いてない」

体の軸を横に動かし、目前を木刀が通り過ぎる

「お前も少しは攻めて、っ来いよ！」

「いや。俺は攻めるのは向かないから。
怪我もしたくないしね」

一向に当たる気配がない木刀はただただ虚空を斬るばかり。

数分してから息を切らした少年ヨウ。

「くっそ！ ダメだっ！ 全然当たらねえ！」

「もう休む？」

「ああ 一呼吸したら再開な」

「本当負けず嫌いだよな。まあ良いけどさ」

快晴の空を眺めながら休憩する二人。

町の方を見れば遊具で遊ぶ子供達からほらしており時は平和に過ぎていく。
実に良いことだ。

「　　なあシオン…」

唐突に口を開いたヨウ。

その瞳がコチヲを捕らえる。

「お前から見て、オレって強くなってるか？」

彼と付き合い始めて早一年。

その成長の早さは他と比べても郡を抜いていると言えた。

「…まあ、同年代の中じゃ飛び抜けてる、かな」

思った事をそのまま口にするシオン。

「そうか…！」

ヨウは沈んでいた表情が途端にパツと晴れ、笑顔を浮かべる。

実際彼くらいの歳で此処まで動ければ良い方なのだろう。

しかし大人と本気で試合をしたとして、勝てはしないと思うが…

考えに耽^{ふけ}つてると遠くの方から弟さんが兄を迎えに来た。

「ヨーウ！　お母さんがご飯だつて！」

この弟さんは兄よりも大人しめで海賊になると見栄を張っていた割には兄ほど特訓を行わない。

ミリア

それが弟の名前。

俺よりも一つ年下でよく懐いてくれてる面倒見の良い弟だ。

「シオン兄ちゃんも食べに来る?」

ヨウに対して兄と付け加えわなくせにシオンに対しては兄と呼ぶミリア。

(まあしいて言えば…)

上目遣いで言いつつ、抱き着いてくるミリア。

(”若干” 兄より大人しい分、スキンシップが激しいのが問題か)

「そつかそつか! じゃあシオン、オレもう行くわ!」

気に入らなかったのか俺とミリアを引きはがす様に間に割って入るヨウ。

その勢いに押され若干後ずさるシオン。

「うん。気を付けて帰りなよ」

体制を立て直し、手を振りながら去る兄弟を見送り、その姿が見えなくなるまで見送ってから、今度は一人での特訓に切り替える。

『沁』を呼び出し、辺りに人がいないか気配探知を行う。

今ではだいぶ慣れ始めた『沁』との同調。

契約こそまだしていないが、一月くらい前に、やっと『沁』を見る事が出来たのだ。

今だに触らせては貰えないが、それでも此処まで口説くのには時間が掛かった。

何故触らせてくれないのか聞けば、まだ危険だから。とのこと。

しかしそんな『沁』の許可を得てだが、力の一端を使わせて貰ってる。

『沁』の能力を使えば精神力を消費し、その力が大き過ぎると精神崩壊を起こす危険性も有ること。

なんだかんだ言っただけ俺の心配をしてくれている。

それから一時間。

一人での特訓を終え、仰向けになりながら再び平和な時間を満喫する。

この様にして時は続いていた。

日は沈み、町に明かりがぼつぽつと燈される。

酒場の方は得に盛り上がり、海賊達の姿がちらほら伺える。

うかが

流石に白ひげのマークだけあって他の海賊は暴れ出さない。

やがて民家の光が消え始め、皆が就寝し始めた事を告げる。

町の明かりは酒場と見張り番を残し他は眠りはじめる。

こうして今日も平和な時間は過ぎていく

シオンが夜の稽古を終えてから家に着き、眠ろつかとした時に、唐突に爆音が響き飛び起きた。

何事かと外に出てみれば、目の前では惨劇と言える様な光景が広がっていた。

暗闇の中、燃え上がる町を見て何が起きてるのか理解出来なかった。

火事！？

そう思ったが違うようだ。

町からは悲鳴と逃げ惑う住民達の姿が見えた。

そして、それを襲う海賊達の姿が…

全てを悟った時、すぐさま母を起こしに寝室へと向かう。

「母さん起きて！ 一大事！」

さっきの爆音でも起きずに、すやすやと眠る母を揺すり起こす。

「ふえ！？ なになに！？ どうしたのシオンちゃん？」

普段落ち着いてるシオンの態度が一辺してる事に驚き跳び起きる母。

「町が燃えてる！ 早く逃げて！」

「え？ え？ なんで？ どうして町が燃えてるの？」

「そんなのわかんないよ！ 良いから早く！」

シオンは母の手を取り、木刀を片手に家を飛び出していた

元々一隻の海賊船が湾内に入った時だった。

グランドラインでログを取る海賊。
全然警戒などしていない見張り番の人達。

それが普通の出来事で日々行われる出来事だったからだ。
彼等の住む島にとっては当たり前の様な光景だった。

しかし

その海賊船は、あろうことかいきなり砲撃してきたのだ。

見張り台と白ひげのマークが吹き飛び、悲鳴が飛びかこつ。

何が起きたのか状況を理解出来ない街人達は混乱する。

その海賊船は港に橋を掛け、いつきに街になだれ込んで来た。

状況を察してから町人達も迎え撃とうと行動するが、気付いた時にはもう遅い。

海賊は辺りの民家に火を撒き散らし、その火は徐々に街を侵食する炎となった。

避難を始める住人達。

なりふり構わず暴れる海賊や、その混乱に便乗して他の海賊まで金品を持っていき始めた。

逃げずに戦う人達もいた。

しかし流石にこのグランドラインまで来る海賊達だけあって実力者揃いの様だ。

今まで平和に暮らしてきたこの島の住人達とは、その力の差は歴然だった。

「ぎゃはははは！　ここは思ってたより金品が多いなあ」

「ああ　流石は白ひげ海賊団の所有地なだけはある」

海賊達の手には金銀財宝。

元々白ひげから貰った町の資金にまで手を着けはじめた海賊は我が物の様に運び出した。

「まさかあの砲撃で此处まで騒ぎになるなんて…」

「当たり前だ。船長の入念な計画を立てての事だ。誤算ではあつたが、混乱に上じて他の奴らまで暴れだした。早めに財宝を積んで俺達も……殺るぞ」

ぼつりと冷酷に放たれた発言に、部下の男は冷汗をかいた。

副船長。

キャプテンの右腕にして常に冷静な判断を下す。船員達からは常に逆らえない相手として恐れられていた。

しかしそんな人物らでも部下がここまで着いてきたのは確実な収入が得られるからだ。

「お前らやめろー!!」

唐突に響く声に海賊達は一瞬驚き振り返る。

ヨウだ。

なんだ子供か。とヨウの姿を確認して海賊達は嘲笑っている。

ヨウは恐怖からか体は震える。

しかしそんな自分に喝を入れ、両手で握る木刀に力を入れ海賊達に撲り掛かる。

「うおおおおお!!」

その所突猛進の攻撃を嘲笑うかの様にひらりと避け、ヨウに蹴りをくらわす海賊の一人。

倒れたヨウは、顔をぐりぐりと地面に踏み付けられる。

「うつ！ うううう！」

歯を食いしばり痛みに耐えようとするが容赦なく踏みつける副船長。

「はははっ！ 命を請えば助けてやらん事もないぞ!!」

その姿を見て青ざめる船員達

「ふ、副船長…」

船長からは皆殺しの命令を受けてんだ。せめて楽にしてやれば……」

「まあそつ堅え事言っなよ」

尚も足に力を加える。

「まえ　　んかに　　」

「ん？　なんだこのガキ、なんか言いたげだな」

足を退かし何を言ってるのか耳を近付ける副船長。

「お、おまえらなんかに…ぜったい、負けるもんか…」

掠れた声で、怨嗟を呟くヨウ。

虚ろな瞳になりながらも続けるその子供を見て、すらりと腰につける剣を抜く副船長。

「はははっ！　何を言ってるかと思えば負け惜しみかよ！」

「お、おまえら…なんか…」

「口の減らねえガキだ！」

高々と振り上げられる剣。

「あばよ！　ガキ！」

その剣が振り落とされる。

やられる

恐怖からか、諦めから、目を閉じるヨウ。

途端、メシャツ！！と音が耳に届く。
まるで果物が砕けた様な音。

体を襲う斬撃は来ない。

疑問に思い、閉じていた瞳をゆっくりと開けば、目の前には見慣れた白い髪が風に靡なびいていた。

「し、シオン…？」

確認する様に言われたその名の人物はコチラを振り向かず口を開いた。

「何してるの？ 海賊達に勝てる訳無いでしょ？ 早く逃げなよ」

「で、でも。おまえ…」

そこにいた海賊達は？

そう聞こうとしたら、先程までヨウの顔を踏み付けていた海賊達

が20m程先に土煙を上げて倒れていた。

船員は少し戸惑っていた。

襲い掛かってきた子供を蹴り倒す副船長。
そしてそれを見て笑っている仲間達。

「…え？」

しかしいきなりあらん方向へと飛んでいった副船長と仲間の船員達に驚き声が漏れる。

「な、なんだ…いったい何が…」

元いた場所を確認してみれば年端もいかない白髪の子供が立っていた。

「やりすぎ…」

その子供からは異様な雰囲気を感じられる。
今までの人生で培ってきた男の第六感が最大限の警報を鳴らしていた。

コイツはヤバイ…

そんな存在に脅え、腹に抱えてた銃で迎え撃とう構える。

しかし目前の子供はいつの間近付いたのか、目の前にいた。

子供が持っていた木刀で銃を弾かれ無抵抗の状態になる。

「ちっ！　ちくしょうっ！！」

自身の攻撃が通用しないと判断し身を引いた船員。

そのまま地面に何かを投げたと思ったら、ぼふんっ！　と煙が巻き起こった。

「…煙幕」

視界に頼っても何も見えないので辺りの気配を探れば先程の男の気配が遠退いてる事に気付き一息つく。

そして自分の背後にいるヨウを見れば口をあぐりと開け、放心していた。

「…何してんの？」

当然のように何故一人で海賊に立ち向かったのか、むしろ何故逃げなかったのか聞くシオンに対してヨウは意志を取り戻したのかやっと口を開いた。

「な、なんだよ。おまえその強さ!？」

質問に質問で反され小さな溜息をつくが気が動転してるのかヨウの質問は止まらない。

「そもそも！ 俺よりも弱いおまえが、なんでっ！」

「そんなことは、まあ後で説明するから…早く逃げなよ」

出来るだけ優しく告げるシオン。

そしてシオンは再び駆け出し、ヨウの目前から消えていた。

シオンは母を避難させてから駆け出した。

町に着けば燃える民家。

いつもの見慣れた場所は変わり果て、燃える町並みは肌をヒリヒリと刺激する。

移動する最中、戦う大人達が目に入る。

遠目ではあるが、海賊が町人を襲っているのが見て取れた。
その海賊の攻撃に対し防戦一方の町人達。

シオンは勢いを乗せた木刀に力を込め、海賊に向かってその手を振るう。

有りつたけの体重を乗せた一撃は見事に海賊の胴回りに当たり、その体ごと吹き飛ばし、近くにいた海賊達ごと一掃出来た。

「うわあ!？」

「な、なんだ!？」

突然の事で町人達は一瞬固まり、何が起きたのか確認するが分らず仕舞い。

モクモクと土煙が舞って、煙が晴れたらそこには気絶している海賊達が纏まって倒れていた。

シオンはその様な事を擦れ違い様に数回行い、徐々に町を沈静化していった。

だいぶ海賊達をのしてから目にはいったのは自分の良く知る少年、ヨウだ。

剣が振り下ろされる瞬間。
間髪入れずに海賊の男に木刀を奮った。

「はあっ！ はあっ！」

シオンから逃げてきた船員は自身の船に向かい走っていた。

息が切れる中、その船室に飛び込む様に入る。

「ヤバいのが出ましたっ！ 想定外です！」

「…何がヤバいつて？ 監視は定期的に行ってきた筈だろ。いったいどんなトラブルが起きた？」

目の前の男に圧倒されながらも、何が起きたのか説明する船員。

「餓鬼です！ とんでもなくヤバい餓鬼がこの島には居ます！」

「餓鬼だあ？ まさかおめえ…その餓鬼に負けて、おめおめと帰ってきたんじゃないだろうな？」

「それは…」

船長の言い分に言い返す事が出来ない船員。

「仲間を見捨てて逃げてくる様な奴は、俺の船にはいらねえ」

ひゅんっ！と音がしたと思ったら船員の胸に穴が空いた。

そして息を絶つ船員。

口角を上げて笑う船長。

「さて…そろそろ俺も出るか。コイツが言ってた餓鬼ってのも気になるしな」

倒れる船員を足蹴り船を出る船長だった。

第十四話

敗北（前書き）

仕事も今は落ち着きまして更新出来ました。

このペースで更新し続けたらいいのに……これかも頑張ります！

（切実）

第十四話 敗北

町の人達は全員が避難した様で、もう町には居ない。

炎に吞まれる前に、シオン自身も避難を始めようかという時、やけに纏まつてる海賊の一団を見付けた。

遠目からその海賊の一団の様子を見ていれば屈強な男が一人前に出て声を上げた。

「俺の名はジョン！ この町を襲った海賊の船長だ！！」

高々と宣言するキャプテン・ジョン

「俺の仲間を随分と可愛がってくれてるみてえじゃねえか！ 出てこい！ 今度は俺様が直々に相手をしてや ！！？」

言い切る前に相手の胴体に渾身の一撃をお見舞いする。
町を襲った一味の頭だ。容赦なんて必要ない。

その船長と名乗った男が後ろに吹っ飛び仲間事倒れ伏せる。
慣れはじめた攻撃を繰り返し海賊達を一掃出来たかと思った。

しかし、ただ一人だけがその場に留まっていた。

今まで一人の標的に渾身の剣撃を当て、その勢いで近くにいた奴らも纏めて倒せていた。
しかしその時は違った。

飛んできた海賊達をサツと避けた男。

その人物が今まで倒してきた奴らよりも格上であることが明らかだった。

隙のない立ち方。

コチラを見据える視線。

纏ってる空気。

全ての気配が今までの相手より格上だと知らしめた。

「…その攻撃は、予測していた。此処に来るまでに総倒れで気絶してるバカ共をいくつか見てきたが、まさか本当にこんなガキがやっていたとは思わなかったぜ」

口を開いたソイツは淡々と告げる。

「…初めまして、俺がこの町を襲った本物の一味の頭。カプリコだ」

丁寧にも手配書を見せびらかす男。

懸賞金4300万ベリ

暴風雨のカプリコ

「せっかく招待不明の海賊が町を襲撃したって事実を作ったのに、わざわざ大声で自分がやったと叫ぶバカを演じさせれば、ノコノコ

と釣られて来るバカがいると思っただぜ」

「……………」

警戒を怠らずに相手を見据えるシオン。

「…無視、か。」

でもまあ、この後俺達は気絶してる仲間も回収して、お宝ごとこの島からとんずらする計画だ。うかうかして白ひげの一味がいつ来るとも知れん」

「……………やけに饒舌じやうぜつですね」

警戒心を解かずにカプリコの言葉に耳を貸せば、

「なに。…これから死ぬ奴に何を喋っても、何の支障もない」

まさかの死刑宣告を受けてしまったシオン。

「……………」

「生かしてやるとでも思ったか？ いや。証拠は何一つ残さん。この島にいる奴らは皆殺しだ」

構えるシオン。

「さっきのお前の攻撃はだいたい予想出来た。もう諦める。今だつたら楽に一撃で殺してやる」

流石に熟練の海賊だ。

同じ攻撃はもう通用しないか。

しかし、分かっていたとしても避けられない攻撃を仕掛ければ！

途端、相手の視界から消える様に横に外れ、カプリコの胴回りに向かって木刀を振り回す。

ボギン！ と音を発てて折れた 木刀。

「っ！？」

「っ！ 痛てえな。鋼鉄製の防具越してもこの威力か。たいしたもんだ」

ドスン！ とシオンの胸に何かが当たる。

ミシッ！ と当たった所から嫌な音が聞こえると同時に後ろに吹き飛ぶシオン。

シオンのこれまでの攻撃は奇襲。

敵の隙を突き、勢いを乗せた一撃で相手を駆逐する。

つまりはそれだけなのだ。

奇襲が成功しなければ、子供にしてはただの早く重い攻撃にしかない。

此処に来て実戦不足だと悟るが、明らかに遅すぎた。

不用意にカプリコの一撃をくらってしまったシオンは口の中が切れ鉄の味でいっぱいになり、更には胸に損傷を負ってしまった。

その痛みだけでもまともに動くことは困難だった。

「このガキ、当たる瞬間後ろに跳んで威力を減少させやがった…。本来なら胸に風穴が空く筈だったんだが…」

残念。と口にして構えるカプリコ。
その手には根棒が握られていた。

何処に隠していたのか、直径2メートル程も有るその根棒を持ち直し、シオンにトドメを刺そうと振りかぶる。

しかし、声がその攻撃を制した。

「待ってください!」

唐突に響く高い声。

横たわるシオンの前に、バツ! と影が出来、姿こそは見えないがその声には聞き覚えがあった。

母さんだ。

「私はどうなっても構いません! ですから…ですから私のシオンちゃんに手を出すのはやめてください!!--!」

「ほお…」

値踏みするかのように母を見回すカプリコ。

「…良いだろう。お前がうちの船に来るなら、このガキや町人を見逃してやる。どうだ？」

「……………分かりました」

「な、なに言ってるのさ。そんな事勝手に決めないで
「てめえは黙ってる。俺は今この女と話してんだ」

倒れてるシオンに近付き蹴りを食らわすカプリコ。

「や、やめて下さい！ 大人しく着いて行きますから！ これ以上
危害を加えないで下さい！！」

シオンを護る様に被さった母のお陰で攻撃は中断されるが、カプリコの蹴りをまともに受けたシオンの腕や足は痺れて動かなくなり、意識もハッキリとしない。

「分かった分かった。財宝もあらかた詰んだ様だし、早速行くぞ」

「は、はい……」

「最後に……」と、カプリコに言ってから母はシオンの方に振り返り、口を開く。

「シオンちゃん……」。

シオンちゃんには内緒にしてたけど、シオンちゃんが今でもたまたに夜居なくなるの、お母さん知ってたよ。

え？

「けど、優しいシオンちゃんはお母さんが安心して寝付いてから、いつも出掛けてたよね」

気付いてたんだ。

「でも、シオンちゃんが将来、何をしたいかっていつも頑張ってるのか
…お母さんにはまだ解らない」

そんなの決まってる。

家族を、母さんを護る為に強くなろうと頑張ってきたんだ。

「シオンちゃんが成長してく姿を見てけば、いつかきつと解ってあげれる日が来ると思ってた」

。

「でも、もうお母さんにはその先が見ることは出来そうに無い、かな……でも」

おどけながら笑顔を作ろうとする母。

「シオンちゃんはお母さんの誇りです！」

…さようなら。シオンちゃん！」

最後に、シオンにとびきりの笑顔を向ける母。

「……………」

前に自分で、海賊なんて皆ケダモノだ！　なんて言って、白ひげが来た時だって町でただ一人びびってたクセに、こういう時は動くんだから、たまらないよな…。

シオンに背を向け立ち去る母とカプリコ。
その姿を見届ける事しか出来ないシオン。

込み上げて来るモノを抑え切れない。

悔しい。

今ならば悪魔に契約してでも助け出したい。

契約

その言葉で思い出した。

（『沁』！　力を貸して！　俺と契約してくれ！）

『　何を慌ててる。その様ではまともな判断力が欠けてると見た。出直せ　』

『沁』が断りを入れる。しかしシオンは引く訳にはいかない。

（もし、此処で力を貸してくれないと言っなら…俺はこのまま乗り込む！）

『死ぬのか？』

（…無事じゃ済まないだろうね……けど、俺は死んでも家族は護る！）

何処か諦めた様に『沁』が溜息をこぼす。

『その場に呼び出せ』

すうっと、左手を前に出す

『創造しろ』

『思い浮かべるのは最愛の刀にして最高の刀。』

『そこに有るのは極みの一端』

ちりちりと頭の中を霞める電流

『主が従え、制御しろ』

その電流が徐々に体中に流れ始め、傷を刺激するも構わず続ける。

「っ!？」

全身を廻る電流は、やがて左手に凝縮されていくかの様に集まり、
徐々に形を成していった。

カッ！ と一瞬の光を放ったその手には、鞘に収まった刀が握られていた

『 流石に未完成か。しかし、初めて ” 創った ” にしては良し。
精々吞まれない様に気を付ける 』

刀を抜かせない為か鞘と柄を縛る紐に触れた瞬間

情報の奔流に襲われる。

お世辞にも絶好調とは言えない状態のシオンは簡単に呑み込まれ、
その情報量に耐えきれず、抗う事も出来ずに意識を失う。

カプリコは普通とは変わった性癖を持っていた。

それは相手を痛め付け、痛みで歪んだ表情と悲鳴を聞きながら
り殺すというものだ。

相手の精神を屈服させた表情。それが格別なのだと本人は語る。

そんなカプリコが約束を守るはずもなく、船に向かう道中、冷淡に口を開く。

「ああ…そろそろあのガキは死んだかなあ」

その言葉に、ばっ！と反応する母。

「あれだけ痛め付けたんだ。まともに動ける様になる前には、炎に吞まれるだろうな」

「あ、あなた…初めから約束なんか守るつもりじゃなかったのね！」

僅かに暴れる母を、手下の海賊が取り押さえる。

「証拠は一切残さん。さっきのガキ、町の住人…お前も含めてな」

憂鬱の表情が一気に絶望の色に染まる。

「つくつく。いい表情だ。最高だよ。せめてあのガキの為にも良い声で鳴いてくれよ」

くつくつと笑うカプリコ。

その根棒が母に向かって振り落とされる。

ドグシャッ！！！！

という音と共に地面にめり込む根棒。

顔面に返り血を浴びたカプリコの表情が嬉々として歪む。

陥没する地面は死体など残らない必殺の一撃だと知らしめる

しかし

「ん？

ひっ、ひぎゃあああああ！」

予想とは異なり、カプリコの根棒を持っていた腕がへし折れていた

「なっ！？　なんだ！？　いったいつ！！
てめえっ！　何をした！！！」

怒鳴り散らすカプリコ。

その先には、母を抱き抱えた”シオン”がいた。

くつくつ笑いながら、ゆらりと鬼幽の様に立つ”シオン”。

なかなか良いものだ

気絶している母親をソツと地べたに置き、護る様に前に立ち塞がる。

何かを確かめる様に自身の体を調べる”シオン”。

その光景に疑問を持ちつつも、冷静さよりも怒気が勝ったカプリコは動き出す。

遊んでいた玩具を取り上げられた子供の様に怒り心頭のカプリコ。

「どうやってあの火の手から脱出した！？ てめえはまともに動ける状態じゃなかった！！」

『あんな攻撃、なんて事はない』

「…てめえ。さっきと違って随分余裕じゃねえか」

『…なに。これから死ぬ奴に何を喋っても、何の支障もないのでな』

つい先程カプリコ自身が言った台詞をそのまま口にする”シオン”しかし、その台詞を聞き、カプリコは遂にキレた。

「舐めるんじゃないぞ！ 餓鬼！！」

折れた方とは逆の手で根棒を持ち、辺り構わず振り回す。

冷静さなど微塵も無くなり、今はただ感情のままに気に入らない

餓鬼を消し去りたい。

それは小規模な竜巻のようで、対象を飲み込めば跡形もなく消え去る事を連想させた。

「はははは！ 触れれば跡形も残らんぞ！！」

地面を僅かにえぐり小石が弾丸の速さで飛び散り、自身を守りながら突き進む。

暴風雨

奴に相応しいであろう名は此処から来ているのだと納得してしまった。

攻めは最大の防御。

誰だったかそんな言葉を残しているが、今のカプリコがピッタリそれに当て嵌まる。

部下の海賊達は知っていたのか船長の攻撃を受けまいと物影に隠れていた。

しかし

『それがどうした？』

”シオン”が納刀された刀を片手で持ち、カプリコに向かって付き出す。

周りの海賊は鼻で笑った。
何がしたいんだ。
死んだな。

と、そう思い少年の最後を確信し、グシャッ！！という音を耳にして自分達の船長を見据える。

目に映ったのは、ひゅんひゅんと放物線を描きながら空中に飛び
囲い、地面に突き刺さった根棒。

そして先の腕と同じ様にあらん方向へと折り曲がったカプリコの
腕。

「っがああああ！！」

”シオン”がとった行動。

それは一瞬の内にカプリコに近付き、擦れ違い様に相手の腕に一
撃をたたき込んだだけだった。

カウンター気味に入った攻撃が、カプリコ自身の力と相成って腕
を折ったのだ。

折れた腕を認識し、再び悶絶するカプリコにソツと歩み寄る”シ
オン”。

「ひっ！？ く、来るな！ 化け物！」

痛みにより冷静さを取り戻したカプリコは明らかに自分が不利と
見た。

何とか逃げ出そうとするが、ソレを”シオン”が赦さない。

『…化け物？』

その発言を聞いた”シオン”がカプリコを嘲笑う。

『その言葉も聞き飽きた』

何処か冷たさを含めた言葉は空気に溶け込むかの様に消え、ぱちんっ！ と音を鳴らし鞘と柄を縛る紐を解く。

居合抜きの構えをとり、カプリコに向かって駆け寄り

紫電一閃。

袈裟切りで放たれた剣閃は、自慢の鋼鉄製防具すら切り裂いた。

鮮血が飛び散り、カプリコの開いた瞳孔がぶれ、ドサリと倒れ伏せた。

キンッ！ と刀を鞘に戻しカプリコを一瞥^{いちへつ}し、小さく溜息をつく”シオン” たった。

「せつ、船長が負けた！」

「冗談じゃねえ！ 逃げる！」

「バツカ！ 船長を助けるんだよ！ おい！ おまえら逃げるな！
」

カプリコ海賊団の船員達は、自分達の船長がやられた事に酷く混乱していた。

逃げる者と船長を助けだそうとする者に分かれるカプリコ海賊団。

船長を倒した白髪の少年。

逃げ戸惑う船員達を目にした少年は、体を前のめりに傾けた。

倒れる！

そう思った船員は船長を助け出そうと動こうとする。

が…

目前にあった白髪の少年の体が地面に倒れ込む前に”消えた”。

海賊達の横を一陣の風が通り過ぎたと思ったら、後ろの方から悲鳴が聞こえてきた。

「ぎゃああああ!？」

「ひっ!？ た、助けっ」

船長を見捨て逃げ出していた船員達。

飛び散る鮮血。

その地獄絵図の様な光景に息を飲む海賊達。

「なっ…」

何が起きてるんだ

そう口にしようとした時には逃げ出していた船員達の悲鳴は止み、
地面に倒れ込んでいた。

再び風が通り過ぎた。

異様に寒気がする風。

沈黙が支配する。

しかし次の瞬間には、地面が段々と自分の前に 起き上がってきた

妖術の類か自分がおかしく成ったのか分からない。

地面が顔面にぶつかる。

体からは血がどくどくと溢れ出し、体から熱が引いて行くのと同じ時に自身が斬られ、地面に倒れ込んでる事に気付いた。

どうなってんだ…

いつ？ 誰に斬られた？ 思考する前にその海賊の命は幕を閉じる。

”シオン”がカプリコ海賊団を一掃してから直ぐに島全体を『探る』。

もう暴れてる海賊がない事を確認した”シオン”は目を閉じ、刀を消した。

次にシオンが目を開けた時、まだ燃える町並みを確認した。

自身の手や衣服は紅く染まっている。
あか

しかしその全ての紅は自分のモノではないと悟っていた。
あか

喉元に酸っぱい液体が込み上げて来る。
胃液が逆流する。

「ぐほっ！ げほっ！！」

むせ返りながらも汚物を吐き出すシオン。

夢なんかじゃない。

始めて人を殺してしまった。

中には家族を養っている人も居たかも知れない。

込み上げて来る罪悪感と吐き気を抑え切れず、今は成すがままに吐き出す。

出す物を出し尽くしてから一息付き、尚燃える町をぼおつと眺めるが、もはやどうしようもない。

火の手は止まらない。

きっとこのまま全てが焼き尽くされてしまうのだろう。

そう思ったが最後の力を振り絞り、なんとか目の前で横たわっている母だけでも助けようと試みる。

「……なんだこれは」

突然背後から現れた男の声に驚き、後ろを振り返れば全身をマントに包んだ男が二人。影で表情は見えづらいが、一人は顔に入れ墨が描かれているのが僅かに見えた。

もう一人は頭に丸い耳が付いた巨漢の男。

何処かで見たアングル。

その何処かで見たこと有るシルエットを思いだそうとするが、それと同時にプツンと糸が切れた人形の様に今度こそ本当に倒れるシオン。

そこでシオンの意識は途絶えた。

第十四話

敗北（後書き）

作者は中二病予備軍に成りかけてます。本当にありがとうございます。

感想お待ちしております！！

第十五話

命の恩人（前書き）

超不定期更新

I『D』越える者！

はっじまるよー

第十五話

命の恩人

俺達は世界を見て回っていた。

後を絶ちそうだった食糧を補充しようと島に向かったが、近付いた島の町は燃え、悲鳴と銃声こたまが木霊した。

遠目でもわかる程の惨劇。

「ヒッハー！　なんだか分かんないけど町が燃えてるじゃない！？」

黒いローブを羽織った顔面は、その光景を見ると絶叫し状況を述べた。

とりあえず町から少し離れた場所に船を着け、町の方角に向かう。

しかし島に近付くにつれ銃声と悲鳴が治まっていき、やがて静かになった。

町を焼き尽くす炎だけが機能していた。

どうしたものかと考え、僅かな気配を見つけそこまで駆ける。しかし思っている以上に火の手が早過ぎる。

「クマ！」

部下の名を呼ぶと同時に気配の場所までパッと瞬間移動する。

その場には何が起きたのか理解しがたい光景が広がっていた。

燃え盛る家並み。

血塗られた地面。

綺麗に切られた死体。

そんな中で、立ち尽くす白髪の子供。

「……なんだ……これは」

自身の目を疑った。

子供の体に付着してる鮮血を見て、一瞬瀕死の傷でも負っているのかと思った。

あまりの出来事に思考が追いつかない。

「まずいわ！ 火の手がそこまで来てるっチャブル！！」

「早く逃げないと巻き添えをくらっちまいますよ！」

現状が理解できないまま状況を整理していると後から来た部下達も追い付いた様で息を荒げていた。

次に子供を見た時には倒れ伏せており、その横には女性も横たわっていた。

そこでポツリ、ポツリと雫が落ちてきた。

男が雫を確認すると、手を翳^{かざ}す。

瞬間、ドウツ！ と突風が吹き荒れ、辺りを震撼させる。

「ちょっとヴァナタ！ そんな事したら余計に町が燃えるっタイプル！」

「ああ…ただの風ならな」

「何を言っ…！」

そして入れ墨の男が何をするのか悟った黒いローブの集団は沈黙した。

雨だ。

降ってくる雨は僅かなものだが、男が起こした突風に上じて小規模な嵐を起こす。

それにより広がる火の手を確実に消し去っていく。

やがて炎は完全に消え、再び町に静けさが戻った。

「ふう…一時はどうなるかと冷汗ものものだったけど、流石にやるじゃない…」

「俺の能力を見誤ってる訳じゃないだろイワンコフ」

「こんな辺境の地であり名を出すもんじゃないわよ…
ドラゴン」

モンキー・D・ドラゴン
革命軍の総司令官にして世界最悪の犯罪者。
そして、モンキー・D・ルフィの父親。

エンポリオ・イワンコフ
カマバッカ王国。

第二の女ヶ島と呼ばれる場所の女王にして革命軍の幹部。ホルホル

の実を食べたホルモン人間。

倒れていた白髪の子供を抱えるドラゴン。

生きていることを確認し、ホッと胸を撫で下ろす。

「クマ……」

「……………」

そう口にするとドラゴンの前に巨漢の男が現れた。

手袋を外し少年の体に触れ、”あるモノ”を弾き出す。

白髪の少年から飛び出たのは所詮ダメージという”モノ”。

そんな芸当が出来るのはただ一人しかない。

バーソロミュー・クマ

王下七武海の一人にして革命軍の幹部。

かつては海賊として暴虐の限りを尽くした男と言われており、その元懸賞金は2億9800万ベリー。

ニキュニキュの実を食べた肉球人間である。

「こっちの女性はどうだ？」

「……気絶してるだけだ。特にダメージは受けていない。いずれ目を覚ますだろう」

「そうか……」

ホッと一息付いたドラゴン。

「他に生存者はいないか！！！」

ドラゴンの声が静かに木霊する。

しばらく反応が無かったが、ひょっこりと一人姿を現す子供。

その子供はドラゴンが抱えてる少年を確認すると、わなわなと震え始め声を上げた。

「おまえ！ シオンに何をした！！」

ドラゴンが抱える少年をシオンと確認したヨウは襲い掛かってきた。

暴れるヨウを取り押さえるクマ。

「はなせ！ おい、おまえら！

シオンに何かしたらただじゃおかないからな！」

「そうか…この子はシオンと言うのか。

すぐに手当てをしてやる。君も含めてな」

「え…？」

目の前にいる人物が何を言ってるのか理解できず、僅かに思考す

るヨウだった。

シオンは夢を見ていた。

目の前に広がる光景には知ってる人物が映っていた。
先程まで自身をボコボコにしていた海賊。

その腕が碎かれ悶絶し、自慢していた鎧ごと斬られた。

繰り出されるその剣閃の美しさに一瞬見惚れてしまい我を忘れる。

その場で広がる血の噴水。

それすらも美しいと感じる。

そして周りに居た海賊までもが斬られ、鮮血を撒き散らしながら
命を絶つていく光景を目にするも抱く感想は

人が死んでる。

と、かなり他人事の様に感じた。

それは人を殺した実感が全くなく、映画を見てる様な感覚。

夢から覚めれば自身の腕に付着した血を確認し、今まで見ていたモノが夢などではなかった事を認識させられる。

命を絶つということは、その命を背負うということ。

その重みが一気にシオンにのし掛かる。

朦朧とする意識の中、声が聴こえた気がした。

『 悪いな主。少しだけ体を借りた 』

謝罪の声が頭の中に響くと同時に意識を手放した。

シオンが倒れ伏せてから数刻、意識が覚醒する。

体がダルい。

目をうつすらと開ければ木造の天井が目に入る。

体に違和感を覚え全身が包帯で巻かれている事に気付いた。

そして横には誰かがいる。

ソツと視線を向ければ少年ヨウがおり、椅子に座りながらうつうつと眠っていた。

「…ヨウ？」

声に気付いたのか、バツと目を覚ますヨウ。

「シオン！ よかった、気が付いたのか！」

体を起き上げようとするシオン

「皆は、町はどうなった？」

「っ！…町の人達は、たくさんの人が、死んじゃったって…」

「…そう」

「うちのお母さんやミリアは無事だったけど、お父さんは海賊に立ち向かって…」

そのまま泣き崩れるヨウ。

よっぽど恐かったのだろう。今も体を震わせながら泣いている。

後で聞いた話だが、町の被害は甚大で、怪我人の治療や建物の修復、更には物資の不足で資金が飛んでいった。

しかし、元々島での資金も返って来たのとカプリコ海賊団の所有していた財宝、更にはカプリコ自身に賭けられていた懸賞金がある。他の海賊団に持って行かれた金銭も有るがソレよりもカプリコ自身の懸賞金だけでも事足りる。

「う…く…」

「シオン!!」

途端に体を襲う激痛。

しかしそんなヨウの声を聞いて顔に入れ墨を入れた人物が部屋に入ってきた。

その後を追うように部下らしき人達もぞろぞろと入室してくる。

その面々を見て思考が停止するシオン

……………ちよつと待て。

「君がシオン君か。始めまして、俺達は旅の者だ」
自称旅の者を語るドラゴン

「ヴァターシは通りすがりの顔面よ」

自称通りすがりの顔面を名乗るイワンコフ。 つか通りすがりの
顔面ってなんだ。

「……………」

無言でコチヲを伺うクマ。

「たまたま通り掛かった時、その子から話を聞いた。正直信じられないが、ね」

値踏みする様にこちらを見る自称旅の者。

「…ヨウ。いったいこの人に何を話したの？」

「なにつて、シオンが海賊達をいっぱい倒したつて」

「……………」

見ず知らずの人に全て話してしまったのであろうヨウは気にした様子もなく答えた。

まだ子供のヨウは、あまりにも純粹過ぎたのだ。

（でも今回の事が町の人達に広まったら、避けられる、よ、な？

こんな子供が大人の海賊を大量殺人したなんて知ったら、少なくとも化け物なんて呼ばれるんだろうなあ）

「お願いします！ シオンを助けてください！」

「大丈夫だ。この子は助かる」

今後の事を考えるシオンを置き去り会話を進め、自称旅の者が医師を呼び付けシオンの今の状態を見させる。

「このまま安静にしていればすぐに動ける様になるでしょう。」

しかしこの子には驚かされます。ついさっきまで瀕死の怪我を負っていたというのに、もう傷が治りかかっている。

クマ氏の能力による影響も有りますが、それだけではありません…普通じゃない…」

目の前の子供を信じられないと見る医師。

（それはそつだ。なんせ女神様の保証付きなんだ）

「そっか！ ありがと、医者のじいちゃんに入れ墨のおっちゃん！」

自称旅の者になりにフランクな御礼を言うヨウ。
そんなヨウに肝を冷やすシオン。

「…ヨウ。その人達がどんな人か知ってるの？」
「ん？ どんなつて、命の恩人だろ？」

「いや、それはそうだけどさ。
この人達は世界に喧嘩売る様な人達だぞ。あんまり失礼な態度をとると あ…。」

「「「……………」」」

言ってからシオンは、しまったと思う。

彼等はこの島に来てから誰にもそんな事は話していなかったのだろつ。各々が

「何処からその情報を…」
とか

「正体がバレてる…」
とか

「いつその事、今ここで…」
などと割と冗談では済まない言葉を口にし始め、代表してドラゴンが口を開いた。

「少年、君はいい」

「シオンちゃん!!」

バン!! と勢い良く開いた扉に目をやると母が部屋に駆け込みシオンに抱き着いてきた。

殺伐とした雰囲気ちんぷうじやが闖入者により一変する。

「よかった。生きてて…シオンちゃんの意識が戻らないって聞いてお母さん本当に心配したんだから…」

「母さん…」

真剣な表情で見つめ合う二人。

「…痛いんだけど」

「っ! ごめんなさいね! 私っいたらつい嬉しくて!」

開口一番辛辣な言葉を浴びせ距離をとらせる。

そんな母は特に気にした素振りも無くシオンから離れドラゴン達の方に向き直る。

「貴方達が家の子を助けてくださっただけですね。改めて御礼を言わせていただきます」

深々と頭を下げる母。その母を見て数人の男が頬を染める。

「いえ! 怪我をしてる子供を助けるのは当然ですから!!」

「そうですよ! 見捨てる事なんて出来ません!」

「こんな世の中間違ってる！ 理不尽な世を変える為に、私は日々行動しているのです！」

我先にと鼻の下を伸ばしながら母に話しかけてくる革命軍一同。
そんな光景を見てドラゴンは溜息をつく。

「ヴァナータいいチチしてんじゃない。ヴァターシのcockでヒ
ーヒー言わせてや（ry）」

一部をボコボコにした革命軍一同。

「失礼、御婦人。見苦しいものをお見せしてしまいました」
代表してドラゴンが謝罪。

部下の失態をカバーするあたり彼も色々と苦労している様だ。

ふと、コチラを見据えるドラゴン。

「改めて聞かせてもらう。少年、君は一体何物だ？」

「……………」

ここで変に答えても疑われるだけだ。ならば…

「予知能力者…ってどこですかね？」

「…予知能力者」

その発言に周りはざわつく。

シオンの言葉に興味が沸いたドラゴンは鼻で笑う。

「面白い事を言う少年だ。」

ならば、何故今回起きた事を未然に防げなかった？」

「……予知にも限界もありまして…僅かに情報も必要です」

「…ほう。ならば我々がこれから進もうとする未来には何がある？」

コチラを試しているのか、なかなかしつこいドラゴン。

「…なら正直に答えて下さい。貴方達は、これから何処へ？」

「…俺達はこれから、東の海に行く予定だ」

東の海

つまりは故郷にでも向かうのだろうか？

仲間達もドラゴンの出身地はまだを知らないはず…

しかしこの話をすれば最悪ドラゴンに命を狙われかねない。

賭けをするにはリスクが大きすぎる。
なら。

「フーシャ村、ガープ…」

ぼつりと口にした。

周りの人達は何の事だと口にする。

…一部を除いて。

一瞬だが目を見開くドラゴン。

「この言葉の意味。貴方なら分かりますね？」

「…何処で知った？」

コチラを思い切り警戒して聞いてくるドラゴン。

「ですから、これは予知つてことにしてくれませんか？ お互いの為に…」

「……………」

「貴方が信じてくれれば、自分はこれ以上の事は誰にも言う気はありません」

僅かな沈黙の後、ドラゴンが口を開く。

「…いいだろう。その話、信じてやる」

警戒を解き、微笑むドラゴン。

どうやら賭けには勝った様だ。

「さて、我々も準備がある。出航するまでは、ここのベットを貸してやる。もう少し安静にしている」

そう告げ部屋を後にするドラゴン率いる革命軍。

「シオンちゃん…」

革命軍が居なくなつた事で気が楽になつたのか口を開く母。

「シオンちゃんって予知能力者だったの？」

「おばさん…ヨチノウリヨクシャってなに？」

「えっとね。予知能力者っていうのは未来が分かる人の事。わかるかな？」

「すっげー！ シオンって強いだけじゃなくってヨチノウリヨクシヤだつたんだな！..」

たぶん分かっていないのであろうヨウは無駄に驚く。

「まあいいけどさ…」

小さな溜息をつき、何とかやり過ごしたと気が抜ける。しかし安堵するもつかの間。

「それじゃシオンちゃん。その包帯を取り替えよっか」（じゅるり）

母に揉みくちやにされながら包帯の交換をされるシオンだった。

手慣れた手つきで包帯を交換する母。

最後の一閉めを終え立ち上がる。
なんだかんだでやる仕事は完璧である。

「それじゃ私も行くわね。町の方が大変だから皆で何とかしないと」
「ならオレもいくー！」

「だったら俺も…」

「シオンちゃんはここでゆっくりしてなさい。その体じゃ無理ですよ」

わざわざ気をつかってくれる母にこんな時でも頭が上がらない。

「…なら今回は甘える事にするよ」

「宜しい」

「ゆっくり休めよシオン！」

微笑みながら部屋を出る母とヨウ。

さて人も居なくなり部屋には沈黙が広がる。特にやることも無いので…

「…寝るか」

少しでも傷が治る様に今は休息する。

誰も居なくなった部屋で寝息を起てるシオン。
その部屋にスツと音もなく侵入する巨体の持ち主、バーソロミユ
ー・クマ。

今は熟睡中のシオンの元にソツと手を伸ばす。

その手がシオンに触れようとした瞬間
にきゅ…

静寂の部屋に静かに溶け込む音

「……」
「……」

にきゅにきゅ…

シオンがクマの肉球を掴んでいた。

「…目を覚ましたのなら手を離せ」

「…えー、というか、どうしたんですか？」

眠たそうに目を擦りながら体を起こすシオン。その手には今だに
クマの肉球が握られている。

「そろそろ出る。お前を起こしに行けと言われたのでな」

「そうですか。わざわざご苦労様です」

堪能している至高の時を少しでも長めようと会話を伸ばす。

「……いい加減離してくれないか？」

「……えー」

「旅行するなら何処へ行き（ry」

「すいませんでした！」

ここで飛ばされたら笑い話にもならない。

この世界に来たらやってみたかった事の一つをやり遂げ、満足になったシオンは名残惜しいがクマの手を離れた。

「では、俺達はもう行くとする。町の被害を聞いて海軍が白ひげが駆け付けて来るだろうしな」

僅かだが物資を積み出発準備が整った革命軍一同。

「しかし、この町では随分な名で呼ばれているらしいじゃないか」

「……………」

町での噂を聞いたのであろうドラゴンはシオンに向かって、すう、と手を差し出す。

「どうだ少年？ よったら俺達と一緒に世界をひっくり返さないか？」

その発言が聞こえたのか周りはざわつく。

「……………」

たかが子供に何を言ってるのか。

この手を取れば少なくとも原作に干渉する可能性を生み出すだろう、なら……

「……悪いですけど、自分は貴方達に着いていく程、覚悟も勇気も無いので……今回の事で、世界が怖くなってしまいましたし」

正直な話し、いくつ命があっても足りなさそうな話しである。

世界中に喧嘩を売るなんて最悪原作以上に死ぬ可能性が高いじゃないか。

「……そうか。それは残念だ」

断る事が分かりきっていたのか、ちっとも残念そうな顔をしないドラゴン。

「少年、機会が有ったらまた会おう。出航！！」

そして船は旅立った。

町人達は御礼を告げながら見送る。

ある程度見送り、港の人達も散り始め、シオンもその場を去ろうとした時、横にいた町の住人が口を開いた。

「でもさ、いくらなんでもあそこまでやるかね？」

「ああ。あの死体だろ？ 人ってあんな斬れ方するんだな。血の湖まで出来てたぞ」

(……………)

シオンが切り捨てた海賊達の事を言っているのであろう町人は尚も会話を続ける。

「よっぽどの武芸者がいるんだろうな。あの船には……」

「助けてもらってなんだが、未恐ろしいな。正直もう関わりたくない気分だよ」

「でも彼等は命の恩人なんだ。あの人達のおかげで俺達は生きてんだ。そう言っただけでやるな」

(……！?)

バツ！ と旅立った船の方角見据える。

どうやら大きな借りを作ってしまった様だ。

今はもう見えなくなった船。その方角に向かって頭を下げる。精一杯の感謝を込めて。

強くなるう。いつか、この借りを返せる様に。

「ドラゴン…ヴァナタあれで良かったの？」

「…ああ、あの少年はまだ、世間の批判に当てられるには早過ぎるだろう」

「まっ、ヴァナタが言うなら良いんだけど。でも、あのボーイが言うことまで信じるつもり？」

「さあ…だが興味が湧いた。これから俺達が歩む道。本当にあの少年が言う通りになるのか、な」

「…嘘かも知れないわよ？」

「嘘だつたら嘘だつたでそれ相応の報いを受けて貰うさ。それに、噂に聞く魚人島の予知能力者の前例もある。本物だつたら本物で取り込めばいい…」

くつくつと笑うドラゴン。

「もし…」

ポツリと話を切り出すドラゴン。

「もし仮に、あの子供の言う事が本当だったとしたら、この島はこれから世界に名を広めるだろう」

「どういう意味かしら？」

「なに、ちょっとした俺の、予言さ……」

その微笑んだ姿を見た仲間達はドラゴンが悪魔の様に見えたとか。

革命軍一同を見送り今後どうしたものかとシオンが考え事に耽っている。とヨウが横切る。

咄嗟にその手をつかみ引き止める。

「ヨウ、あの人達になんて説明したの？」

「ま、またそれかよ。さっきも言ったじゃん。海賊をたくさん倒したって」

「それじゃ俺が海賊を倒したって、何処まで？」

「んー……シオンが木刀で海賊をぶっ飛ばしたとこまで……」

「……………」

つまりは俺が海賊を斬る所までは見ていなかったと……

この日何度めかの安堵の息をつく。

「な、なんだよ。なんかあったのかな？」

「いや、なんでもない」

「ふーん。おかしなシオン。…ところでさ、シオン…」

口を開くヨウ。

「お前がどうしてそんなに強いのか教えてくれるって、言ったよな」

「……………」

先程の会話で思い出したのか、かなり今更な事を聞いて来るヨウ。
しかしどうごまかしたのか。と更に思考するシオン。

「…その、ほら、あれだよ、あれ。好き嫌いしないでご飯を食べた
て、適度に動いて、よく寝る」

「……………」

「……………」

苦し紛れの説明に内心冷や汗ものだ。こんな嘘を信じる輩などい
るのだろうか？
やから

「…うちのお母さんも同じこと言ってたけど、あれって本当だった
んだ…」

ここにいた。

なら今度からはそうする。と言う辺り本当に信じた様だ。まったく以って純粋なことだ。

今ばかりはこの純粋さに救われる。

「あと、その、さ。まだ言っていなかったけど………助けてくれて、ありがとな」

はにかみながら言葉にし、僅かに頬を染めるヨウ。

子供ながらか、とても可愛く見えてしまう。

「シオン…実はオレさ」

「シオン兄ちゃん！」

「お前の事が…」と続け様とした言葉を町から走って来るミリアが遮る。

そしてミリアはそのままシオンの胸に勢いよく飛び込んで来る。

「よかった！ 本当に無事だった。僕、とっても心配したんだ…」

「ミリア…」

その純情さが愛らしく思いミリアの頭を撫でてやると気持ち良さそうに瞳を細める。

しかし前みたくヨウがミリアとシオンを引きはがす。

そんなに自分の弟と友人が仲良くするのが嫌か。嫌われたものだな。

はあ、と小さな溜息が自然とこぼれる。

「シ、シオンは…」

僅かにプルプル震えながら口を開くヨウ。

「シオンはオレんだ――！！」

途端抱き着いて来るヨウ。

ふよん。と、僅かに腕に当たるヨウの胸。気のせいか男子にしては違和感が…

「…ちょっと失礼」

確認のつもりでその胸に手を沿え感触を確かめる。

まだ育ち盛りなのだろう成長途中のその胸は何とも言えぬ柔らかさに加え男を魅了して止まない弾力。それは正に

「…女？…だと…？」

途端わなわな震え始めるヨウ。

「ば……………」

「ば？」

「ばか――――！！！！」

ばちーんっ！ と、シオンの頬に衝撃が走る。

その衝撃に耐え切れず体が浮く。

三回転程宙を舞いそのまま地面に衝突する。

「がふっ！」

口から吐血。

更なる致命傷。

もはや死の域まで達してしまったのか、ぴくりとも動かないシオン。

否、動けない。

うわあああああああ！！ と少女ヨウは叫びながらその場を離れた。

その日、泣き声が町中に響き渡った。

一難去ってまた一難。

これからも受難がシオンに降り懸かるのだろうか。

「シオン兄ちゃんひどーい。ヨウはシオン兄ちゃんの事好きだったのに泣かせたー。でも僕達姉妹はいつも同じものを取り合いするから良いと言えば良いけど」

早速一難。

今更ながらヨウ達兄弟を姉妹だと認識したシオンだった。

それから数刻。

白ひげの旗を掲げて向かって来る船。

白ひげはこの時は乗っていなかったが、隊長二名が同席してきた。流石にグランドラインの海賊だ。

そんじょそこらの海賊なんかに負けるような人員は皆無と言っていい。

ちなみに隊長二名とはマルコとビスタであり島に着くなりシオンの元に駆け付け、ベットで寝込むシオンの姿を見てかなり心配したとか。

特に頬の傷が酷い事からかなりの死闘を遂げたのだらうと予想し涙したのは余談だ。

そんなこんなで彼等が到着してから町の被害の大きさを認識し、怪我人の治療、建物の修復、物資の復旧に取り組み何とか町としての機能を回復した。

それから三年の月日が過ぎ、この島ではある噂が世界中に広まった。

あの島には行ってはいけない

暴れる海賊を容赦なく滅ぼすぞ

あの島には

鬼が住む。

『鬼ヶ島』

その名が付けられた島は、僅か数年でグランドラインでも有数の危険地帯に登録されてしまったのであった。

第十五話

命の恩人（後書き）

はい、と言うことで影の正体はドラゴンさんとクマ吉さんでした。ワンピースを嗜む者として、あの肉球は魅力的だと思います。

あとは幼なじみのヨウ兄弟が実は姉妹という事でしたが、ヒントとしてミリアという名前や、シオンを兄と呼ぶのに対してヨウを兄と呼ばなかったりとそんな感じ。

島の名前。適当に鬼ヶ島なんてつけてしまいましたが、原作で出ないか心配です。

犬、雉、猿といるのでいつか登場しないか内心ヒエヒエですが、出てきたら出てきたで島名変えるんで（・・；）

ではでは次回も頑張って更新して行きますんで、今後ともよろしくお願いいたします！m（・・）m

気が向いた人は感想くれたら嬉しいです。

第十六話 鬼ヶ島（前書き）

遅くなりました！
大変申し訳ありません！

第十六話

鬼ヶ島

「はあっ はあっ はあっ」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ

何なんだこの島は！？

噂では聞いていた。

しかし、まさか『鬼』がこんなにも手強い存在だったなんて！

逸れた手下達はもう追跡者達にやられちゃったか、上手く逃げたか…

畜生！　なんで俺がこんな目に会わなきゃなんねえんだ！！

こんな、こんな島に寄ってしまったばかりに！

ログを取るために寄ったまでは良かった。しかしログが溜まるまでの暇潰しが余計だったと後悔するアルマ。

どうして彼がこんなに取り乱しているのか。それには話を少し遡る事になる。

この島でログを取りに来る海賊は少ない。

『鬼ヶ島』

一般世間では鬼が住まう島、等と呼ばれているが、最近は質の悪い海賊がログを取りに寄ったりしているのが現状だ。

「ぎやははは！ー！ー！」

そんな中、一人の海賊が商売をしていた女性の店で騒ぎを起こした。

「きゃあー！」

「お、おい！ お前達やめろ！ ここを何処だと思ってる！」

ドガシャアン！ー！ と盛大な音を起てて商品が地面に散らばる。

「ああん？ 白ひげ海賊団の私有地だっけか？ そんなもん関係ねえけどな」

「おうともさ！ 白ひげなんざ今じゃただの老いぼれだろ、来たら来たで叩き潰してやる！」

「ちげえねえ！ ぎやはははー！」

そう言いつつ手配書をピラピラと見せびらかす海賊。

懸賞金5300万ベリー

『狂言のアルマ』

白ひげに対する恐怖すら無いほどの強者なのか、はたまた真正のバカか。そんな一団が店で騒ぎながら語りだした。

「こんなお宝が眠ってる島、見逃すほど俺達は馬鹿じゃないぜ」

「まったくだ。何で周りの奴ら気付かないんだ？」

「ビビってんだろ？ 噂の怪物に」

辺りにいる住人や海賊を見て嘲笑うアルマ海賊団。

「噂に聞く”鬼”。必ず捕獲するぞ！」

船長アルマの掛け声により、うおおおおお！ と声を上げる一

団。

『鬼ヶ島』と名付けられた島。

その名を付けられた由来を知る者は少ない。

曰く

白ひげがお気に入りのも、常に鬼のような強者が島を警備している。

曰く

島の何処かに鬼が住んでおり、島を守っている。
等々…

彼等は島に『鬼』というものが存在していると当たりを付け、捕獲して売り飛ばそうと考えていた。
謎の生物、『鬼ヶ島の鬼』等と張り出せば嫌でも人が集まるだろう。

ログを取るついでに、そう計画立てていた。

辺り構わず目茶苦茶にするその海賊を、住人達は内心怒りを覚えるが黙って見過ごす事しか出来なかった。
三年前の惨劇が頭を過ぎるのだらう。
誰ひとりとして動く事が出来なかった。

「やめろー！！」

と、その間に割って入った一人の少女が店の女性を庇う形で前に出る。

「なんだガキ？ この俺様のやることに文句でもあんのか？」

船長のアルマが口を開き、少女を威圧する。

しかし少女も引かずに喋り出す。

「あるさ！ お前ら、こんなに散らかして帰るつもりか！」

「おっと、へへ。お嬢ちゃん、これは迷惑料みたいなもんさ。本当だったら店側の命を貰いかねないところを、この方はこの程度で済ましてやろうと考えていたんだよ？」

アルマと少女の間に子分の男が割って入り、嘲笑いながら説明を足す。

しかし目の前の少女はプルプルと震えていた。

「見る！ お前にビビって何も言えなくなっちまたじゃねえか！」

「馬鹿言わんでください！ 俺の何処が怖いってんですか！」

ぎやははは！ と下品に笑う声が辺りに響くと同時にプチンと何かが切れた気がした。

「最つつつ低！！」

目の前にいた海賊の股間目掛けて蹴り上げる少女。

グシャッ！ と音をたてると同時に固まる子分の海賊。

周りにいた海賊達が「何しやがんだこのガキ！」と騒ぎ立てる。
が、

「ガキじゃない！ オレの名前はヨウだ！」

一向に引こうとしないヨウ。

くらった当人に目を向ければ立ったまま気絶してる様だ。白目を向いている。

それに気付いたヨウは あ、いけね。と小さく言葉にし、海賊達に背を向け逃げようとしたが一人の人物にその手を捕まれてしまった。

ヨウが後ろを振り返ると船長のアルマが目の前にいた。

ヨウのその顔をまじまじと確認するとアルマは口を開いた。

「ほう。将来が楽しみだな。あと十年程歳を重ねていたら、俺の女にしてやつても良かったんだが」

「っ！ だ、誰がお前なんかにつ！」

再び股間目掛けて蹴り上げるが今度は阻まれるヨウの蹴り。

「っ！？」

蹴りを防いで見せたアルマに対して「流石船長！」等と声が飛び出す。

「本当に残念だ。ここで、死んじまうんだから」

アルマが脇に抱えていた銃を手に取り、ヨウ目掛けて構える。

ドキョン！ と銃声が響くと同時に辺りからは悲鳴が飛び出す。

反射的に後方に吹き飛ぶヨウの体。

瞬間その場に飛び付く形で一人の少女がヨウの顔に抱き着いてきた。

「ヨウ！ 僕を残して行くなんて！ うわ~~~~ん！」

倒れてるヨウを中心に赤い水溜まりが広がる。

泣き続ける子供を残した僅かな静寂の後、何処からか「や、殺っちまったか？」と声が聞こえたかと思うと

「流石だぜ船長！ 相手が女、子供でも容赦なく殺せるなんて！ よっ！ この極悪非道！」

「ああ……。気分が良くねえ。飲みに行くぞ野郎共！」

その場を去ろうとするアルマ海賊団。

夜の鬼捕獲に意気込む海賊達は酒場で一杯やろうと移動しようとした時だった。

「……………」

「なんだ小僧？ 俺のやることに文句でもあんのか？」

「ぎやははは！ 坊主、やめとけ！ お前も殺されちまうぞ！」

白髪の少年が木刀を片手に、その場でアルマ海賊団を見ていた。

「……………」

「いつまで見てんだガキ？」

「…お姉さん大丈夫？ はい、これ」

「あ、ありがとうシオン君。で、でも…」

騒ぐ海賊を無視して辺りに散らばった商品を拾うその子供が気に食わなかったのか、海賊の一人が盛大な舌打ちをした。

「なんだこのガキ！ 船長を無視するたぁいい度胸してるじゃねえか！」

「…もういい。ほっというて行くぞ」

「でも船長！」

「酒が飲みてえんだよ。いいからほっとけ」

「つち！ と舌打ちをした子分の男は「命拾いしたな」と捨て台詞を言っつてその場を後にする。」

ガヤガヤと移動するアルマ海賊団。

その背後で白髪の少年はポツリと口にした。

「…あまり、この島で騒ぎを起こさない方がいいです」

その言葉は、果たして海賊達に聞こえたのか。酒場まで移動するアルマ海賊団。

そして夕方まで飲みつづけた海賊達は深夜、鬼が出ると噂の森へと足を進める。

酒の力が夜行性の影響か、気分も高まり店から森に直行し、目的の森を目の前にしてその口元を吊り上げる三十人程のアルマ海賊団
「さあ。鬼ごっこの始まりだ」

船長アルマの言葉をスイッチに、うおおおおおお！！と響く声。

気分も最高潮に達した海賊達は武器と松明を持ち続々と森に入り込んでいく。

森の中を移動して20分程。
ふと違和感を感じるアルマ。

辺りを見回し、仲間達も特に気にしていない様子なので自分の気のせいかと思い再び足を動かす。

流石にこれだけ探して何の痕跡も見付からない事に不信に感じたアルマ。

そう思い、それから更に10分程移動していたら、前方の茂みからがさりと音し、警戒体勢をとる海賊達。

辺りに緊張と恐怖が支配する。しかし予想に反して出て来たのは少女だった。

その姿に毒の気を抜かれた様に警戒心を解く海賊達。

しかし一人の海賊が震えながら少女を指差し口を開いた。

「お、おい、あれ…昼間に…船長が撃ち殺したガキじゃねえか…？」

その言葉が聞こえたのか。皆が警戒心を高め銃を少女に向け構える。

興味をそそられたアルマは耳を傾け様としないで少女を見詰めていた。

「…此处へ、何しに来たの？」

唐突に口を開いた少女。

普通に喋った事が以外だったのか。皆の気が僅かに緩む。

「あ？　なんだ、その…鬼ごっこだよ鬼ごっこ」

自らの恐怖を紛らわす為か、一人の男が嘲笑しながら質問に答えた。

「…こんな、大人数で？」

「そうさあ。それで、俺達全員で鬼を追い掛けてるって事だ」

「…そうなんだ。でも」

不意に、くつくつと笑う少女。

「鬼ごっこ、って普通鬼が追い掛ける側、なんだけどね」

その言葉を最後に少女はその場から消えた。

突然の事にざわめくアルマ海賊団。

その瞬間を見ていた仲間が

「消えた？」

「や、やっぱり本物…？」

等と口々にし仲間達を取り乱している中、先程の違和感に気付いたアルマ。

「人数が、減っている…？」

始めは三十人程いた仲間が今では二十人程に減っている事に気付いた。

「つく！ 皆一カ所に集まれ！」

一度散らばっている仲間を一カ所に集め、身の確保を計ろうと声を掛ける。

そして言われた通りに集まろうとするアルマ海賊団。

一カ所に集まっちゃえば、とりあえずは安全だろ。そう思った時だった。

ガッン！ と鈍い音が響き、それに合わせる様に仲間の一人が倒れた。

「っ！ 出やがったな！ 殺しても構わねえ！ 撃て！ 撃てえ！」

アルマの掛け声を引き金に銃声が絶え間無く響き、辺り一帯を銃弾の嵐が襲う。

一時の静寂

しかし林の奥からはガサガサと何かが近付いてくる音が聞こえてきた。

そして再び鈍い音が響くに連れ仲間が叫びながら倒れていった。

状況は少しずつ悪くなっていくばかりでありそんな光景を目の当

たりにした生存者達は次第に恐怖に蝕まれていった。

「船長！ 幽霊が相手なんて勝てっこねえよ！」

「バカ！ 相手は鬼だ！ 幽霊に実体なんてねえだろ！」

しかし仲間の言うことも重々承知している。流石にコチラが不利と悟ったアルマは舌打ちをし、「いったん撤退する！ 各自引け！」と命令を下すと我先にと来た道を引き返した。

仲間達の叫びを、一身に浴びながら…

そして、気付けばただ一人になっていた、という訳だ。

「あ…あぁ…」

逃げる足を止めるアルマ。

そんなアルマの目前には天然の岩壁がそびえ立っていた。

森をさ迷い、ただ逃げる事に必死だったアルマは暗闇のせいで気付けなかったのだ。

来た道に戻った筈だったが、道を間違えてしまったか！？ と自身の愚かしさに内心舌打つ。

もう逃げ道は無いと悟ったアルマは背後から 来る追跡者を迎え撃とつと銃を構える。

ガタガタと自身の手が震えており照準が定まらない、が

（茂みから姿を見せたら、その額に風穴を空けてやる！）

しかしその追跡者達はそれを分かっていたのか周りの林からは出て来ず、ガサガサと動き回りながらアルマを追いつめていた。

「つち、畜生！」

ドキュン！

出て来ない追跡者に痺れを切らしたアルマが茂みしげに向かって発砲する。

すると茂みの方からドサリと何かが倒れる音がした。

手応え有りだ！

そう思った時だった。

突如、上空から盛大な殺気を感じ、ハッと見上げれば既に遅く、目前には影が迫っていた。

「つぎやあああああ！！！」

その白髪と鬼の形相が目に入った時、アルマは力無く崩れ落ちた。

アルマの意識が暗く染まる中。彼は確かに聞いた。

『鬼』達の、雄叫びを。

「「お～～」」

淡泊に響く声。

そして白髪の鬼と賞金首の男を中心に集まる鬼の子供達。

白髪の鬼が自身の顔に手を掛け、その顔をスツと取り外した。

一般世間が騒ぎ立てている鬼の正体。

それは鬼のお面を付けた子供の三人組だった。

「やったな！ シオン！！ これで何人目だ！？」

「今回も何とか倒せたね！」

シオンが『狂言のアルマ』を仕留め、安全だと分かった、茂みの奥からヨウとミリアが現れた。

昼間に打たれた筈のヨウはびんぴんしていた…

「ヨウ！ 僕を残して行くなんて！ うわゝゝゝん！」

昼間。

ヨウはアルマに撃たれ、反射的に後方に倒れるがミリアが抱き着きヨウの口に手を当て暴れ出さない様にした。

（おとなしくしてて！）

そして倒れてるヨウを中心に赤い水溜まりが広がる。が、それは水とケチャップ等を混ぜ合わせた物だった。

（ちょ！ ちょっと！ ミリアかけすぎ！！）

（うりゃうりゃ）

日頃の怨みだと言わんばかりにヨウに特製ケチャップをかけるミリア。

そして立ち去った海賊達を確認したヨウ達は起き上がる。

「うえー。口の中に入っちゃったよ。っていうか！　どんだけかけてんだよミリアー！」

「いやー。あれくらいの方がリアリティーあるじゃん？　だから」

怒るヨウをあやす様に宥めるミリア。

「ヨウ。怪我はなかった？」

近くにいたシオンがソツとヨウに近付きタオルを手渡す。

「お。ありがとシオン。それと、さっきは助かった」

お礼を言いつつそのタオルを受け取るヨウ。

ヨウの言っさっきとは、彼女に当たる筈だった銃弾。

シオンはソレを木刀を用いて居合の型から飛ぶ斬撃を放ち、ピンポイントで当てて起動を僅かに逸らしたのだ。

斬撃はまだ小規模なものだったが、一発の銃弾を反らすには十分な威力だった。

この三年でビスタとマルコから色んな技術を教わったシオン。しかし、その話しはいずれまたの機会に。

「本当に無茶するよね。いくらあの人達が許せなかったからってヨ

ウが死んじゃったら意味ないんだから。もっと自分の命は大切にしなよ?」

「うるさいなあ。しょうがないじゃん。気付いたら体が動いてたんだから」

説教気味に言うシオンが気に入らなかったのか、むくれながらそっぽを向き、反論するヨウ。

しかしシオンはそんなヨウの顔に手を添え、自身の方に向き直させる。

「ヨウに死なれたら、俺も悲しいだから…本当に無茶だけはしないで。約束」

「う、うん。わかった。約束」

小指と小指を交わし、指切りをする二人。
そしてヨウは顔を赤く染め上げ素直に俯いた。

「うりゃ」

そんな空気が面白くなかったのかヨウの顔に再びケチャップをかけるミリア。

ケチャップばりに顔を赤くして怒り出すヨウに対して笑いながら逃げるミリア。

そんな光景を見て微笑むシオンだった。

「そんな事より！ どっちか今撃たれなかった！？」

「ん？ ちょっと僕の足に掠っただけで対したことないよ。こんな
のしばらくしたら勝手に治るから」

そう言いつつ撃たれたであろう右足をひた歩くミリア。

しかしそんなミリアをシオンが引き止め、ズボンを切り裂き撃た
れた場所を応急処置で傷を塞ぐ。

「帰ったらちゃんとした治療を施さないと、後々大変なことになっ
ちゃうよ」

心配性は母親の影響からか、余計に気をつかってしまうシオン。

「…ありがとう。シオン兄ちゃん」

ミリアは僅かに頬を染め、俯きながら答える。そんなミリアを少
し嫉妬を含んだ視線で見詰めるヨウ。

「まあ。向こうが思う通りに混乱してくれたから、今回も倒せたけ
ど…あんまり調子に乗るとそのうちもっと痛い目に会うから、二人
とも気を緩めない様にね」

真剣な眼差しで二人に告げるシオン。

「で、でもさでもさ！ シオン兄ちゃんすごいよ！！ 大人の海賊を相手に何回も倒してるんだから！」

「…それは人間急所を突けば倒れるさ。それに相手は普通じゃなかった。もしさっきの奴と正面からやることになったら、勝てるかどうか…」

そんなシオンを見兼ねたヨウは呆れた様に口を開く。

「よく言うよな。だって今回の相手、懸賞金5千万以上の海賊だぞ？ ただ隙について倒せる様な相手じゃないって」

その二つ名が示す『狂言』を発する前に片が付いたので今回も倒すことが出来たのだが。

「まあ…いいけどさ」

今回はここまでと言うように話しを区切るシオン。鬼のお面を再び被り、賞金首の男を縛り上げる。

この鬼のお面だが、実は最近マルコ達からワノ国と言う場所の土産で貰ったものだったりする。

なんでも、俺達にピッタリだとか言ってたが、まあ貰えるものは有り難く頂いた。

それからは暴れる海賊を相手にする時は襲った海賊に顔がバレな

い様にいつも身につけていた。

シオンが賞金首の男を引きずりながら出た先は港だった。

「そんじゃシオン！　いつも通り海軍への引き渡しよろしく！」

「ん。じゃあ島は任せたよ、二人とも。それと危ないと感じたらすぐに海賊から逃げなよ」

縄で縛られたアルマを木箱に詰め込むシオン。

賞金首は暴れ出さない様に催眠術を掛けてから縄で手足を縛り、口には布を巻き付け、その頭にズタ袋を被せ木箱に入れている。

相手は高額の賞金首なのでやり過ぎって事は無いだろうし海軍基地に着くまでに暴れ出されたら堪ったものではない。そう考えた上で嚴重な程の拘束を施ほごしている。

中に入ってる人はなかなかに苦しい思いをしていると思うが、どうせ島には一日程で着くので我慢して貰ってる。

催眠術の腕だが、三年前より僅かながら効き目が増してる。

そして例の木箱を引きずりながら待ち合わせていた商業船のクルーの元に向かったシオン。

「任せる！ 何が何でも島は守る！」

「いつてらっしゃーい！」

手をブンブンと振る二人。

見た目と中身は無邪気な子供達だが、実力は白ひげ海賊団の折り紙付きだ。

なんだかんだで頼りになる仲間を残し島を離れる。

「それじゃま、行きますか…」

誰に言うでもなくポツリと口にし、今ではすっかり顔なじみになった商業船に乗せてもらい別の島に向かう。

とてもじゃないが、まだ一人での航海など出来ないので、今後航海術を覚えられる様に少しずつ勉強していこうと考えている。

シオンが島から離れて数刻。

日が昇り始めた港町が僅かにざわついていた。

「おい、なんか向こうの森の方で海賊の一味がボロボロに倒れていたみたいだぞ」

「またか、ここ最近町で騒ぎが起こるといつもだな」

白ひげ海賊団が離れてからも度々町で問題を起こす海賊団を滅ぼしてきたシオン達は密かに活動して島を守っていた。

そんな行動を見兼ねた白ひげ一味は、ある（・・・）意味からその島に名を付けた。

『鬼ヶ島』

そう名付けられた島の由来は

三年前から急激に減った島を守る男の大人に代わり、餓鬼が守護する島。

そんな理由から来たりしていた。

その話しに尾鰭が付き、一般世間では妙な噂話が飛び囲っている事に、シオンが気付くのはわりと近い内だったりする。

第十六話

鬼ヶ島（後書き）

はい。一ヶ月を大幅にオーバーしてしまいました（：|：）
なるべく早く更新したいんですが、なかなか上手くいかないもんで
すorz

次の更新は訳あってもっと遅くなるかもです。すみません！m（|
|）m

しかし感想はいつでもお待ちしております！

ではこれからもID越える者|を宜しくお願い致します！m（. .
）m

第十七話

出会い式（前書き）

休日に

朝に夢書く

既に朝

心境

え、もう朝!!!?

第十七話 出会い式

無事島に着いたシオンは船のお偉いさんに送って貰った事に御礼を言い、木箱を片手で引つ張りながら船を降り、そのまま目的地へとその足を進める。

ズルズルと引きずる中、周囲からはチラチラと視線が集まる。建前としては離れた島から物を渡しに来た少年。という事になっている。

そして目的地の一軒家を目前に、その扉を開ける。すると家の中からはアルコールの匂いが鼻を衝いた。

「…こんにちわ…。これ、いつもの…」

「…ん…ん…ん…よう。お前か」
今まで寝ていた男は大きな欠伸あくびをしてコチラを見ると近付いてきた。

「今日はいったいどんな奴が…ってコイツ『狂言』じゃないか!？」
ズタ袋を取り外し、手配書と木箱の中の人物を男に確認させると、さっきまで眠そうにしていた目を大きく見広げ驚愕する。

中の人物が目を覚まし、ガタガタと動き出す。何やら喋りたそうにしているので口に加えてる布を取って上げた。

「ぶはっ！ た、助けて下さい！ 怖かった！ ほんつとに怖かつ

た！！　お願いです！　何でもしますからどうか命だけは！！」

「落ち着け！　とりあえずお前は海軍に直行だ」
「……………」

目の前の男に死刑宣告とも取れる様な言葉を聞かされ固まる海賊。

「まあ向こうに行けば、お友達も出来るだろう。仲良くし」「い、いやだ——————！！！」

憐れな海賊の叫び声が木霊した。

シオンが賞金首を渡した男は一応賞金稼ぎで、初めてこの島に来た時から世話になっている。

そして男に賞金首を引き渡してもらい、所定の金額の5%を手渡す。

捕まってるとはいえ危険なことには変わりないし、口止め料も含めて色をつけている。

こんな子供が賞金首を引き連れて海軍に乗り込んだら、まず間違はなくマークされる。

俺は世間に注目されて生きたい訳ではない。

なので誰かに代役を頼む事にした。

そんな時に会ったのが先程の男であった。

男は名声も欲しいし金も欲しいと、常日頃から思っていた様だった。

そして今回の様な話しを持ち掛けたら、即了承してくれた。

金額も受け取りお土産でも買って帰ろうかと町に足を向ける。
しかしその時、妙な話を小耳に挟んだ。

「おい、聞いたか？ またあの島で被害者が出たつてよ」

「またかよ。まったく、連中も懲りないというか、馬鹿というか…」

「物好きだよな。人間行くなって言われたら行きたくない時とかあるし」

「俺はごめんだね。危険って分かってて行くなんて、馬鹿のすることさ」

何やら興味深い話しをする海賊連中。

気にせず買い物を続けるが自然と話し声は聞こえてくる。

「まゝた例の島で暴れた奴らが消えたとき。どんなトリックだ？」

「そんなの決まってるだろ。噂の化け物に、やられちゃったのさ」

流石に大海賊時代と言った所か。いやこの場合は大怪物時代か？

どっちにしても物騒な世の中だ。

自分とは関係ないと判断し、その場を離れ様としたが次の一言で足を引き止めてしまった。

「しかもな、噂に聞くと白髪が鬼が一番やばいらしい。何人やられたか分からんが、捕らえた相手を丸焼きにして、喰っちゃうんだとさ。

運良く生き残った奴らが気絶する間際に見たのが、その特徴的な白髪なんだとよ」

「げげ！ マジかよ！？ とにかく俺達は別の島でログをとろう。
『鬼ヶ島』なんかにいつてられるか！」

「……………」

その場を離れるシオン。

俺そんな事してないし！ 人だって食べた事ないし！ それに問題起こすのは何時もそっちからじゃん！

なんだこの尾鰭が着きに着いた噂話は！？ と一人内心で愚痴るシオン。

『 気に留めるな主 』

（俺の味方はお前だけだよ『沁』）

そのまま『沁』と話しながら町を歩き、ある程度お土産を買ってから再び商業船に乗せてもらい、島を出る。

島まで一日も掛かるんだ。

気長に過ごそう。

あれから二刻程海を進んだ。

そのまま甲板で心を安らがせる様な晴天に輝く空の下、海を眺めていれば遠くの方で大きな水しぶきが…なに…あれ…？

大きな水しぶきが上がったかと思えばその場所から何かが近付いて来てる事に気付いた。

海の中に居る巨大なソレは、ついに船下を通過した。途端

ズズン！！ と船が大きく揺れた。

何事かと船内へ入り階段を降りれば大きな穴が空いていた。

「う…そ…」

そこからは海水がドバドバと進入してきて船内を浸蝕しよう押し寄せてくる。

しばらくすると船員の人達が来て、透かさず穴を塞ごうと作業に取り掛かる。

…こんな事仕出かすのって…やっぱり…

「か、か…海王類だー！ー！！！」

甲板の方から声が聞こえた。

慌てて外に駆け出れば、そこには全長50メートル程の海王類が船の周りを徘徊していた。

この船はそこその商人船でもあり、今の御時世だ。当然護衛の人達が乗っているし大砲も積まれてる。

さっそく海王類に向かって大砲を撃ちまくる護衛人達。だがいくら当たっても海王類に致命傷を与える程のダメージは与えられない。

しかも反撃を受けてしまい再び船に衝撃が走った。

音がした場所へ向かえば、今度は船の正面側が大破しており大きな風穴を開けていた。

しかし幸いなことに海面のギリギリ上に穴が空いていたので海水

は入ってこない。

他の場所で手一杯のせいも人も寄って来ない。

足元にあつた剣を拝借する。

表では護衛の人達が銃や大砲を撃って応戦している。

調度良いと思い、その場で居合の形から飛ぶ斬撃を放つ。が、海王類の皮膚が僅かに斬れた程度で致命傷を与えられる程の威力は与えられなかった。

元々こんな子供の体ではやれる事は限られているのだ。

僅かでも致命傷を与え、追い払うしかない。

考えを纏め、やることを決める。すると海王類は一度船から離れたかと思えば、船の正面から向かって来る。

このままでは正面衝突だ。

狙いをすまして斬撃を放ち、海王類の目玉にピンポイントで命中させる。

すると今度のは効いた様で雄叫びを上げながら遠退いて行った。

上の方でも歓声が起き上がり、自らの勝利に酔っている様だった。

なんとか思い通りに事が進んでよかった。

ホッと一息着き、海王類が去った方角を眺めれば、海上を走るモノが……げっ……

途端絶句する。

先程の攻撃でブチ切れたのであろう。

船から一度離れた海王類が再び近付いて来たのだ。

今度は一発で船を沈める気が、勢いをつけて向かって来る。

流石にあれを喰らったヤバイ…

そのことに船員達も気付いたのだろう。休まずに大砲を撃ちまくる。

しかし依然と速度を落とさずに向かって来る海王類。

はぁ…と諦めからか、自然と溜め息が零れ出た。

左手を中空に突き出す。

『使うのか？ 主？』

（うん…流石に今アレを止めるには、ね）

そして、意識を左手に集中させ イメージする。

最近は慣れ始めた刺激。

チリチリと脳髓を痺らせる刺激は痛みとは違う。

自分の中にあるその最愛の刀をイメージして、『創り』上げる！

一瞬の光が迸った。そして先程まで空だったシオンの左手には、

最愛の刀が握られている。

そしてその刀を先程と同様居合の形から抜き放ち
斬撃を繰り出す。

瞬間、斬撃は海王類の頭から尻尾にかけて、真つ二つに引き裂き、
血の雨を降らせる。

上の方では再び歓声が上がった。

『沁』を振った後の右腕は、ダラリと力無くぶら下がる。

『
もう少し力の加減が必要だな
』
筋肉断裂。

今回はこの程度で済んだが、初めて『沁』を振るった時はもっと
酷かった。

数年ぶりに見た刀身の美しさと、『沁』に使用の許可を貰った事
で、嬉しさのあまり加減が出来ずに振り回してしまったのだ。

正直、後悔した。

この健康ボディを駆使しても次の日は一日動けない程のダメージ
が蓄積したのだ。

体を動かそうとすると、そこかしこに激痛が走った。

これからは、無闇に『沁』を振るわないと決めていたが今回の様
な時は仕方がないと言えよう。

正面にある海王類の死体の傍を、直ぐさま離れようとする船。
なんでも死んだ海王類の血の臭いでまた別の海王類が近付いて来るらしい。上の方からそんな話し声が聞こえた。

そして海王類の死体をそのまま通り過ぎようとしたら目前に何か浮いてる…？

人…？

人の、しかも子供の上半身らしきものが海面に浮かんでいた

なんとか手の届く場所でその子供を引き寄せ船内に引っ張り上げる。

びちゃり！ と引き上げたモノは

上半身は子供のもので、下半身は…魚？

「これって…人魚？」

「…う…う…」

気を失ってた人魚の子供は引き上げた衝撃でか目を覚まそうとした。
てた。

すう と開かれる瞳。

その瞳がコチラを見据え、固まる人魚の子供。

「…こんにちわ」

とりあえず挨拶を交わし怪我はないかと聞こうとしたら

「ににに！？ 人間――！！？」

叫ばれた。

人魚は慌てて起き上がり、退路は無いかとキョロキョロ周りを見渡す。

そしてピョンピョンと跳びはね穴から海へ飛び出そうとしていた。

「今出てったら危険だって」

飛び出そうとしていた人魚の手を取り、引き止める。

「は、離して！」

「別に離しても良いけど、よく海を見た方が…」

辺り一面の海は海王類の血で、真っ赤に染まっていた。

「っひ！？」

そのことに気付いた人魚の子供はその場へたりこんだ、と思ったら泣き出してしまった。

「…落ち着いた？」

「ぐすつ…うん。ありがとう。でもあなた、私がこわくないの？」

「…別に怖がる理由が無いしね」

それにそっちの方が怖がってた気がするんだけど…
と口にしたかったが止めといた。

「…あなた…お名前は？」

「…シオン」

「そっか。なら、シオンちゃんだね」

えへへ、と笑いながら涙を拭う人魚。

「私はケイミー。よろしくね」

ケイ、ミー……………？

シャンボディ諸島でルフィ達に関わる重要な人魚で、その純粋な性格せいかよく海賊に捕まったり海獣に食べられてしまう人魚。よく友人には、「うちん」と名前の語尾に付ける事から確定的だ。

「でも、なんで君はこんな場所に？」

「…海を散歩してたら海王類に食べられちゃって…」

つまりさっきまであの海王類の腹の中に居たと。……斬れてなくてよかった。

斬撃の軌道上に居ればまず間違いなく真っ二つになっていただろう。

物語がこのまま進むとして、ルフィ達にとってこの子は超重要な存在と言って良い。

「シオンちゃん…ここって、どこ？」

「よくわかんないけど、グランドラインのど真ん中ってとこかな？」

「そ、そんな…じゃあ私、もう魚人島には…帰れないの…？」

再び泣き出しそうになるケイミ。

「と、とりあえず付いて来たら？ 一人でいるよりは安全だと思うし…」

この子を野放しにしたら、また海王類に食べられそうだし…

「で、でも…わたし人間が、怖い…」

「大丈夫。なるべく人にはバレない様にするから」

怖がらせない様に優しく微笑んで告げる。と顔を赤らめるケイミ！。

「わ、わかった。シオンちゃんが言うなら…」

純粹なその仕草がとても可愛いらしく見えてしまい、その頭を優しく撫でると、くすぐったそうだった。

そのままケイミーと戯れてると奥の方から人が近付いて来る気配を感じた。

一旦遊ぶのを中断して近場にあった大きめの樽の蓋を開け中身に海水を汲む。

そしてケイミーの背中と膝周りに手を回し横抱き、俗に言うお姫様抱っこの体制で持ち上げる。

「わわわっ!？」

突然の事に驚いたのかケイミーの頭から煙が吹き出す。しかし今は気にされず海水の入った樽にソツと入れる。

「しばらくジツとしてて」

コチラの心境を理解したのかコクリと俯くケイミー。

その樽に先程の蓋を乗せ持ち上げる。

少し重いが問題なく運べる。

そしてケイミーの入った樽を抱えながら別の部屋に移動した。

ケイミーを別室に移してから蓋を開ければ、ひょっこりと頭を出すケイミー。

俺はその場に座り込み、先程の怪我を忘れて少し無茶し過ぎたせいか少し息が上がっていた。

「ケガしてるの？」

「うん。ちょっとね」

心配そうにコチラを伺うケイミー。

「大丈夫。少し休めば治るから」

あまり心配かけさせない様にケイミーに微笑み、そのまま休息をとる。

しばらくしてケイミーが俺の頭をジッと見ているのに気付いた。

何か付いている？ と聞けば、どうやら違うらしい。

どうしたのか聞けば口ごもるケイミー。

なんだと言うのか…

しかし意を決した様に口を開いた。

「…シオンちゃん、キレイな髪ね。……その、触ってみてもいい？」

父親譲りだという白い髪を褒められ僅かに照れる。了承の意を伝えると、喜びながら髪を触ってきた。

「わぁ…近くで見るとほんとにキレイ…」

そして島に着くまでに談笑しながら休息を共にした。

朝方、故郷の島に到着したシオン。

樽を抱えながら船をおり、ケイミーにすぐ戻る事を伝え、町長の家の前に懸賞金と手紙を置き、直ぐさま自宅へと向かう。

今日で家を離れて三日目。

そろそろ母が…ヤバイ。

賞金首を討ち取り家を空ける事が多くなった。なのでヨウの家に泊まるという理由で度々家を離れていたが、油断出来ない母だった。

最初などはヨウの家に居たら、いきなり家に入って来て簡単な挨拶を済ませたと思えば、そのまま長居して夕食を共にした。

そして、年頃の男女が同じ部屋で寝るなんて破廉恥な事許しません！と講義してきた。

いや、そもそもこんな子供に言う事でもないだろう。

最終的には「私も一緒にお泊りするうゝ！」等と駄々をこね始める始末。

正直、手におえない。

そのまま母を放置しておくと言ウのお母さんが来て、なんとか説得してくれた。

それからも少しずつ家を空け、俺が居ないという事を認識させ、慣れさせた。

これで俺が居ない言ウの家にいるという方程式を作り上げ、母と言ウのお母さんに催眠術を掛ける。

それから簡単だった。

母が言ウの家に来なくなった。

来るとしてもちよつとした用事を済ませたら直ぐに帰る程度の常識を植え付けた。

そして言ウのお母さんには、母が訪ねて来た時の対応を任せてある。

俺が言ウ宅に居ない時は、今は遊びに行ってるから居ないや、今日は外で泊まる等と何かしらの理由をつけて弁護してくれる様に。

しかし、モノには限度というのがあって、母の限度がその三日なのだ。

三日を過ぎると見つけ出して強制的に連れて行くとする。

そして捕まれば圧死するかもという程の力で抱き着かれるのだ。

もう既に何回もやられているが、慣れない…

僅かに緊張する中、家の扉をソツと開ける。

「ただい　　むぎゆう…」

瞬間何かに抱き着かれ軽く窒息しかけた。

「おかえりーシオンちゃん。くくく。」

抱きしめる力を更に強める母。

流石に苦しくなりジタバタと暴れれば解放してくれた。

「シオンちゃんエクス充電完了」

訳の解らない事を言う母である。

しかし気のせいか肌がいつも以上に潤っているような…まあ今はいい。

お泊りから帰ってきた事を告げ、そのまま家を離れ港の方に向かう。

ざわつく港。

まさかケイミーの存在がバレたかと内心焦ったが、どうやら違うらしい。

港には、一隻の船が停泊していた。

しかし、その船が掲げる旗は、普段見慣れている**髑髏**マークではなく、**鷗**のマークを、風に靡かせていた

港に着けられた海軍の船を遠目で確認するシオン。

何事かと様子を見に行けば海軍将校やらその部下が町の人達に話し掛けていた。

白ひげの縄張りに、よくもまあ堂々として来れたもんだなあ。と感心していると、一人の町人がコチラに気付き指を向け何か言っている。

そしてその場にいた海軍将校はコチラに向かって足を進めて来た。

近付いて来るとその海軍将校の姿がはっきりした。

その男は、海軍本部中将の

「やあ。私は海軍本部中将のモモンガだ。君がシオン君で間違いないかな？」

自ら名乗るモモンガ。

特徴的なモヒカン頭。

原作では度々出て来る海軍で、その実力はグランドラインの海王類を単身で倒す程だ。

「場所を移そう。ここでは目立つ」

こんな子供にどんな用事があると言うのか。警戒しつつモモンガの後について行くシオン。

そのまま海岸沿いまで移動すればモモンガが話を切り出した。

「上からの命令でな。話題の、鬼の捜査に当たれと言われた。君はこの島では博識で通っているのだから？ 話しが早いと思つてな」

「…そう、ですか。でも鬼なんて本当に居るんですかね？ この島に来る海賊が勝手に居なくなっただけじゃないですか」

「まあ聞いてくれ。この島は、いろんな商人や旅人達が行き交うグランドラインの交差点でな、活発に利用したいらしい」

「それは、良いことですね…」

今より商人や旅人が多ければ、それだけ島への利益が増える。今よりも更に町は豊かになるだろう。

「ああ。しかし商人達からは近寄り難い島だと話を聞く…鬼のせい
でな」

な…？

「皆がこの島をなんと言ってるか、知ってるか？ 化け物が住む島、
罪人を攫う島、等と呼ばれてるんだ」

「…それは…聞いたこと、あります」

つい先日の話したが。

「そうか……罪人があまり近付かない事は良いんだ。だが商人や一
般人は化け物が住んでいるという事で恐怖している。だから、我々
はここ数日、鬼の正体を探った」

「…暇、ですね」

「やかましい」

モモンガは持っていたバックからさがごと書類を引き出し、コ
チラに見せ付ける。

「この島で消え、基地に送られて来る賞金首の海賊達を取り調べ、
その発言の元、皆が口にするのは気絶する間際の白い髪のみだと言
う」

そのリストには、今までシオンが男に引き渡した数十人の賞金首
の資料が記載されていた。

「…しかしな、この資料に乗っているのは、今話題の賞金稼ぎが捕まえたと思われる海賊達のものだ。その賞金稼ぎも別に白髪という訳でもない

気になって部下にこの男をマークさせたのだが、調べれば調べる程、不可思議な事ばかりなのだよ。

夜は酒場で飲み続け、朝は家で寝て過ごしているそうだ。こんな奴が本当に話題の賞金稼ぎなのか、疑ってしまったよ。

しかしそんな事はどうでもいいんだ。一番の謎は、何故この島で消えた海賊をこの男が引き連れて来るのか、と言うことだ。

海軍でも手詰まりになり、捜査を諦めかていたんだ…　しかしそんな中、ある子供が男の家へ寄った時だけ、賞金首を引き連れて来るといっても可笑しな法則があったと分かった。しかもその子供は証言にもあった白髪だった、との報告も受けている」

一枚の写真を見せ付けるモモンガ。
そこには自分が賞金稼ぎの家へと入っていく写真が収められていた。

「ぐくり。と自分が生唾を飲み込むのがわかった。

「…別に、白い髪というのは自分以外にも居ますよ…たまに島に来るおじいさんとか」

冷静に、相手に悟^{さと}られない様に答える。しかし、内心焦っていた。何故こんな資料をたかが子供の俺に見せ付け説明するのか。

「別にごまかさなくてもいい。寝ているのだよ。我々は……君達を」

意味深な笑みを浮かべコチラを一瞥するモモンガ。

…バれている。完全に。

しかも、達ということはヨウやミリアの事も調べ済みかもしれない…どちらにしろ下手に動けない…

「『鬼』の正体にも驚かされたが、その団結力でこの島を守り、数々の海賊達を倒してきた実力にも驚かされた…

しかし、まさかたった一人の『鬼』に滅ぼされていたとは思わなかったぞ」

途端、モモンガの雰囲気ガラリと変わり、身構えるシオン。

「そう身構えるな。コチラとしてもやり合う気はない…ただ『鬼』の実力がどれ程のものか、確かめたかったのだな」

からかわれた…？

しかし戦闘にならなくてよかった。もしいきなり来られたら成す統べなくやられるところだった。

海王類を仕留めた時の傷だってまだ治ってないし、まともな武器だって持ち合わせていないのだ。

小さく息を漏らしホツとするシオン。

「…そんな君に着いた呼び名。我々は当初『白髪鬼』と呼んでいた」

…何処の安西先生ですかそれ…

「『鬼ヶ島の白髪鬼』なんて、巷^{ちまた}ではちょっとした有名人だぞ。そこでだ、一つ…提案がある」

ここまで来ていったいどんな提案をされると言うのか…

僅かに緊張するシオンは、諦めた様にモモンガを見据えた。

「その力、海軍で発揮させないか？」

しかし予想に反して来たのは思ってもみない一言だった。

「…すいません。言っている意味がよく分からないんですが」

「ストレートに言うのだな。そんな君を我々海軍はスカウトしに来たと、そう言う訳さ」

「……………」

「海軍は今人材不足なのだよ。来るべき戦いに備えて、少しでも優秀な人材確保に取り組んでいる。」

君達は何を思っただけで行動しているのかは分からん。しかし、君達の行動を調べさせれば面白い事が分かったのだよ。

島で問題を起こした海賊達が消えた後日、その懸賞金の殆どが必ず島に寄付されている事実」

そんな事まで調べ上げたのか海軍…

本当に暇なんじゃないか？ こんな事に時間を費やすのならもっ

と治安を良くする様に取り組んでほしいんだが…

「もし君が海軍に来说うのなら、軍は全面的に島を援護する腹だそうだ。そうすれば厄介な噂は直ぐに解消されるだろう」

何を言ってるんだこの人は。そんな事したら

「そんな事したら、どうなるか分かってるんですか？ 此処は白ひげの縄張りですよ？ 海軍が下手に関われば…」

「そんな事は分かっている。我々はこの島をどうにかしよう等とは考えていない。だから世間的に援護するのさ」

つまり、この島にとって悪影響な噂を解消してくれると？

そうすれば訪れる人は増え、町の利益も上がる。俺達が戦う意味も無くなる。

「まあ、今すぐ答えを出せとは言わん。

…今日の所はここで引き上げるが、先の話し、考えといってくれよ？」

その場を立ち去ろうと背を向けるモモンガ。

このままあの人は本部へ向かうのか。…そうだ！

「あの！ 一つお願いがあるんですけど！」

海軍はモモンガが戻るとそのまま島から離れて行った。

「シオン！」

海軍が島から離れ、それを見送っていたらヨウが駆け寄って来た。

「ヨウ…ただいま」

「おかえり…って、そんな事より！ 今の海軍と何話してたんだよ！」

やれやれと思いながら先の会話を簡単説明した。

「スカウトされただ〜！？」

話を終えたら驚愕するヨウ。

「じゃ、じゃあお前…海軍に着いて行っちゃうのか？」

子犬の様な目でコチラを見詰めるヨウ。

その愛らしさから頭を撫でたい衝動にかられそうになるがなんとかグッと耐える。

「どう、かな？ でもまあ、今はそんなこと考えていないよ。この島を離れたくないしね」

「そ、そっか」

どこか安心したヨウがホッと息をつく。

「どうしたの？」

「なっ！なんでもねえよ！！ほら、いつもの特訓始めるぞ！」

そのままヨウに引きずられ稽古場まで向かうシオンだった。

沢山の人間に囲まれてるせいか、ケイミーは戸惑っていた。

ケイミーが入っていた樽を、シオンが海軍の船へ持ち運んだからだ。

「に、人魚だ！」

「俺、初めて見た……」

「……良い……」

そんな見世物の様な常態で放置されていれば怖くなるのも当たり前かもしれない。

まるで小動物の様にプルプルと震えるケイミー。

「か」

「『可愛いなあ』」

しかし、そんな小動物的な行動が良かったのか海兵一同はのほほんとしていた。

そして心配そうにコチラを見つめるケイミー。

「大丈夫だよ。この人達ならきっとケイミーを送り届けてくれる」

ケイミーの頭を優しく撫でながら告げ、モモンガに引き渡す。

「会って間もない私が、そんなに信用出来るか？」

「あなたなら、大丈夫だと思ったんです」

原作時、モモンガ中將はハンコックの姿にキュンときたり何気に初^{うぶ}な一面も持ち合わせている。

俺は海軍の中でも割と好きなキャラだったりした。

「不思議な子だ。……一つ貸したぞ……」

「はい…いつかお返ししますんで」

そのままケイミーをモモンガに託し、別れを告げる。

少年と別れ、遠くなる島に向かって少女は口を開いた。

「じゃーねー！ シオンちゃん！ またねーー！！」

少女の声は海に木霊した。

第十七話 出会い式（後書き）

という訳でケイミー出て来たよケイミー。

w i k i 先生で調べた所、ケイミーという子はとても純粹みたいで
すねw

なんでもその性格から海賊のマクロー味に30回以上も捕まり海獣
には20回程食べられているそうですw

そろそろ原作キャラ絡めていきたい時期でしたのでバンバン取り入
れて行くよバンバン。

感想等していただけたら作者のやる気が上がりますので是非お
願いします^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4218o/>

ONE PIECE 『D』越える者

2011年9月27日05時47分発行